

324

403



始



土 X 42

324

403

動 的 基 督 教

LIVING CHRISTIANITY

By Rev. T. MIYAGAWA

宮
川
經
輝
著

Price 50 Sen

324-403



宮川經輝著

動的基督教的

日本基督教興文協會



大正
3. 7. 14
内交

此書は、日本基督教興文協會より發行するものなり。而して本協會の事業は下文に定むる如し。
『日本基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及弘布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず』。

余は我國精神界刷新の爲めに早晚大活動の時機到來すべきことを豫期し大正元年九月より數ヶ月に涉り使徒行傳に基き四十六回の説教を試みた偶本年より向ふ三年間全國協同傳道を舉行さるゝに際し日本基督教興文協會の請に應じ其の中から十五篇を撰び上梓するこゝとなつた、幾分にてても右大傳道に貢獻する所あらば望外の幸福である。

大正三年五月上旬

宮川 經輝 識

使徒行傳に就て

文 序

本論に遡入るに先立つて一寸申上げたことは、是から數ヶ月の間使徒行傳を探つて順を逐うて話をする積りである、就ては使徒行傳なるものは何う云ふ書であるかを、ザツとお話して置く必要があると思ふ、此書物は讀んで字の如く使徒行傳である、イエスが逝去になつて後使徒達が何う云ふやうな人物になつたか、如何なる働きをしたか、然う云ふことが書いてある、即ち使徒達の歴史である、けれども内容を能く調べて見ると、どうもたゞ使徒達の行動の歴史を記したものは思はれない、記者の頭の中には何か一の大なる目的があつたやうである、それは先づ二た通りに現はれて居る、當時の猶太教なるものは幼稚な教であつて、エルサレムに宏壯輪奐の美を極めた神殿を築いて、其宮に於て犠牲を献げたり供へ物をしたり、種々様々なる形式を具へて神を祭り、又猶太人民はモーセの律法に據つてその行狀を正しうし、且つ國を治むると云ふことをやつて居つた、けれども夫れはイエス、キリストが十字架にお釘りになるまでのことであつて、十字架上にイエスが生命をお棄てなされた後は幼稚な形式上のことは悉く排斥して、そして精神的の教、即ち人間の心靈を切開いて行くべき教が必要である、その事に就ては十二弟子の高弟であつたペテロが一番先きに神の示したを受けた、大きな風呂敷のやうなものが天から下つて来た、その中には清い歌類と汚ない歌類とがゴツチャ交ぜに遡入つて居る、其意味はユダヤ人と異邦人との區別を排せよ、即ちキリストの御教へでは凡そ人間の形を爲したものはユダヤ人でも、異邦人でも、誰れでも彼れでも同じやうに信じ得べきものであると云ふ

ことを示されたのであるから、ヤコブ派の方で仰ぎ尊んで居るペテロは、異邦人に傳道する事には同意であつたと云ふことが書いてある、それから七章にステパノが大説教をやつて居る、その大説教も形式の教では可くない、精神の教、即ち人の心靈を啓くべき靈の教でなくてはならぬことを高調し、それが爲にステパノは石にて打ち殺された、そしてステパノの後に起り來つたところのマルコのサウロと云ふ人は、初めの間は猶太教の味方であつて、キリストの教を迫害するまでに力めたが、ダマスコに往く途中でイエス、キリストの教を受けて後は、飄然飄つてイエスの弟子となつた、而も形式の教では可くない、精神の教でなくてはならぬ、ユダヤの教は小學の教である、キリストの教は大學の教である、此大學の教でなければ人は救はれないと云ふことを鼓吹し、之が爲めに大迫害に遭ふた次第が書いてある、ユダヤ教では駄目だ、基督教でなくてはならないと云ふことが、使徒行傳二十八章を一貫せる銀の線である。

ところがマア一ツ深く讀んで見ると、其所に斯う云ふことがある、御承知の如くイエスの後を受け繼いだのは初めの間はペテロでもなければヨハネでもない、イエスの御存命中はまだイエスを信じないで、イエスの死後基督信者となつた、イエスの兄弟ヤコブであつた、このヤコブと云ふ男はマリヤの家庭で嚴かな律法を以て育てられただけであつて、誠に律義な、能く律法を守る人物であつた、キリストの教も信じなければならぬが夫れと同時にモーセの律法や祭典の儀式と云ふものは廢してはならぬと云ふことを主張したものである、ペテロは先きにお話した如く、劈頭第一に神の示しを受けて、ユダヤ人と異邦人との區別は爲ないと云ふことになつて居るが、少し人間が宜い方で、ヤコブ派に大いに擔がれて、旗色が余り鮮明でなかつた、ヤコブ派が一方にエルサレムに根城を構へて居るところに使徒パウロが現はれ出

て、エルサレムの宮殿も駄目だ、宮に於て祭る儀式の必要もない、又今まで守り來つたモーセの律法で人間は救はれるものではない、イエス、キリストがお説きなされたのは靈と眞を以て神を拜することである、キリストがお示しになつた教は律法ではなくて信仰であると主張し始めた、此二派の間には軋轢を生じた、非常なる軋轢を生じた、其の非常なる軋轢を生じたと云ふことは、加拉太書を讀む者は能く知つて居る、そこで使徒行傳の記者は大いに心配をした、キリスト此世を去り給ふた後の教會に於てヤコブ派とパウロ派が争ふた、儀式派と精神派が争ふた、然う云ふことが天下後世に遺つては所謂玉に疵である、どうか斯う云ふ歴史は消したいものであると云ふの考からして、此二つの派が争ふたことは天下隠れなきの事實であるからして、之を抹殺することは出来ない、そこで争はあつたが幸ひに神の恵みに依つて此二つの派が調和したと云ふことを、使徒行傳の十五章に大書することになつた、今一つの線が引張つてある、それは靈的活動と云ふことである、此事に就ては本論でお話をするから今は言はない、この三つの大いなるものが使徒行傳には録されてある、そして其筆を執つた者は誰れかと云へば路加傳の記者ルカである、これは誰れがどう云ふても昔から考へられた如くルカで、彼れに相違はない、本書中に、我儕と云ふ部分が澤山あるが、この部分だけはルカが手記した日誌である、そしてこの日誌を基礎として誰れか本傳を書いたのであらうと云ふ説もあるが、能く調べて見ると、全部悉くルカが書いたものと思はれる、ルカと云ふ人は希臘語の達人で、能く文章があり、そして又歴史的の頭腦を有つて居つた人であるから、路加傳を書く時にも多くの材料を集めて、その中から撰拔した史料を以て書いたのである、同じくルカが、キリストの死後初代教會に續出したところの事實を集めて、本書を著したものであると思はれる、若し此使徒行傳がなかつたならば、或は使徒時代のことに就て數十冊の異つた使徒行傳

が書かれたかも知れない、流石は歴史家のルカである、流石は能文家のルカである、其ルカが使徒行傳として書いたものが完全であるから、……殆んど完全であるからして、使徒時代の事を書く必要がなかつたものと見えて、この外には斯う云ふ類の書物は出なかつた、して見るとルカが基督教會に貢献した所は頗る多大であつた。

私か本傳を撰んで説教するやうになつたのは今日の日本は活動の教會を要するからである、基督教者であるかないか、夢か現つか分らないやうな信者が日本に十萬居つても百萬居つても、何等日本の精神界に貢献する所はない、使徒行傳を學んで、昔使徒達が活動した事蹟を倣ふ爲ではない、我等自らが進んで茲に活動の教會を造りいよいよ活動して止まないところの基督教者が出来て、其感化を日本全体に及ぼしたいからである、何うかその責任の重いことを御自覺になると共に、祈り求めて自ら活動的な信者となり、活動の信者が集まつて、茲に活動の教會を造ると云ふことに御奮勵を願ひたいものである。

目 次

第一章 初代教會の靈的發展……………一

第二章 眞正の勇氣……………一五

第三章 可能性の發揮……………三〇

第四章 偽善の信徒……………四三

第五章 殉教者とその死榮……………五七

第六章 奮闘的教會……………六八

第七章 一生の大革新……………八五

第八章 獄中の聖者……………一〇一

第九章 亞細亞より歐羅巴へ……………一四

第十章 聖者と權利……………一八

第十一章 バウロの大説教……………一四一

第十二章 聖者と労働……………一五七

第十三章 基督信者と聖靈……………一七三

第十四章 聖者の勇奮……………一八六

第十五章 聖なる精力……………一九九

目次終

動的基督教

宮川經輝

第一章 初代教會の靈的發展

祈禱

恩寵に富ませ給ふ天の父よ、何の幸か此所に六名の兄弟が罪の世を脱して正義に移り、暗黒を離れて光明に就き、死を遁れて生命に入らんことを希望し、己が力にて到底救を全うする能はざることを自覺し、遂にキリストを救主とわが理想と頼み、之に頼りて生命を全うせんと欲して、茲に洗禮を領するに至りましたことを誠に有り難く感謝致します。主よ、此中には痛むる程に色々苦悶をなし、心配をなしたる者も有らんかと存じます。我等人間、この世を渡る間には十字架なき能はず、苦痛なき能はず、此十字架に依り、此の苦痛に依りて、初めて我等が全うせらるべきものなることを知りませども、斯くの如き苦痛に遭遇ひます時は、實に人世を果無みまして、或は此世を去る方が優なりと思ふが如き場合もござります。願はくは重きを負ふ者、疲れたる者はわれに來れ、我れ爾曹を息ませんと祈り給ひし主イエスの同情ある聖言葉、同情ある御心に信頼致しまして、喜悅あれば主の聖前に感謝し、悲痛あれば主



に頼り頼りまして、どうぞ人世を渡り行く間にいよくその人格が高まり、その意思が堅固になり、如何なる場合にも
屈することなく、撓むことなく、四圍の境遇に打勝ちまして、遂に主の聖前に凱旋を奏するに至るやうに、御助け御導き
あらんことを希ひ奉る、殊に今日洗禮を受けましたる青年達は、前途に輝ける希望を有せる者に御座りますれ
ば、彼等の前途亦誘惑の多きことを豫想致しまする、願はくは主よ、誘惑に遭せ給ふことなく、常に悪より救ひ出し給
ふて、苦戦奮闘主の聖前に信仰に由れる、愛に由れる人格を磨き立てまして、勝利の生涯を送る者と爲さしめ給は
んことを希ひ奉る、他の教會に於て洗禮を了し、今日に至るまで救養を受けたる姉妹達が、今我等の中に加り來
りしことでござります、何うぞ我等は之に依りて力を得、姉妹達はいよく心を盡して聖國發展のため大いに磨き大い
に養ふと共に、其家庭に於て主の御光輝を現はして、四邊の人々に大なる感化を及ぼし得るやうに御助けを與へ給へ。
何うぞ教會員各自が、今日十名の兄弟を得たることを聖前に喜ぶと共に更らに聖前に活動致しまして、來ら
んとする日には之に優れる福音の實を聖前に捧げ得るやうに御助けあらんことを、主イエスの聖名の爲に希ひ奉り
まする。アーメン。

彼等常に使徒等の教訓をうけ交接をなしメソを學ぶこと、祈禱とを務む、是に於て敬畏人々の心に生ず又使徒等に託て
許多の奇跡と休徵おこなはれたり。(使徒行傳第二章第四十二—四十三節)

前回にお話いたしました如く、五旬節の日に使徒ペテロの説教を聴いて教へて這入つた者が、凡
そ三千人あつたと云ふことである、三千人と云ふは多過ぎる、けれども一千數百名は確かに

這入つたであらう、兎も角百二十人を以て形造られた教會が、一躍して凡そ十層倍一千二百
人或は十五層倍二千になつたかも知れない、その二千ばかりの者が皆悉くエルサレム
に留まつたのではなくして、所々方々から集り來つたものであるから、お祭が済んだらば各
自家路を指して歸つたものと思ふ、エルサレムに残つた者が何れくらゐあるか想像がつか
ない、けれども數百名は確かに有つたらうと思ふ、故郷に歸りたいと思つた人々も、新たに洗
禮を受けたが、未だ基督教の奧義が充分に腹の底に分らないからして、暫く滞在をして居つ
た者があるかも知れない、何にしても百二十人が澤山の數に殖えたところからして、使徒達
は是れは一時の感情で、胸板に釘を打たるゝばかりの思ひがして、遂に決心して教へて這入
つたけれども何等教養が出來て居らない、何等訓練が出來て居らない、此儘に放つて置いた
ならば一人去り二人去りして、元の奎阿彌、百二十人になつて了ふかも知れないと云ふこと
ろから手分をして、何うしても訓練をしなければならぬと云ふことになつたらうと思ふ、教
へに入つた者も、如何にも己れは感情に動かされて決心したが、何か自分の心の中に確かな
る物を捉へて居るかど内自ら省みて、どうも是と云ふものが腹の中には無いので、何うかし
て深い所を學びたいと云ふ考になつたのである、今日洗禮を受けられた人々も決心はして

教に入つたが、さて何を握つたかとお尋ねになつたならば、まだ「覺束ない」と云ふ感が起るだらうと思ふ、誰しも洗禮を受けた時分は然う確かなものを握つて居ない、不肖私の如き者も洗禮を受けるは受けたが、其時のことを考へて見ると幼稚未熟、是れと云うものは握つて居らなかつた。

そこで茲に其訓練に就て四ヶ條を書き立て、ある、第一は常に使徒達の教訓を受けた、ラゲーは「堪え忍びて使徒達の教訓を受け」と書いて居る、希臘語の方を調べて見ると、他の事を打忘れて専心一意使徒達の教を受けたと云ふ意味になつて居る、他の事を打忘れて専心一意使徒達の教を受くると云ふは、如何にも面白い意味である、然うなくちやアならぬ、使徒パウロは「ダマスコに往く途上、キリストの召命を被つて、三日三夜考へて遂に決心してお弟子になつたのである、お弟子になつたが、さて何か捉へて居るかと思つて尋ねて見るとどうも充分でない、そこで亞刺比亞の野に退いて三年の間一人でキリストの教を調べた、學んだ、味ふた、其點が大切である、三千人が信者になつた時代は舊約聖書は既に備はつて、希臘譯まで出来て居つたけれども、新約の方は一頁も一行もまだ出来て居らぬ、何うしたら宜しいか、三年の間イエスに親炙し、イエスの行を見、イエスの言葉を聴き、イエスの意識に觸れた

弟子方が居られる、又七十人の弟子も居れば、イエスの母親も、マгдаラのマリヤも、ベタニヤのマルタマリヤも、親しくキリストに觸れた人々が居らるので、其百二十人の人々を取圍んで、これは何うであらうか、彼れは何うであらうか、一體イエスと云ふ方は何う云ふ顔貌の方であつたか、どんな風采の御方で居らつしやつたか、又イエスの御説教の肝腎要な所はどこであつたらうか、學者やパリサイ人の如くならずして、權威を以てお話になつたと云ふは何う云ふ意味だらうかと尋ねる、さうするとお弟子方は、自己の経験に基いて滔々と説き聽かせたものである、中には聖母マリヤを捉へて、イエスがお生れなされた時の事より幼ない折りの事までも伺つたであらうと思ふ、開云ふ趣味のある活きた教訓を學び味ふことであるから、總ての事を打忘れ、心を専らにして研究をすることが出来たのであらう。

私共は今日活きた使徒達に觸れるとが出来ないけれども、新約全書には夫れが備はつてある、日本譯も出来て居る、聖書の註釋も不完全ではあるけれども、一と通り出来て居る、先輩と名のつく人々も、三十年四十年此教へに依つて訓練された人々も居る、學ぶと云ふ此方の熱誠が有りさへすれば學ぶ途は充分に着いて居るのに、不幸我日本の信者は學ぶ心が乏しいけれども、一ツ喜ぶべき事は過ぐる週間の月曜日から金曜日まで、朝の六時半から七時半まで

此教會で早天講演會が開かれたので、五十名の兄弟姉妹が集つて、馬可傳に基いて主イエスをお學びになつたことである、百人二百人の人々が集つて學んで欲しいと云ふが私共の願望である、けれども皆な夫々に用があつて、朝早くから然う澤山集れない、けれども五十名の兄弟姉妹が集つて學ばれたと云ふことは、大いに人意を強うするものがある、學ばなくちやアならぬ、學ばずして得らるゝものが何所に在るか、何事でも人間は學ばずして上達をする者が無い、ところが諸君の中には、宗教だけは棚から牡丹餅、手をすけて待つて居れば落ちて來る如くお考へなさるゝのは、是れは間違ひである、誤り是れより大いなるはなし、宗教のことは他の事に優つて學ばなければ、味はなければ、研究しなければ、咀嚼しなければ、其極意は分るものぢやアない、堪え忍びて使徒達の教に耳を傾ける、此の堪え忍ぶと云ふ二字がなくては分らない、成程初めに聖書を二三度開けて讀む人もある、馬太傳の半分くらゐ讀む人はあるけれども堪え忍びて學ぶ熱誠がないから直きに廢める、三年、五年、七年、十年……私のごときは三十幾年堪え忍び、さうして尙ほ足らないのを覺えて、毎日心を新たに「神よ、ごうぞ學ぶ精神を増し加へ給へ」と云つて、祈りつゝ、聖書に向つて居る、ごうか諸君と共に此の教訓を得たいものである。

それから其次には「交際を爲して」と書いてある、ラダーは「共同生活」を爲すと改譯をした、廿六節には長い時間心を協せて神の聖前に居ると書いてある、私は當時の状態が眼に見ることく偲ばれる、遽かにお弟子入りをしたる即ち今まで悲しき辛き怨めしき浮世なりと觀じて、寂しい月日を送つて居つたところの人々が、天の神は我等の父にて在すと云ふことを悟り、イエス、キリストは吾教主にして在すことを悟り、而して百二十人の人々は吾靈の友である、吾生命の友である、われを指導するところの教師であると云うことを悟つた時には、孤獨でこの世の中を送つて居つた人が、遽かに温き親類が殖えたやうな心持になつたのであるから、我家に黙として居られない、諸方より集り來つた人々は宿屋か下宿屋に徒然として居る譯には行かない、それで言ひ合さないが此の人々が或はエルサレムの高樓に寄集ひ或はエルサレムの宮の廊下に集つてさうして其所に共同の生活をなしたと云ふは、共に祈りもしたであらう、共に舊約を開いて詩篇を頌うたであらう、イザヤの豫言の書に基いて、成程五十二篇に斯う云ふことが書いてあるから、主イエスは我等の爲に犠牲の死をお遂げになつたであらうと論じた人もあらうし、心を協せて舊約を調べ、心を協せて讚美歌を誦ひ、心を協せて共に祈り、切磋琢磨して長い時間我れを忘れて其所に集つて居つたと云ふことで

ある、私共が熊本で始めて神の召を被つて、聖書を手につけて讀んだ時は、嬉しくてく堪らないやうに思ふて、三日三夜の間は四邊の學生に教を傳へて、或は祈り或は聖書を讀みし居つたことがあるが、丁度エルサレムの信者達は然う云ふやうな意味で、互ひに交りをして居られたであらうと思ふ、今日の基督教會にも亦其共同生活の必要がある、たゞ神の宮に集つて、さうして歌を謠ひ、祈禱をして説教を聴いて、さうして馬車馬の如にズツと歸つて了ふ人がある、さうして其人は何を言ふか「教會に行つて見ても實に淋しいだけであつて、我れに言葉を交はす者もない」と云ふ何故に當方から進んで交り求めないか、何故に當方から言葉を掛けないか、當方に温かなるものがあれば先方にも温かなる者呼び出す、さうして温かなる心と心と相觸れ、温かなる手と手と相接して眞個なる靈の交際に入ることが出来る、共同生活と謂ふは、斯うして共に禮拜をするのも其一つ、又祈禱會に集つて互ひに己が思想を凝らし、互ひに祈り合ひ、或は親睦會を開いて、膝を交へて相語うと云ふやうなことも是れ亦た共同生活である、其の共同生活の盛んに行はるゝ教會は確かに温かなる教會である、家々の集會のごときも是れまた共同生活の一部である、我が教會は夙に此の點に心を用ひて、どうしても信者の交誼を厚くしなければならぬと云ふことから行つて見

て居るが、未だ理想には達しない、尙ほ今後も皆様と共に心を協せて、共同生活を實行して見たいと思つて居る。

それから其次には「パンを擘くこと」と書いてある、これは實に面白い、晚餐を守ることだらうと思ふ人もある、成程當時のお弟子方は主イエスとお別れ申す時に、イエスがパンを擘いて「此は我體なり爾曹の爲に死ぬるから我死を記念せよ」と仰せられた、また葡萄酒を酌み交はしては「是れ我血なり、爾曹の爲に血を流すから記念しろ」と仰せられたのであるから、寄ると觸ると最後の記念を喚び起してパンを擘いて喰つたであらう、けれども諸君！此所にパンを擘くこと、書いてあるのは、簡單なる食事である、日本で云うならば香の物でお茶漬のことである、エルサレムの弟子達が互ひに相集ると香の物にお茶漬……パンを擘いて喰つた、副食物などを用ひずしてパンを擘いて、飲料としては葡萄酒を一杯傾けて互ひに喜んだと云ふ、聖餐を守る意味も含んで居るけれども、第一の意味は簡易なる食事を共にしたことである、使者達は旅人を懇ろにせよと教へられた、簡單なる食物を共にする、人と食事を共にすると云ふことは、偽善が有りさへしなかつたならば、表面を粧ふと云ふやうな體裁が有りさへしなかつたならば、是れくらゐに嬉しい、是れくらゐに楽しい是れくらゐに

親密を増すものはない、けれども簡易な食物でなしに、大きなお膳で山海の珍味を供へて、
 偽善的に宴ふて呉れると云ふ時には、我心の中には其御馳走が山程あつても冷たい感じがする、
 香の物にお茶漬ばかりでも、眞底から喫べて欲しいと云ふの考で出された物であるならば、温
 く戴くことが出来る譯である、私共は他人に御飯を宴れたと云ふことは、何時まで経つても
 忘れることがない、おのが卑劣坊であるからと思ふ人があるかも知れない、併し私共は諸君
 の前に告白する、私は極めて食物には淡泊なる者である、別に何が喰ひたい彼が喰ひたいと
 思ふことはない、けれども愛の心から供へられた食事は、其食事と共に先方の人の心を食ふ
 のであるから、何時まで経つても忘れられぬ、想ひ起す明治九年の九月初旬、東京丸と云ふ
 船に乗つて神戸の港に上陸をした當時「七一雜報」の發行所であつた中山手のギエリツキ氏
 の宅を訪ねた時に、朝八時頃であつたが讚美歌の聲が聞える、生れて初めて麗しき讚美の聲
 を聞いた、朝の集りをして居つたものと見える、其の集りが濟むと今村謙吉と云ふ人が出て
 来て編輯室に通した、暫く話をして居ると、食事を共にしたいから私の家に来て呉れると云
 はれる私は連れが三四人あつた、遠慮なしに參つた、其時に今村氏夫妻がおばさんと共にす
 き焼きを宴んで呉れた、生れて始めて信者の家庭に這入つて其信者の家で心盡しのすき焼き

を宴べられた時に何か知らないが其家庭の人々の温かなる愛情を、食物と共に喰つたやうに思
 ふた、私の心は今村家の人々の心と結び、今村家の人々の心は私共書生の心と結んだであら
 うと思ふ、石井十次君が孤兒院を興したいと云ふ時に大阪に歩つて来て、或牧師の家を訪ね
 て其所で粗末な食事を宴べられたと云ふ、爾來三十幾年の星霜を経て居るが、毎も石井君は其
 事を話し出して、此孤兒院の相談を持込むと、蜂を拂ふやうに人がした時に、或牧師の家庭
 にて飯を宴んで、而も賛成して呉れたと言つて非常なる力を得たことと言つて居られる、何
 うか私共信者の間には、パンを擘く、而もパンを擘くと云ふ簡易なる意味に於てお互ひに愛
 を飲み交はすと共に、主イエスの死を記念していよいよ茲に靈の交際を固うして行くことを
 努めたいと思ふ。

最後には簡單に「祈禱を努め」と書いてある、信者の實驗に於て、何が六つかしいと云つ
 ても祈禱の妙所に入ることが一番に六つかしい、私共の如きは幾度祈禱を廢めやうと思つた
 か知れないけれども、當時の新たな道に入つた者は祈禱を努めた、ペテロ、ヤコブ、ヨハネはイ
 エス、キリストが終夜山に往つてお祈りなされた事を知つて居る、キリスト、イエスがゲツ
 セマネの園で三度びまでも祈禱を爲された事をも目撃して居る、けれども新たに教へに這入

つたところの者は祈禱の妙所が分らない、エルサレムの宮で九時と十二時と三時に儀式的の祈禱をしたことがある、けれども静かなる部屋に入つて、我心の奥を開いて天の父にお交りをしたと云ふ経験はない、又同じ心の人々が互ひに相集つて、祈禱文に依らずして眞底から湧き出す其温かなる心を以て神に祈禱をしたと云ふことは知らない、百二十人は祈禱の妙所を得て居つたであらう、此の百二十人が心を協せて祈禱をせられる、その祈禱の趣き、その祈禱の味ひ、又祈る時の人々の顔の輝きなどを見て、ア、祈らずして居られない、我等は祈禱の妙所を得たいと思つて祈禱を努めた、堪え忍んで使徒達の教訓に耳を傾け、共同生活を爲し、パンを擘くこと、祈禱とを務めた、此の四つが、初代教會の靈的發展を致す上に於て非常なる養ひとなつたものである、而して其結果は何うか、敬畏人々の間に生ずるある、敬の字と畏まること云ふ字が書いてある、私は之を讀んで如何にも然うであつたらうと思ふ、百二十人は勿論のこと、新たに教に入つた者が今お話するが如く日々祈り日々キリストの逸話を聞き御教訓に接してさうして相固つて、共に交際をして居るものであるから、どの人も神の聖前に在ると云ふ心を生じた、神共に在ますと云ふ敬畏の心が各々の裡に生じた、それでバリサイ人も學者もヘロデの僭叢も、基督信者を見て忌々しい奴だ、打潰して遣りたい

と考へて居つても、ペテロを見、ヤコブを見、ヨハネを見、マグダラのマリヤ、ベタニアのマリヤ、ルカやシラスや、さう云ふ人々を見ると神々しい顔で以て如何にも天を敬ひ畏れると云ふ眞面目の精神に充されて居るから、誰れも手を下すことが出来なかつた、基督信者は然うありたい、實に眞面目、實に熱誠、眞から神様に接觸して居ると云ふことであつたらば、逆も之を冒すことが出来ない、それは偉いものである、女の信者が若い馬鹿男に危く毒手に罹らんとした時に、跪いて天の父に祈りをした、その若い男はブル／＼慄へたと云ふ、恐怖は神共に在ますと云ふ所から来る、眞面目なる態度は馬鹿者を退けることが出来る、ヒウゲノーの人々が苦しめられた時に、一人の牧師が官軍に襲はれ、その官軍に襲はれた時に自分の穴倉の前に出て、月を浴びて祈りをして居つた時には、兵隊に打つても、兵隊が火蓋を切ることが出来なかつたと云ふ、敬畏人々の心に生じた、現在の日本の基督信者は何うか、我等も初代教會の信者の如くこの四つものを養ひ得て、さうして御互ひ銘々が先づ神共に在ますと云ふ敬虔の念に充されて、それが懸て人々を畏れしむると云ふところまで遣り付けたいものである、其所まで遣り付ければ、基督教の權威は確かに我日本を征服するに餘りありと思ふ、どうぞ諸君と共に、初代教會の靈的發展は斯くの如く灼然であつたこ

とを學んで、少なくとも吾教會は斯く有らねばならぬと云ふ考で、大いに磨き大いに養ひた
いものであると思ふ。

第二章 眞正の勇氣

祈 禱

恩寵の主よ、今日我日本に於て政治家も宗教家も教育家も又實業に従事する者も、最も欠陥を感ずるところのものは、正義の念と眞正の勇氣ならざるかと思ふ事でございます。御召を蒙りたる我等基督者の間に於ても、此二つの者の欠乏を感じ居る事でございます。どうぞ今朝は二大使徒が如何なる勇を鼓して、天下後世にも響き渡るべき武者振をなせしかを學び、凡そ御召を蒙りたる者は老若男女貴賤上下の隔てなく、丈夫の如く強かれとの言葉を思得して、如何なる場合にも敵に後ろを見せるが如き事なく、言ふべき事は憚らずして言ひ、爲すべき事は決然としてなし、主の子供として相應しき言動をなし得る者となさしめ給はん事を冀ひ奉る、どうぞ主よ、今日一人の武士の死に酔へるところの國民が眼を覺して只人の勇しき死を諱ふに止まらずして己れ自から進んで義の爲に戦ふやうに、御力を添へさせ給はん事を冀ひ奉る、獨り今日の我日本宗教界のみならず、世界の宗教界に最も欠乏してあるものは正義の勇でございます。主よ、何れの國に於きましても御召を蒙りたる者が義に勇むやうに、上よりの御引立を興へ給はん事を冀ひ奉る、今朝此所に會合せる者の中に瑣細の事柄の爲に女々しき思ひをなし、意氣沮喪し、實に主の僕たるに相應しからざる思ひを以て項垂れ居る者がござりまするならば、之を勵まし之に力を興へ給ふて奮闘努力する勇氣を興へ給はん事を冀ひ奉る、主よ、今日京都に開かれ居る集會の上にも此精神を興へ給ふて集り居れる者が正義に勇むやうに上よりの御力を添へさせ給はん事を、主イエスの御名の爲に冀ひ奉る。アーメン。

遂に彼等を召て更にイエスの名に就て語ることを爲なかれと戒む、ペテロ、ヨハネ彼等に答て曰けるは神に
聽よりも愈て爾曹に聽ば神の前に在て義たらんか爾曹みづから之を判よ、われら見しところ聞し所のものは言ざる
を得ざる也人々その所爲に因て神を崇たれば彼等民を畏れ此二人を罪するに由なく更に之を恐喝して釋せり。

(使徒行傳第四章十八—二十一)

使徒行傳と路加傳とは同一の記者の手に成つたもので、ルカ其人である、路加傳の二十二章
の五十四節から六十二節には、イエスが祭司長の邸にて苦しめられ給ふ時に、ペテロが三度
まで主を知らないと言つた、實にペテロは曩に、イエスの爲には一命をも棄てますと氣張て
置きながらお前もイエスの仲間であらうと云つた婢の一言に辟易して、私はイエスを知らな
いと答へた、恁云ふ臆病者はないと云ふやうに書いてある、さうして鶏が鳴いた時にペテロ
は外へ出て痛く哭りと附加へてある、路加傳ではペテロに關する記事は是が終りであるから
若し使徒行傳が書かれなかつたならば、天下後世ペテロは臆病者であつたと云ふ事に止まる
どころがルカは初代教會の事を書きたい精神で使徒行傳を書いたのであるが先達てお話を致
した如く、使徒行傳を書いた目的は、エルサレムを根城として居るヤコブ派と、スリヤの
アンテオケを根城として居るパウロとの間に衝突があつたと云ふ事は事實であるが、夫が天

下後世に傳はつては非常なる害だと思ふて、夫ほどの衝突ではなかつた、仲直りが出来たと
云ふ事を書く積りであつた、扱パウロ派の大立者は無論パウロであり、ヤコブ派の大立者は
ヤコブであるべき筈だが、夫では一寸パウロと相撲が取れない、そこにはお弟子の中で年長
者……故參、而も高弟であつたペテロを持つて來なければならぬ、パウロに相對し得る者は
ペテロの他はない、臆病なペテロを持つて來ては千難萬難交々來つても屈せず撓まず、三十
幾年の間教の爲に奮闘したパウロに對比しては到底見劣りがする、そこで路加傳にあるペ
テロが臆病な記事を打消すと云ふ意味ではない、臆病な振舞は事實であつて臆病であつた、
其事實を打消す事は出来ない、幸なるかな其ペテロが五旬節の日に聖靈を受けて以來實に
世にも類稀なる勇しい振舞を致したのでルカは大にペテロの爲に椽大の筆を振ふた。
そこでルカは第二章に、ペテロの説教に依つて三千人悔改めたとやつて見た、其次には宮の
美門に於てペテロとヨハネとで跛を立たしめたと書いた、夫だけでは臆病なペテロを引起
すには足りないので第四章に於てペテロとヨハネは、斯う勇しい武者振を現はしたと云ふ事
を書いたのである、此對照は實に妙である、路加傳二十二章の卑怯なるペテロと、使徒行傳
四章の勇敢なるペテロ、時日は僅か五十日より違はない、其僅か二ヶ月以内の間に臆病者が

一躍して、眞の勇者となつたと云ふのである、そこで私は一つ研究して見たい心になつた、臆病者が化して眞個な勇者になるか何か、イヤペテロもヨハネも生來の臆病者であつたか何うか、此ペテロを研究して見るに、何うも生來の臆病者ではないやうに思はれる、何となればヨナの子シモンと云ふ漁夫、兄弟のアンデルの誘ひに依て驟然立つてイエスの弟子になつた、當時イエスは大工の仕事を投棄して預言者として世に立れたばかりの方である、誰もイエスの味方をする者はない、生れ故郷のナザレ人もイエスに反對して居る、學者もバリサイ人も反對して居る、誰も彼れも反對して居る、其眞中で兄と弟と二人眞先に進んで、生命を賭けてイエスの弟子になつたと云ふのであるからして、是は生來の臆病者でない證據である夫から何事にも前に飛出す性質があると云ふことは豫てお聞及の通りである、けれども何かイエスが御諮問なさるゝ時に、他の弟子達心には思つても口を噤んでやう云はぬ、年長者であつたと云ふ故もあらうが毎も眞先に口を切つて、時には賞められ時には叱られたのはペテロである、生來の臆病者では到底開云ふ譯には行かない又イエスが弟子方の船に近づいて居らつしやつた時に、海に渡つてイエスの傍に行きたいと云ふ希望を起した、イエスが来いと仰しやつたならば、直きに海の中にザンプと飛び込んだところなどは何うも生來の臆病者と

は思はれない、何方かと云ふと矢張り勇氣のある人であつた、ところが此勇氣は是は血氣の勇、近頃の語で申せば蠻勇である、蠻勇……血氣の勇、此勇氣は何うも熱の發作のやうな工合に、或時は昇るが或時は沈むと云ふ虞がある、アツと掛聲をするとハツと進んで行く、考へ込むとバツタリ其勇氣が落ちる憂ひがある、即ちペテロは夫である、先生、貴方が若し殺されなさるやうな事があつたら私も御一緒に、斯う云ふ時はエライ勇氣、愈々先生が捕はれたら逃げもされない、多少勇氣がある、従いて行く、さうして祭司長邸に踏込んだが、何うも夜は深くとして更けて来る、先生は酷い目に遭つてござる、不圖力が脱けてしまふた、そこでお前もイエスの弟子だらうと星を指された時に否そんな事はございませぬ、夫もお前は其の仲間であらう、否开ちやアありませんと云つた、ヨハネは何うであるか、ヨハネも生來非常な血氣の勇に富んだ人である、其證據にはヤコブとヨハネがイエスのお弟子入に來た時に、イエスは一目見て雷の子と仰せられた、私共の同級生に某と云ふ人がある、此人はデヤガランと云ふ綽名を附られた、ラン雷の子、何か一つ氣に食はぬ事があると自分の部屋に歸つて室内を狂ひ廻る、さうして其所に半紙でも何でもあつたらサツと裂いてしまふ、何にも斯うにも押へる事が出來ない、ヤコブとヨハネもチャガランの一種である、路加傳の九

章の五十節以下を見ると、イエスのお供をしてサマリヤの一郷に入らうとした時郷人が拒んで入れなかつた、さうすると此雷の子、チャガラン先生は昔の預言者のやうに天より火を召降して、此郷を焼打しやうとやアありませんかと提議した、イエスは直きに退けておしまひになつた、天より火を召降して焼いてしまふと云ふ、其點が蠻勇である。

ところが此ヨハネも卑怯な振舞をして居るところがある、約翰傳の二十章の始めを讀んで見ると、マグダラのマリヤが黎明に歩つて来て主イエスがお甦りになつた、私が墓に行つて見たところがイエスの屍體は墓にありませんお甦りなされた、さうかと云つてペテロとヨハネと走り出した、ヨハネの方が若いからして墓にはペテロよりも先きに走り付いて墓の中を見るとき、薄暗い墓の中に何か白い物が見える、そこで縮かんで「聖書には縮かんでとある立つて居つたとは書いてない」屍を裏し布を置けるを見たれども入らず」と書いてあるが、薄暗いところに白い物が見えたから、何うせ縮かんで居つたのだらう、次に斯う書いてある「シモン、ペテロ彼れに後て來り墓にいり裏し布を置るを見たり、是に於て先に墓に來れる弟子も入りこれを見て信せり」此所ちやアペテロの方が強かつた、墓の中にズツと這入つた、先輩のペテロが這入つたからしてヨハネも後から狐鼠々々從いて這入つた、雷の子と稱へらるゝ

ヨハネ、血氣の勇に逸つて居るヨハネが、イエスの墓に行つた時にはその臆病を現はした、矢張り熱の發作、ソレと云つて走つて行つた時には實に血氣の勇、白い物を見た時に吃驚して縮かんだ、諸君、开云ふ事はあるまいか、若い時にはよくある事だ、此蠻勇は、實は餘り當にならぬ、當にならぬからして是は價値のないものである、武將傳などを讀んで見ても同じやうな事が書いてある、沈勇でなくちやア不可と書いてある、沈勇とは沈だ勇、落着き拂つて居る、イザ鎌倉と云ふ時には極めて沈着な態度で出掛けて行つて、千軍萬馬の中に立つても、彈丸雨飛の間を縫ふて通つても恐れぬ、是は實に沈勇の然らしむるところである、ペテロ、ヨハネは何うであるか、殊にペテロは餘りに昇り降りが烈しいからして、私はペテロを研究して見たいと思ふた、ペテロはイエスが鶏鳴かざる前に三度我を知らずと云ふだらうと仰せられた、其言葉を思ひ出して外へ出て太く泣けりとある、只泣いたと書いてちやアない、太く泣けり甚く泣いた、蠻勇を以て誇つて居つたペテロは、卑怯にも先生を大切の場合に知らぬ、イザ鎌倉と云ふ時にブル／＼顛ふて逡巡したのと同じ事、武士としては腹掻切るどころであらう、ペテロは泣いた、太く泣いた、男泣に泣いた、何うした臆甲斐ない、何うした臆病な、先生の爲には生命賭で行くと云つて置いて此爲體何としたか、只もう泣くより

他にない泣いたのである。

ところが諸君、此涙は心底から流した、此涙は蠻勇を化して沈勇たらしむるに至つた、實にエライところである、凡そ五十日、泣の涙で失望落膽の中にペテロは日を送つた、何うも相弟子に對しても面目ない、世間に對しても心耻しい、況して甦り給ふた主イエスの前には頭は擡らない、そこへ持つて來てイエスが三度までもヨナの子シモン、汝は我を愛するかとお尋ねになつた、彼の教訓もある、起つても居ても居られない、此所で引込んでしまつたらばペテロはなくなつてしまふ、生きて居つても死んだ人、腰抜になつてしまふ、實にペテロは蘇生つて來た、ヨハネと共に蘇生つて來た、ヨハネも何うも自分の卑怯であつた事を自覺したのであらう、二人が卑怯な振舞をやつた、其二人が是だけ勇んで來た、衆に先だつて汝等が無法の手を以て殺したイエス、キリストは眞個な神の子である、眞個な救世主である、其證據には甦り給ふたと説教をして歩く、七十子會議の人は怪からぬと云つて擱へて獄に入れたところが、多くの人々は何うもペテロとヨハネはエライ變つた、エライ變りやう、無學な卑しき民ちやアないか、彼のペテロの風采を見よ、彼のヨハネの人格を見よ、學問も何にもした事のない卑しい漁夫が何うしてあんなに立派になつたか、何うも美の門で跋を立たせた

何と云ふのは、是は實にエライ事だ、何うしたんだらう、斯う云つてペテロやヨハネのお味方をする、七十子會議の方では此まゝにして置いたら衆人皆我々が殺したイエスの信者になつてしまふ、イエスの信者になつたら我々はどんな目に遭ふか知れない、是は一つ何うしても二人をやりつけてしまはねばならぬと思つた、けれどもやりつける事が出来ない、二人の人格はあれくらゐに立派になつて居る、其人格をやりつける事が出来ない、到頭相談をして二人を呼出して脅嚇したと書いてある、諸君、譯の分らない人、利害の念に強い人、开云ふ人は脅嚇事が出来る、金も要らぬ名譽も要らぬ位も要らぬと云ふ人間は、何ぼ脅嚇しても脅嚇しは利かない、ペテロとヨハネ……先きに卑怯未練の振舞をしたペテロ、ヨハネならば脅かさるゝであらう、聖靈を受けて眞正の勇者と變つたペテロ、ヨハネには脅嚇は利かない、實に七十子會議の連中は眼が見えない、二人を呼出した、呼出しは呼出したが七十子會議の連中も二人の人格に驚いた、慙う云ふ事がある、無學の卑しき者なるを見て憐れんだ、其二人が忌憚るところなく恐ろしい會議の前に立つて泰然自若として居る、何かと云ふやうな實に泰然自若たる態度に、七十子會議の連中は吞まれてしまふた、吞まれるは吞まれたが、言がゝりだからして云つて見なくちやアならぬと云ふので、遂に彼等と呼ばれて更にイエスの名に

就て語ることを爲すなかれと戒めた、恚う云ふ言葉を聞いた時に又ヨハネが黙つて居られやうが、憤然として答へた、神に聴くよりも愈りて爾曹に聴かば神の前に在て義たらんか爾曹みづから之を判定よ、私は此一句を讀んだ時に實に肉躍り、血養えるやな心持がした、是は眞正の勇氣の源だ、他の事はもう云ふ必要はない、神の前に義たらんか、一句眞に情夫を起たしむるものがある……我々が信するところを曲げて、諸君の云ふが如き俗論に耳を傾くるのは、神の前で夫が正しい事であらうか、諸君、眞正の勇氣は是から沸いて來る、昔から今日まで或は君の爲或は國の爲と云ふ時に、是は君國の爲に正しいかどうかと云ふ事を考へるのが根本問題である、宗教家が種々脅かさる、時に、是は神の前に正しいか正しくないかと云ふ事を考へるのが根本、今日の我日本は實に困つた日本になつた、何故困つた日本になつたかと云ふと、神の前に義たらんかと云ふ考へる者は一人もない、是は利か不利かと云ふ事を先きに考へる、是は損か得かと云ふ事を先に考へる、實に腐れ果てた民族と云はざるを得ない、亞米利加の九千何百萬と云ふ人間の中には、神の前に義か不義かと云ふ事を考ふる人間が尠なからずある、英國の英國たる所以は、神の前に義たらんかと云ふ事を考へる人間が亞米利加よりも多いからである、損か得か、利か不利か、名譽になるか不名譽

になるか、新聞が笑ひはせぬか、新聞に悪く書きはせぬかと云ふやうなことを考へてやつて居る人間が多い間は我國も駄目である、奈落の底に沈んだと云つても宜い、何うしても義氣を高くすると云ふは、千古萬古變らないところの眞である、罪は民を耻かしむると云ふは、是れ又千古萬古變らないところの眞である、利か不利か、損か徳か、名譽か不名譽かと云ふやうな事を考へる國になつたら其國は辱かしめられる、私が國と云ふ事を申せば、諸君は問題が餘り大き過ぎると仰しやるか知れない、然し諸君が職業を撰ぶと云ふ事も同じ事、此職業は正か不正か、正なればやらう、不正なれば儲かつてもやらないと云ふ事にならねばならぬ、結婚する時にも此男は正しい男か正しくない男か、金があるかないかと云ふ問題ぢやアない、人品が善いか悪いかと云ふ問題ぢやアない、第一の問題は此男は正しいか正しくないか、妻を貰ふと云ふ時にも、此女は縹緞が宜いか悪いかと云ふのぢやアない、お土産を餘計に持つて來るか來ないかと云ふ問題ぢやアない、此女は正しいか正しくないか、而も神の前に於て義たらんか、此結婚は正しい結婚であるか正しくない結婚であるか、其點を考へる、何か此世の中に事業をやらうと云ふ時にも、其事業が正しいか正しくないか、神の聖前に正しいか正しくないかと云ふ事を考へて、何うしても之は正しい事、縦から見ても横から見ても

是は正しい事だ當然なすべきの事だ、斯う定まつて来たならばそこに覺悟が生ずる、正しい事であるなら決行なくちやアならぬ、誰が何う云つても是は正しい事、神の前に正しい事だからして貫かなくちやアならぬと斯うなつて来る、夫で私が先進國に於て時々偉い人物が出て来ると云ふのは外ぢやアない、神の前に義たらんかと云ふ考から、損得の問題、利害の問題、名譽不名譽の問題を度外視して義か不義か、義ならやらう、不義ならやらないと云ふから、エライ我日本にも開云ふ人間が出来事を希望する、諸君、一つ奮つて毎日々の事に於て、神の前に義たらんか不義たらんか、先づ神の國と其義を求めなくちやアならぬ、夫から割出して行くと眞正の勇氣が生じ来る。

其次は更に二人が云つた、我等見しどころ聞きしどころは證明せざるを得ない、眞正の勇氣は實驗から出て来る、新たに兵を募つて、さうして日露の戦争に廻す、何ぼやつても打殺されてしまふ、煽動られて血氣の勇に逸つて出掛けて行くとポーンと撃たれて死んでしまふところが幾度も、矢玉を潜つた人間であるとチャンと實驗が附いて居るからして、此所は頭を出されないところ、此所は自分の死ぬべきところぢやアない、此所は一命を惜まなくちやアならぬところだ、イヤ此所は自分の命の捨場所だと云ふことを考へて、靜かに當然の處

置をなすやうになれるそうである。開云ふ實驗を経たところから生じ來つた勇者があれば、其聯隊は強い、何ぼ蠻勇を奮つても眞個に熟練を経て居らぬ兵士ばかりであつたらば負けてしまふと云ふのである、靈の戦ひに於ても同じ事、弟子方はキリストの御生涯を見た、キリストの言行を見た、キリストが十字架の上に笑を含んで死を遂げ給ふ状を見た、さうして茲にペテロの如くヨハネの如く卑怯未練な振舞をして、尙苦んで實驗を経た、實驗を経たものだからして、七十子會議の前に引出されても平然たるもの、何も怖るゝところは無い、脅迫、嚇威は利かない、是はもう何を見てもさうだ、謠曲の稽古をする、初めに蠻勇を揮ふて聲を張上げる、サア謠曲を二三月やると何所でも彼所でも唸り出す、瀛車に乗つても宿屋に着いても、朋友が迷惑をするをも介意せずして唸る、一廉の上手の如く見える、さうして其者が晴の舞臺に出たと云ふ時に、何うも震ひ聲でサツパリ謠が出来ないではないか、夫から三年五年の修養鍛錬を経て眞個の聲が出したらば、一寸したお座敷ぢやアやらない、愈々檜舞臺に上つてサア是れからと云ふ時に實に朗々たる聲を發して幾百の人々を酔はしむるやうにやれる、何でも同じ事、演説を一つやつてもさうである、初めは蠻勇を振立て、實に脱兎の如くやる、三十分ほどやると今度は處女の如くなる、後は何を云ふたか意味も何も分らな

くなる、是も五年七年熟練を経て我見しどころ聞きし所は、證明せざるを得ざるなりと云ふ境に達すれば反對があれば反對があるほど、聴衆が騒げば騒ぐほど落着いて来て、さうして人々の肺肝を貫くやうな言葉を發する事が出来るやうになる、此實驗を経て來た眞の勇者でなくちやアならぬ、實驗が眞の勇を生せしむる、私は他の事を云はない、ペテロとヨハネの神の前に義たらんかと云ふ此信念、我見しどころ聞きしどころは證明せざるを得ざるなりと云ふ、此實驗との二つが相合して、此所に眞正の勇者を生じた譯である。

そこで其先は何と書いてあるか「人々その所爲に因て神を榮たれば彼等民を畏れて此二人を罪するに由なく更に之を恐喝して釋せり」二人の人格、二人の嚴然泰然たる態度、即ち眞の勇氣を見た時にはもう手を下す事は出来ない、罪するに由なく、そこでもう一度恐喝して釋したと云ふ、サア諸君が會社や商店や其他の方面に於て、何うも酒を飲まぬやうな奴は何うもならぬと云ふて頻りに脅かされる時に、嚴然たる態度を以て立ち、さうして平素の仕事は人一倍に忠實に勤める、开すると何うも實に惜しい人物だ、宴會で酒を飲まぬくらゐな事を缺點にして彼れを追出す譯には行かない、重役が呼付ける、餘り君は融通が利かぬぢやないか些と融通を利かしたら何うだ、併し職務の方は確實やつて呉れるから……脅かして之を釋せ

り、何うも融通の利かない話何うも此所の店には使はれないと云ふと、夫ちやア一杯飲みませうなどと云ふ人間ぢやア駄目、开云ふ脅迫を受けた時に、ナニ此會社ばかり日が照る譯ぢやアない、俺を追出すなら出すがよい、天涯地角忠實に勤めをやる勇者に職業のない事はない、内に願みて耻づるところはない、神の前に義を以て立つのにナニ恐るゝところはない、追出すなら追出せ、併し職務は忠實にやつて見る、其態度、其人格、其手腕、其嚴然たるところを見てマア慙う云ふ人物は信用しなくちやアならぬと云ふ事になる、決して脅迫などに辟易しちやア不可い、さうか此ペテロとヨハネ、殊にペテロに就て眞の勇氣を學ばれん事を切に希望する次第である。

第二章 可能性の發揮

ペテロ曰けるは金銀は我になし唯われに有ものを爾に予ふ。(使徒行傳第三章六節)

先年私がシャトルに参つた時に、彼所にアラスカユーコン大博覽會が開會中であつた、見物に参つた序に一の活動寫眞を見たが、夫は亞米利加のポトマクの大戦争であつて、はじめに海が見えて其所に軍艦が幾艘となく出た、一方の船から火蓋を切ると其堂が壊れる計りに烈しい大砲の音が聞えたのである、さうして稍や暫らく砲火を交へて、遂に一方の軍艦は打沈められた、間もなく一天俄かに掻曇つて見る間に大雷雨となり、百雷が轟々と轟く電が烈しく雲間に現はれる、眞個に夕立が降つて来たやうに見えた、暫くすると如何にも烈しかつた夕立が治まつて、一天雲なく、蒼空に月の光が現はれて海の上に金波銀波を漲らした、其有様は如何にも美しく見えたのである、私は使徒行傳を繙いて、第一章の八節に弟子方が聖靈の力を受くるまでエルサレムに留まれと云ふ命令を受けて、第二章の初めに約束の聖靈が逆風の如く又焰の如く現はれ來り、さうしてペテロの大説教に依つて、先の日にはイエスを十字架に架けよくと叫んだ人々が胸板を突かるゝやうな思ひをして、我等如

何にすれば救はるべきやを申出で、遂に三千の人々が悔改めたと書いてある、是は實に靈的の戦争、非常なる凄じい勢の大戦争であつた。ところが第三章を開いて見ると俄かに舞臺が變つて得も云はれない美しい話が書かれてある、大戦争、大雷雨の後に月の光を現はして、海の上に金波銀波を漲らすが如き有様である、使徒行傳の記者ルカは歴史家で、繪も上手文章も亦非常に巧みであつたと云ふ事を平素聽いて居つたが、第二章の靈的激戦の後に普通の記者であるならば、夫に相當する結果が現はれたと云ふやうな事を描いたであらうと思ふ、ところがさう書かずして跋が立つたと云ふ一つの美談を挟んだと云ふは、何たる巧妙の筆であらうか、何たる名手であらうかと思つて私は感心をしたやうな譯である、此所を讀んで見ると「第三時祈禱の時」とあるが、是は猶太人の昔よりの慣例として、朝の九時晝の十二時午後三時、三回エルサレムの宮に登つて、エホバの聖前に祈禱を捧ぐる事になつて居つた、キリストのお弟子達の宗教を受けたものであるから、猶太の舊慣は破つて宜さそうなのであるが、朝に晝に午後三時に登つて祈禱をするに云ふ事は如何にも美しい習慣であるから是は破らずして其儘に守つたものと見え、其第三時祈禱の時にペテロとヨハネ共に殿に上りしがと書いてある、ペテロと云ふはも

う此時早に四十を跳越えて五六にもなつて居つたか知れない、ヨハネは三十になるかならない極めて若い人、一人は活動的、一人は思想家、一人は何でも猪の如く前に突進する一人は極めて慎重の態度で事をやる、此二人が良い連となつて、相携へて殿に祈禱に出掛けた、さうすると美と名づくる門とあるが、御承知の如くエルサレムの宮には九の門があつて、美の門と云ふはソロモンの廊下に近いところにある、多分東の方であつたらうと思ふ、東と云ふ中に北に寄つて居つたか南に寄つて居つたかは今は分らぬ、兎に角東の方にあつた門で九ツの門の中では通用門と云ふべきところ、至つて人通りの多いところ、而も美の門と名づけられたのであるから、芝の増上寺の門のやうな裝飾を施した門であつたらうかと思像する、其美の門に生れながらの跋、四十年來足の立たない人、夫が日々人の背に負はれて其美の門に置かれた、乞食が門の闕のところ坐つて一文頂戴と云ふ爲體で袖乞をして居る其所に二人が通り掛けた、神に祈禱を捧げやうと思つて、如何にも靈的な神妙な心を以て出掛けて行つた二人は其乞食に眼が付いたので、熟々之を視てと書いてある、二人は一生懸命に其乞食の顔を眺め込んだのである、乞食は何か呉れるだらうと思つて手を出し、たさうすると二人は思ひ掛なく、「我等を見よ」と云つた、我等を見よと云ふはイエス・キリストのお

言葉其儘である、若い者がイエスの後に従つて出掛けて来て、先生何所にお行でになりますかと云ふと「來りて我を觀よ」と仰しやつた、又其他のところでも我を見よと仰せられた、此所では一人でなくして二人、ペテロとヨハネが我等を見よと云つた、乞食は是は旨い、何か呉れるだらうと思つて一生懸命に又二人の顔を見上げた、其時にペテロが先づ口を開いた兄弟の方が先に物を云ふ、思ひ懸ない乞食に「金銀は我になし」、二人共に財布は空虚であつたらうと思ふ、一切を棄て、イエス、キリストに従ふた二人であるからペテロの家は貧乏、ヨハネの家は裕福であつたけれども一切を棄て、イエスに従ふて以來金儲けをしないのであるから、食ふだけの事は食はせて貰つたけれども財布は空虚である、金銀は我になしあつたらば財布を逆さまにしてあるだけのものを與へたかも知れない、ないから仕様がな、金銀は我になし我に有ものを汝に與ふ、持合せの物をお前に遣らうと云た、衣服でも脱いで呉れるかと思つた、衣服を脱いだら着替のない二人であるから、是又脱ぐ譯には行かぬ「ナザレのイエス、キリストの名に依つて立て歩めと云つた立つて歩む事が出来さへしたら乞食する必要はない、日毎人の背に負はれて美の門に來る必要もない、袖乞をしたのは足が立たないから、足さへ立つたならば何にも申分はない、乞食が求むる以上のものを與へた、イ

エス、キリストの名に依つて立つて歩めと云つた、まだ愚圖々々して居るからペテロが手を引張つて起してやつた、さうすると歩けた、實に美しい記事である。實に繪のやうな記事である。私が之を讀んで思ひ起すのは、馬太傳第二十五章の十三節以下に、イエス、キリストが或人が旅立をしやうとして其來家に金を託した、或者には銀五千或者には銀二千或者には銀一千不在の間にシツカリ儲けて置けと命じた、是は何を意味するかない、袖は振れないと云ふことは眞理である、ない袖が振れない、袖がなかつたら袖を造つたら宜しい、人生れて何にもない筈の人は居らない、銀五千か銀二千か銀一千か、零を貰つて居る者はない、何か貰つて居る、主人が歸り來つた時に五千の銀を預つた者は更に五千を儲けた二千を預つた者は更に二千を儲けた、一千を預つた者は布に包んで畑の中に隠して置いた、主人は五千を儲け得た者を賞し、少ないけれども二千を儲けた者を賞した、一千を預けて置いた者が出て來た時に、どうした、預けて置いた一千の銀はどうした、貴方は嚴しいお方であるからして減多な事をして遺損つては甚く怒られると思ひまして、夫で布に包んで畑の中に隠して置きました、元金だけは失はないやうに致しましたと云つて其元金を出した時に甚く叱られた、何でさう云ふ事をしたか、何故銀行に預けて置かない、銀行に預けて置きさへすれば

元金に利子が附いて來る、實に不届千萬な奴、斬殺してしまふと云ふ譯、私共は袖がないから振れませんでしたと云ふ辯解は立たない、袖がなかつたら造つて振れと云ふのが神の御命令であらうと思ふ。

諸君、使徒パウロは使徒行傳の二十章の終りにキリストの語として「受くるよりも與ふるは福なり」と云ふ名句を掲げて居る、基督教は由來與ふると云ふのが斯教の眞諦である、何う考へて見ても基督教は與なくちやアならぬ宗教だ、與へなければ幸ひが得られないと云ふ宗教、貰ふと云ふのちやア幸ひはない、與へなければ幸ひがない。有たない物を何うして與ふる事が出來やうか、有たない物は與へられない、「我ある物を汝に與ふべし」と云ふ、有つて居る物を與ふる、與ふれば殖える、是は又實に妙である、與ふれば殖える、與へなければ減るかも知れない、與ふれば殖えると云ふ事は明白である、與へなければ減るかも知れないと云ふは、是だかも知れないと云ふ、要するに與へなければならぬ、昔から今日に至るまで此世の中を通觀するに、日外もお話した様に借方に廻つた人間はど氣の毒な者はない、貸方に廻つた人間は實に幸ひだ。與ふると云ふは貸方に廻つた方である。そこで問題は何うしたならば與へらるゝやうな人間になれるかと云ふ事になる。パウロは羅馬書の十二章の六節

以下に七通りに與ふる事を教へて居る、第一は預言、或は預言をなしと書いてある、是は辨舌のある者は説教をせよと云ふ、私は此所を讀んで甚く感した事がある、預言ならば信仰の量に循ひて預言をなす、我組合教會に私の如くして説教者と云ふ名の付く者は百人内外よりない、説教を其勤めとする者は百人あるかなし、日本全國に於て五百人ぐらゐ、六百人はなからうと思ふ、其中で眞個に説教の出来る人と云へば是又極めて少數である、其少數の間が朝から晩まで舌が唇に引着くまで講壇から叫んで居つても、到底五千萬の人間に神の教が普く及ぶ事はない、預言ならば預言をなしと云ふは、實に私共の如く説教を勤めとする者を云ふのぢやアない、貴君方普通の信者、其普通の信者が男でも女でも辨舌のある者は宜く立つて神の聖意を説と云のである、我大阪教會の如き辨舌のある人は幾十名あるか分らない一方から云ふは實の持腐りをやつて居る、けれども辨舌ばかりあつても豆藏の如く囁つても夫は誰も聽いて呉れる者はない辨舌の後ろに思想がなくちやアならぬ、思想と共に信仰がなくちやアならぬ。思想信仰の後ろに人格がなくてはならぬ。辨舌の立つ諸君は宜しく信仰を磨き思想を練り、更に人格を上げて、其天より與へられたる辨舌を以て三十名、四十名の方々が教を説き廻つて見られよ、其効果や實に著しいものがあるに違ひはない。私共二

三の者が説教を勤めとするやうな事では到底日本を救ふ事は出来ない、貴君方の中にも將來は開云ふ事をしたと云ふ希望で晝は終日仕事をして、夜になると夜學に通ふて居らるゝ方もある、實に私は喜ばしきことと思ふ。

第二には役事あらば其役事をなし、口は不調法、口ぢやア何うもならぬ、けれども役員として仕事をさせるならば仕事が出来ると云ふ人がある、夫は結構其人は宜しく自ら義勇兵となつて教會の色々の役事を引受けてやるがよい、我教會では多年喜んで役事を下される方があるからして、私は内顧の憂ひなくして、外に出て教を説く事が出来る尙此上に多く役事をなす人の出ん事を希望する。

第三には教誨をなす者は其教誨をなし、是は日曜學校で聖書の講義をする、或は組の集會で聖書の講義をする、聖書の外にも或は神學、或は教會歴史、其他人の智識を啓くやうに人々の前に教を述べる。日曜學校の先生は大分澤山出来たけれども、組の聖書の講義をなし得る人がまだ少ない、どうか我教會に組の集會を擔當して、人々が満足し得る程に聖書の講義をなし得る人が欲しい、即ち聖書の智識を與ふると云ふ事になるのである。

第四には勸慰をなす者は其勸慰をなし、是は祈禱會に立つて感話をするとか、或は組の集會

で自分の所感を述べるとか、兎に角其話を聴くところの人がア、今まで怠つた、今まで聖書を讀まなかつた、今まで祈禱をしなかつた、今まで自分は安閑として教の爲に盡さなかつた、是ではならぬと勇み勵んで、何うしても一つ主の爲に盡さうと云ふやうに其人達を勸める力、夫はなかく六つかしい力である、けれども自分が行ふて、其實験に基いて人々の前に立つて申せば腹の底から聴く人々が如何にもさうだ、是非さうなくちやアならぬと跳り立つて来るやうになる是も矢張り與へべきものである。

第五には賙濟をなす者は吝なく施し、ペテロとヨハネは金銀は我になしと云つた、パウロは有るものは施せと云ふ、金銀のある者は金銀を施せ、資力のあるものは資力相當のものを施せ、澤山衣服のある者は其衣服を割いて施せと云ふ、ゴルドン將軍は官舎が澤山あつたので官舎の門を開いて近所の勞働者を呼込で其畑を造らした、ゴルドン將軍は金銀に畑の勳章を有つて居つたが、其勳章を投棄して、施したと云ふ事がある、ゴルドン將軍は葡萄酒の房を買ふて行つて病人の口に含ませて居つたと云ふ事がある。施すと云ふ精神がありさへすれば金銀は充分になくても、何か施し得るものがある、參錢の郵便切手、一錢五厘の端書、之に何か心を込めて書いて、さうして淋しく暮して居る者に與へて見られよ、其人は五圓の爲替を

送つて貰つたよりも、其心を込めた手紙をどれくらゐ喜ぶか知れない、施さうと思へば決して施すものを有たないと云ふ事はない、何か有て居る、賙濟をなす者は吝なく施せと云ふのである。

更に第六にはパウロは治理をなす者は懈らず治めと云つて居る、是は執事となるか、日曜學校の校長となるか、何か多くの事務を管理し、之を治めて行くと云ふ事である、日曜學校には校長、教師が入用であり、教會には適當な執事が入用である、組の集會をすれば組の世話方が所謂治理をなすと云ふ事にならなくちやアならぬ、主腦となつて働く人間が居らなかつたら仕事は出来ない、是は腦髓を與ふると云ふ事になる。

さうして第七には矜恤をなす者は歡びて憐むべし、賙濟をなすと云ふは形のあるものを持つて來て施す、矜恤をなすと云ふは、或は病人の脊を撫で、上げるも宜しい、或は足を運んで氣の毒な人を訪問するもよし、或は一片の同情の心を以て其人達を慰むるも宜しい、兎も角も中に矜恤の心があつて、夫を可憐な人々に現はして行くと云ふ事である。かく七通に示れた、此七通の事をお考になつたならば此つ七の中のどれか一つ貴君方には是なら出來ると云ふものはありますまいか、能く考へて見られよ、此七ツを考へて見ても、何

うも自分は其中一つも出来さうなものはないと云ふ方があつたならば、其人は何うしたら宜いか、夫は毎もお聴きなさる、如くヨハネが老境に及んで説教も出来ず、足も歩けなくなつた時に人の脊に負れて、さうして教會に来て、其所に立つて只一言「幼兒よ爾曹互ひに相愛すべし」と云ふて居つたと云ふ。此教會の創立者の高木老兄が段々年寄られて八十になつて、もう教會の執事も勤まらず日曜學校の講義も出来ない、然らば家に引込んで何にもしなかつたかと申せば、成るべく教會の禮拜に參つて一番前のところに腰を掛けて、殊勝にも神を拜して居られたのである。東京の番町教會には大審院の判事鶴君の母堂が九十幾つになつて金豊、何にも聴えぬのに日曜日に教會に来て前の椅子に腰掛けて、牧師の顔を心から凝視して居られたのを見たが、夫だけの事を老人がして呉れても、彼のシメオンとアンナスがイエス、キリストがお生れなされた頃にエルサレムの殿に詣で、神に仕へたのと同じ事、どれくらゐる感化を興ふるか知れない。多年養ひ多年磨き来たところの老人が雨が降つても火が降つても、神の殿には參詣らねばならない、エポバの庭に住む一日は悪の幕屋に住む千日にも優ると云ふ考を以て、喜んで神の聖前に來て殊勝氣に神を拜する其狀は絶好の畫題である、夫は非常なる感化を人々に興ふる者である。七つのもの、中一つも出来なくなつても、開云

ふやうにして矢張り私共は己が人格を興ふる事が出来る、年老つても何にも興ふるものがないとなつたならば、幾十年磨き来た人格を興へさへしたら宜しい。何にも興ふるものがないと云ふ事は云へまい、金銀は我になし、或方は智慧は我になし、辯舌は我になし、治理をする力は我になし、けれども我に健全なる二本の足あり、我は此足を用ゐて多くの人々を教會に誘ひ來らん、我には健全なる足もない、けれども我に手紙を書く手がある、イザ此手を以て手紙を書いて、病人や淋しく暮す人や、教會のない地方に住む人々に一本の端書でも送らん、愛すべき此手、幸ひなるかな此手、金釘打曲げたやうな字でも構はない、筆數持つたらば神の恩寵に依り段々字面が良くなつて來て、人々に賞讃さるゝやうな手紙が書けるやうになる、金銀は我になし我ある物を汝に與へんと云ふは實に非常な教訓である。跛が立つたと云ふ事は何うでも宜い假令跛が立つても只一人の跛しか立たない、けれども我ある物を汝に與へんと云ふ其意氣、其精神、是が今日基督教會にどれくらゐの益を興へたか知れない、實にルカが五旬節に聖靈の力が現はれた後を承けて此美談を此所に書いたのも、聖靈を受けた結果として是は書いてある、袖がないから袖を造れと云ふ、ない袖は振れない、こんな筒袖では何ほ振つて見ても振れない、筒袖で振れないならば日本服を着たら宜しい、袖が短か

ければ振袖を着けるやうにしたら宜しい、兎にも角にも振れる袖をお造りなされと云ふのが、私の今日の教訓としてお話しする主眼である。

第四章 偽善の信徒

祈 禱

天の父よ、草木は殆んど其造られたる儘にして御榮光を現はし、鳥獸も多くは自然の儘にして地上に生活をいたして居ります、我等萬の物の長として造られたる人間のみ、その造られたる自然の天性に反して、いろいろ歪みを生じて居ります、今日は殆んど聖座より見給ふときには、一人の善を行ふ者もなく、又一人の義を爲す者もなく、程に墮落して居ることです、我邦に於ては見る物多くは偽善のみにしてごに眞實の言葉を求め、又いづこに眞實の行を求むべき乎之を探さざれば見る能はざるが如き哀れなる状態を呈し居ることです、御召を被りたる我等基督信徒の一團は實に寛大なる御恩寵の裡に育てられましたが故か、今日は實に自然に副ひ、眞直なる行を爲すべき筈でござりますれども、翻ともすれば殆んど國家的性癖とも云ふべき偽善が現はれ來りまして、聖名を汚し、また教會の體面を毀損するが如きことも尠ならず有ることです、主よ、古へのアナニア、サツピラの如く、我等を罰し給ふことなく、願はくば我等を誘ひ導き給ふて、偽善の行を去つて主の聖前の義しき潔き行を爲すのとなさしめ給はんことを希ひ奉る、未だ世の中の偽善に染まざるところの若き者がありまするなれば、主よ、晝は雲の柱の如く夜は火の柱の如くして、之を守り之を導き、ごうそ生涯 偽善に染まずして、眞實なる行をなして、其光輝を教つものとなさしめ給はんことを希ひ奉る、主よ、今日の集ひを始めより終りに至るまで御手の中に

祝福なし給はんことをキリストの聖名に依つて希ひ奉る。アーメン
 地所いまだ售ざる時は爾の有ならずや己に售たりとも亦なんちの權に履るならずや何故に爾の心この事を發念しや爾人に對て偽るに非ず神に對て偽れる也。(使徒行傳第五章第四節)

第四章の三十二節以下を讀んで見ると、昔の基督信者は皆心を一にし、思想を一にして、誰れ一人その所有を己が物と云ふことなく、有てる者は有たぬ者に施したと録してある、尙ほ其先きを讀めば一名はヨセフ、又の名はバルナバと云へる人、其意味は勸慰の子とあるが、その人が田地を有つて居つた、それを賣拂つて信徒達の許に持參したと付け加へてある、支那では堯舜の御代には、途に物が落ちて居ても拾ふ者がなかつた、或は半分頭の白くなつて居るやうな人は、途に荷物を負いで歩くやうなことはないと言ふやうな事があるが、支那人の此上もなき理想の世と致して居る堯舜の御代に比べて見ても、此所に書いてある信者の團體は立派なものであつて些しの私心もなく、極く近い親類同士のやうな交際をいたして居つたと云ふ譯である、ところが世の中は然う旨く行くものではないのであつて、月には叢雲が懸り花には嵐が吹き來つて之を散らすごとくこの結構な理想の境涯も、第五章の一節以下を讀んで見る、と夜半の嵐に大いに惱まされたやうに見える、事の次第はアナニヤ、サツピラと

云ふ夫婦があつたアナニヤと云ふは之を日本の名前にすれば惠誠に宜い名前である、サツピラは美はしいと云ふ意味であるから、先づお美と云ふことである、主人は惠、妻はお美と云ふ、實に名前から云へば立派な夫婦である、この二人が相談をして、他の人達も財産を賣つて使徒達の許に持つて行くから、自分達も世間並み、即ち信者並みに財産を賣ることは賣つたのである、他の人は賣上金の全部を使徒達の許に持つて行くのに、この二人は其幾部分を隠して、幾部分を持つて行つたのである、さうして使徒達に斯う言うたら宜かつた、全部持つて來たいと思つたけれども、少々惜しくなつたから幾分か家に殘して置きましたこれは賣上の幾分で決して全部ではありません、かう言つて持つて行つたら立派なことであつた、ところが何うも然うは仕たくない、隠して置いたのは誰れも知らない、内證であるから幾分だけを持つて行つた、さうして全部持つて來たやうな顔をして居つた、是れが即ち間違ひである、ペテロが申すのにはアナニヤよ、何故に汝の心サタンに満され、聖靈に向ひ詐りて、地所の値の幾部分を隠すことをなせしや、お前は何故に隠したか、そんな偽善をやらぬでも宜いぢやないかと云つた、それからペテロの法律論が此所に出て來た、地所未だ售らざる時は爾の有ならずや、その田地を售らない中は、それは君の物ではないか、既に售りたりとも

亦爾の權に屬するならずや、地面は君の地面だ、財産は君の財産だ、賣ない前には君の財産であつた、間違ひのない話、賣つて賣上金を手に握つた、その賣上金も是は君の物だ獻ぐるも自由、獻げざるも自由、施すも自由、施さざるも自由、それは君の自由の權に屬する、それで幾分は取つて置いて、幾分は持つて來ましたと言ふても何等差支はない、……自分の物だから……それに其中の幾らかを持つて來て皆悉く持つて來たやうに偽善をしたのは、それは人間を詐つたのぢやない、神を詐つたのである、何う云ふ譯か、それは弟子方に詐つたのであらう、ペテロやヨハネやヤコブ其他の弟子達を欺した、けれどもペテロは人間に詐つたのぢやない、神に向つて詐れるなりと斷言した、これには理由がある、このアナニヤは何時洗禮を受けたかは知らないが、或は五旬節の折りに受けたかも知れない、さうして最う三年四年經つて居る、洗禮を受けて三四年は確かに經つて居る、或は四五年も經つて居つたかも知れない、決して新しい信者ではない、お弟子方に養はれた、さうして信者達が己が所有物を我が物と思はずして、他人に施したり何かするのを見て、如彼しなくつちやならぬと自分でも腹の底に悟つた、殊にバナナバが其田地を賣つて悉く使徒達の許に持つて來た時には、腹の底から感心して、是非あなくつちやならぬと思つた、聖靈も亦このアナニヤに向つて

今日は迫害の時期だ、世の中は何時亡ぶかも知れない、空しく財産を手握つて居つても役に立たないからして、若し此財産を活かして用ゐる積りなれば、今が其活かす時機だ夫で身代を賣つて弟子方の前に持つて行けど心の底に命じられた、夫で其命に従つて身代は賣つたのである、身代を賣つた途端、善を行はうとしたその刹那惡魔が這入つて來た、それで幾分隠して幾分を持つて行つた、それくらゐに譯が分つて、惠まれて而も聖靈の誘導を受けて、尙ほ財産が惜しくして夫れを隠したと云ふだけならば宜いのであるが、その賣上げた全體を持つて行くやうな顔をして幾分を差出したと云ふに至つては、許すべからざる罪惡である。

それでペテロがアナニヤよ、爾は人に向ひて詐るにあらず、神に向ひて詐れるなりと大喝した時に、アナニヤは卒倒した、ペテロの聲が高かつたから卒倒したのぢやアない、ペテロが大いに憤つたから卒倒したのぢやアない、アナニヤの心理状態が切つて來た、何うにも斯うにも心の中が苦しうして、堪えられなくなつて來た、生きて居られないやうな心になつたからして、そこで倒れた、其點がどうも人間の大きい考へなくちやアならぬことである、人がどう言はうが斯う云はうが、そんなことで私共がクタバル……俗に謂ふクタバルどころではない、聖靈が本心の背後に在つて我を苛責する時に堪えられなく、假し死なゝいでも、

頬の肉が落ちてしまふ、一夜の中に毛髪が純白に化ると云ふやうなものになる、ア、あの人は昨日までニコ／＼した顔容であつたが今日は何うして彼んなに瘠せてしまつたであらう、マアあの顔を御覽、宛然何うも餓鬼の如になつて居る、これは一夜の間本心に苦しめられたからであるアナニヤが倒れたのは本心に責められ、本心の背後に聖靈があつていよく力を協せて、本心をしてアナニヤを責めしめられたから、然う云ふ工合に倒れた、さうすると三時ばかりも経つたと云ふ時分、其お美と云ふサツピラが何事があつたかは知らずしてマア主人が財産の賣上げを皆持つて行つて置くのだからして、實は皆持つて行つたのぢやアないけれども、皆が皆持つて来たと思ふくらゐに、バナナバに劣らない善いことをしたのだからして、下にも置かないやうに、大いに持揚げて呉れるだらうと云ふやうに、實は虚榮心に驅られて、其所へ顔を出した、顔を出すベテロがグツと睨んだ、サツピラよ爾曹此價に地所を售りしや、さうすると、女は不屈千萬な奴、然りと答へた、汝の良人が持つて来たのは是れだけである、此れだけで地所を售つたかと聽かれた時に其通りで御座いますと答へた、ベテロ又言ふには、爾曹心を協せて主の靈を試むるは何ぞや、何故夫婦同腹になつて、神の聖靈を試し物にするか、怪からぬ、不屈きな女だと云ふ譯でグツとベテロが睨み付けた、さうすると女も

バツタリ倒れてしまつた、男は時々悪いことをする、其時妻が舵の取りやう一つで良人は悪いことを思ひ止る、それを妻が同腹になつて、それが宜からう、何もみな差出さなくても誰れも知らないから、差出したやうな顔をして幾分持つて行つたら宜うございませう、斯う言葉添へた時には夫こそ大變、家の滅ぶのも其所である、身の亡ぶのも其點である、良人は悪いことを仕やうと企つる時に、妻が譯が分つて極く冷静な頭を以て、然う云ふことをなさつては、逆も神の恵は受けられないからして、これは皆持つて行けば宜しいではありませぬか、イヤ皆持つて行く譯にはゆかない、それでは是れは皆ではありませぬ、其中の二分か三分でございませぬ、又殘餘は差出す心になつた時に持つて行きますせう、本當なことを云つてお差出しになつたら何うでせう、と斯う注意するのが妻の務めである、諫めるのが妻の役目である、それを二人同腹になつて罪を犯したと云ふので、其罪實に推誘るべきところがなかつた、善事魔多しと云ふは此事だ、聖書の中に度々出て居る、實にどうも天に歡び地に喜ぶと云うやうな嬉しいことがあつたかと思ふと、直きに斯う云ふ悲惨な嚴罰を受けなければならぬやうなことが出て来るのである。それで私共は事を行つる時に、嬉しい／＼と云つて、嬉しさに驅られて浮氣にならぬやうに、如何に喜ばしい場合でも神の聖前に畏れ慄いて眞摯の

態度を取らなくちやアならぬと云ふのは其所の意味である。

さて諸君！基督教で最も憎むべき大罪惡として示されてあることは、唯だ二つある、一つは姦淫罪である、今一つは偽善である、イエスが御説教をなされる時にも、亦弟子方を集めて静かにお話をなされる時にも、この二つをお戒めになつたのである、殊に力を籠めて一生懸命になつてお責めになつたのは偽善の罪である、馬太傳の二十三章などを開いて見ると、全章悉く偽善者を責めた言葉である、又此世の中の文學上に、人を罵倒し人を叱責すると云ふ文字が有るであらうけれども、逆も馬太傳二十三章の、偽善者をお責めになつた程の激しい言葉は、他にはあるまいと思つて居る、「噫なんぢら禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ」「爾曹パリサイ人のパン種を慎めよ」そのパン種は何か、即ち偽善である、然らば偽善とは何ぞや、サア偽善とは何ぞや希臘語で偽善と謂ふは人の代りをするを云ふ、役者が大石良雄の代りをしたり、楠正成の代りをしたりする、又その同じ役者が悪人の代りをするともある、其所から偽善と云ふ言葉が出て来た、細かにお話をすると云ふと、有ることを無しとし、無いことを有りとするのがこれ偽善である、持たないのに持つて居るやうな顔をするのが偽善である、信仰がないのに、有るやうな顔をするのが偽善である、善事を行はない

のに、行つたやうな様子をするのが偽善である、この偽善と云うにも不治の偽善がある、私は挨拶が大嫌ひ、挨拶をしなくちやならぬやうな場合に出喰はすと實は逃げたい、何所其所に挨拶に行つて呉れる、挨拶と云ふは辭令を巧みにしなければならぬ、辭令を巧みにすると云ふは無いことを有るやうに言ふと云ふ譯である、教會などでも何うもサア結婚式や葬式或は何か世話になつて御挨拶を述べる、その御挨拶を聴いて居ると何だか腹の底がグツと引張るやうな心持がする、どうも其裡に嘘偽が含まれて居るからであらう、本當なことを言うたら宜い、けれども挨拶となると何うも本當な事が少なく嘘偽のことが多くなる、それからお愛想を言ふ、これは御婦人方に大分多かりさうである、お愛想をする、お愛想と云ふは嘘が入つ、眞が一分か二分くらゐ、何うも誰れか赤ん坊を抱いて来る、それを自分が抱いて「ア、どうも美しいお見だ、どうも良う肥つて居らつしやる、御丈夫さうだ、ア、どうも色艶の美しいこと、ア、好いお見だねー」と云ふ、ヒリッブス、ブルックスと云ふ十九世紀の大説教者も、阿母さん達が子供を見せに来るのには困つたと云ふ、説教が済んで壇を降りて、手を握つたり話をしたりして居ると、阿母さんが赤ん坊を伴つて来る、さうするとブルックスが此兒は好い兒だと云ふと、其次に好くない兒を連れて来る、此子も好い兒だと云へない、それ

で赤ン坊を伴れて來ると掌に載せてア、く〜と云ふ、又ア、く〜と云つて返した、實に牧師の苦心察すべしだ、どうも言葉の上に偽善を行ふ、私共、牧師も餘程注意をしないと、講壇の上から誠に旨いことを云ふ、さうすると聽いて居る人々が好い親切な人のやうに思ふて、誠に何うも愛の深い人のやうに感ずる、何か頼んで見たらば我を忘れて世話をし呉れるだらうと思ふ、そこで何かの場合にその人が牧師を訪ねて行くと、牧師は何うも多忙しいから會へないと云ふ、偶々會は何うも緩くり話として呉れない、さうすると其人が非常に失望をするそれで旨いことを云ふ牧師は、それは矢張り偽善の一種である、皆様のお愛想、皆様の御挨拶と牧師の旨いことを言うのと同じことである、殊に神の聖前に罰を受くると云ふ時は、牧師の方が餘計に罰を受くる、それで雅各書には「爾曹多く師となる可らず蓋われら師たる者の審判を受けること尤も重と知ばなり」と書いてある、口の偽善、それから今度は行狀の偽善、私は先達て何日か……正月だと思ふが、私の家から出て一丁程歩くと、汚い裏長屋から男と女とが出て來た、偶爾みると素敵に立派な粉装をして居る、實に絹服……吃驚してしまつた、裏長屋にもそんな立派な人が出入をしないにも限らない、けれども何うも其裏長屋の極く小さな家に住んで居る人らしい、アア夫が外へ出掛けて行く時には縮緬づくめ、綺

羅人の眼を眩ますと云ふやうな粉装である、是も偽善ちやアあるまいか、有りもせぬのに何所からか借りて來たかも知れない、或は工面工夫をしてさう云うものを拵へたかも知れない、何うも虚榮心に満たされたる我日本は困つたものだと思ふ、表面には一張羅の立派なものを着て居るが、下の方にはごんなものを着て居るかと思ふ、夫は何うも人に一寸覗かれたら耻かしいと云うやうな物を着て居る、是れも偽善の一種である、ホイットフィールドと云ふ説教者は、上には少し色の褪めたやうな洋服を着て居ても、ワイ襯衣だけは一點の染も些しの汚れも着いて居ないものを着たと云ふ、人が何故然う云ふやうになさるか尋ねたらば夫れには譯がある、大いなる譯があると言ふことだ、私はその大いなる理由を知つて居る、マア然う云ふやうに何うも着物偽善、それから今度は行狀の偽善、餘り親切でもない人が手を握つて見たり、懐かしさうに肩を叩いて見たり色々なことを行ふ、彼の人にそんな温かな愛がないと思つて居るのに、温かな愛の眞似をする、實に困つたものだ、マア其外算へ來れば偽善と謂ふは幾干も有らうと思ふ。

そこで根本問題は何うしたらば偽善なしに、立派に行ひ濟すことが出来るかと云ふことである、それは人間に對すると云ふ考を悉く取り去つて了つて、眞の神に對して居ると云ふこ

の一事である、人間は腹の底が見えない、人間は唐紙を立て、這入つて居つたらその中は見えない、天地の神は見てゐらつしやる、唐紙の中でも腹の底でも見てゐらつしやる、神の前には總ての物悉く裸體にして現はれると云ふ此の信念……この信念を以て居ることが必要である、今一つは内容を好くすると云ふ、蔣繪の重箱に馬の糞を容れると云ふのぢやアない、折箱の中に高岡の饅頭を容れると云ふくらゐに、外側よりも内を好くする、中に立派な理想や清らかな思念や美しい感情がある、誠がある、それが中味であつて、その中味が外へ現はれて来る時に有りの儘で世が渡れるやうになる、金満家の人は案外に粗末な粉装をして居ても、それで世が渡れる、中くらの人は餘程立派な物を着なければ人が交際をして呉れない、玄關拂ひを受くとか云うやうなことで、大いに着物を張りたがる、さうすると中味を好くする外はない、理想が立派である、思想も清らかである、情感も美しくある、日々の素行も實に貴いものとなつて來たらば有りの儘で行ける、けれども中味が詰らないと矢張りどうしても飾らなくちやアならぬやうになつて来る、さうすると是はこの世の中を渡ると云ふのにえらい六かしいもの、如く思はれるけれども、有りの儘に世の中を渡れるやうになりさへしたら、これ程樂なことはない、財産が五萬圓よりないのに十萬圓の財産に見られるや

う、なほ家は火の車であるのに金銭があるやうな顔をしたりするのは即ち偽善である、私の友人に某と云ふ青年があつた、佛蘭西語がたつた二つより分らない、英語は少し知つて居つたが佛蘭西語はたつた二つより知らない、其者が丁度肥後の百貫と云ふ港に佛蘭西の軍艦が來たのでその軍艦に行つた、行つて英語を言ふなら宜かつたが、英語の代りに佛蘭西語で「ハ、ウ、ゾー、ユー、ゾー？」とやつた、誰れも佛蘭西語で話をする人はないところへ、佛蘭西語を操る人が來たと云ふことで大勢から右から左から佛蘭西語を浴せ掛けられて、閉口をしてしつた、有ることなくして有りとしたのだ、さう云ふ失敗を招くことがある、有りの儘で行けば苦しいことはない、有ることなくして有りとするものだからして、偽善の言葉、偽善の素振りを生み出す、他人はいざ知らず、基督信者たるものはどこまでも神の聖前に赤裸體、神の聖前に外の汚れを取らなければならぬと云ふ考で本當の修養をやつたらば、五年七年の後には有りの儘で通れるやうになるだらうと思ふ、私が或本を見たところが實に面白いことが書いてある、倫敦に一人の畫工が居つて、なか／＼巧みな畫工である、其者が展覽會に一の畫を出品した、ところが大評判になつた、その畫はどんな畫だと云ふと、遠方から眺めると一人の清い僧が衣着て、さうして合掌して居る、路加傳に書いてある收稅吏のごとく俯目に

なつて、真から祈りをして居るやうに見える、近寄つて見ると、聖書と見えたのは大きな盃、合掌して居ると見えたのはレモンを一生懸命に絞つて居る、俯目がちであると思へたのは、その盃の底にレモン酒を搾へる積りで、レモンを絞つて居るからして最うごれくらゐ出来たかと思つて底を一生懸命に眺めて居るところであつた、私はそれを讀んで熟々腹の底で考へて見た、どうも然う云ふ畫があつたら私等の部屋にも一つ懸けて置きたいと思つた、皆様も一枚づゝ常に部屋に置かれたら宜からう、何となれば人間は遠方から眺めると能く聖書を讀む人、愛の深い人で、下女下男に對して優しい人で、いかにも殊勝氣な信者と見える、併し其家庭に這入つて二三日逗留して見たならば、もうこんな家に二度と再び這入るものぢやアないと思ふやうなこともある、霞を籠めたる遠山の景は實に佳い、併しながら中に這入つて見れば腐れ木があつたり、山が壊れてあつたりして、何うも見難いと云ふ私はアナニヤ、サツピラに就て太いに學ぶどころがあり、皆様の前に其偽善の罪を述べた譯である、今日の日本は私が言はなくても、上から下まで偽善に充ちて居る、何所に真があるかと尋ねて見れば無いと答へるの外はない、故に切めて基督信徒の團體だけでも、偽善無しの團體になしたいと云ふ者であるから、皆様もそのお積りで、更に御修養あらんことを希望する次第である。

第五章 殉教者其死榮

祈禱

天の父よ、今や我國には保守の風が吹廻り、實に我國を指導すべき位置に立つ者までも、保守頑迷の風に抵抗する能はずして厭ふべき論説を吐き、世の中を惑はさんとする事を見受くる時に、今此所に前途多望なる人々が身を挺して主の御前に立ち、是より天來の光に照されて、愈々己が愚昧を啓き、キリストイエスの御體に倣ふて此所に純潔なる性格を磨き、百折不挫の精神を以て家庭を改善し、更に社會を改善せんと欲し、勇を鼓して此所にバプテスマを領するに至りし事を見まして、誠に有難く感謝致します。願はくは主よ、今日の精神を何時までも維持するのみならず、更に益々加ふるところありまして、どうか有徳の士君子となり淑女となつて、我國に云ふべからざるの感化を及ぼし得るものとならしめ給はん事を冀ひ奉る。前途如何なる誘惑に出遭ひますとも、又種々なる艱難が其針路を遮る事がありましても、主よ、どうぞ此四人の者を慕ひ守り給ふて、右にも左にも曲る事なく、主の導き給ふまゝに進んで止まざるものとならしめ給へ。又他の教會に於てバプテスマを領し、今此所に決心して我教會に加はり來り、共に聖國擴張の爲に盡さんとする二人の姉妹を慕ひ給ふて、是より益々磨き益々養ひまして、家庭の爲聖名の爲に、大いに努力を爲さしめ給はん事を冀ひ奉る我等は此六人の兄弟姉妹を我教會に迎ふる事に依りまして益々心を固くして道の爲に盡し、又互ひに友情を厚くして、共に天國の旅路を歩く者とならしめ給へ。仰ぎ、冀くば此六

人の上に何時も絶えざる御恩寵を注ぎ給はん事を主イエスの聖名に依つて冀ひ奉る。アーメン。

衆人これらの言を聞て大に憤り切齒しつゝステパノに向へり然にステパノは聖靈に満され 天を仰て神の榮光と其右に
イエスの立るを見て曰けるは、見よ我天ひらけて神の右に人の子の立るを見、是に於て彼等大に叫び耳を掩ひ心を合せ
てステパノの所に驅より、彼を邑より逐出し石をもて之をうつ證人等のおのゝ其衣服をサウロと云る少年の足下に置
り、彼等が石を以てステパノを撃つ時かれ 祈て曰けるは主イエスよ我靈魂を納たまへ、また 腕き大聲に叫ひひけ
るは主よ此罪を彼等に負しむる勿れ此言をいひ 畢て 瘖に就サウロ彼の殺されしを好とせり。

(使徒行傳第七章五四—六〇)

此日エルサレムに在ところの教會を大に窘迫こと起り使徒等の外は皆ユダヤとサマリヤの地に散されたり敬虔
ある人々ステパノを擧り之が爲に大なる哭泣をなせり。(使徒行傳第八章一、二)

私が基督信者になつたのは明治九年であつて、洗禮を受けたのが其年の七月の三十日であつたと覚えて居る、丁度九年の一月の末つかたから迫害が起つて、酷い目に遭はされたのであるから、私共が最も深き興味を以て讀んだのは使徒行傳、分けて六章七章であつた、又私共の眼前に常に髣髴として現はれて居つたのは、第一の殉教者ステパノであつた、私はステパノの人物と云ふ事に就ては、餘り多くを知らなかつた者であるが、其死にやうが如何にも

立派であつた事を見て、どうせ自分達は長くは生きられないものである、何時神風黨の爲に殺らるゝか、或は頑固黨の爲に刺されるかも知らないからして、一つ殺らるゝならばステパノのやうにして死にたいものだ、さう云ふやうな考を有つて居つたのであるから、今日まで生伸びて、浪華の地に牧師として神の道を傳へるなど、云ふやうな事は、夢想だにしなかつた事である、今より三十六年の昔に立歸つて當時を追想致す時には、斯くして生存へて居ると云ふ事が、實に不思議なやうに思はれる、此所に今日ステパノを論ずるに方つては、勢ひ迫害を受けた當時の事を聯想せざるを得ない譯である、ステパノは何う云ふ人であつたか、使徒行傳の六章と七章に書いてある事の外は、何處にも書いたものがないからして之を知る由がない、三十六年前にステパノの人物を知らなかつた我は、三十六年後の今日もステパノに就ては知るどころ多くない、知りやうがない、只ステパノは希臘語の猶太人であり、教の爲に熱心に努力したと云ふ事だけは分つて居る、けれども何所のいづこの人間であつたか、どんな教育を受けたか又誰の導きに依つて基督信者になつたか、其邊の事は漠として分らない、想像に依れば確かに七十人の中の一人であつたらう殊に温良な性質であつて、而も意思の堅固な質であつたらうと云ふくらゐな事は分る、只今申した如く六章の始めには筆頭として執

事の撰びを受けた、夫から七章には猶太人の前に立つて大膽なる演説をしたと云ふ事が分る七章の終りに花々しき殉死を遂げたと云ふ事が書いてある、此ステパノの死は當時の基督信者に非常なる影響を及ぼした、測り知られないほどの感化を與へたのである、夫は他の人が何う云ふ感化を受けたかは、書いたものがないからして明言は出来ないが只獨りタルソのサウロと云ふ青年が、ステパノが石にて打殺される様子を見て、心動かされて三四日の後に遂に決心して基督信者となつて、夫から三十幾年の間地中海の四邊を三度までも巡歴つて教を傳へて、十二使徒も及ばざるほどの大なる貢獻をなしたと云ふ此一事は分つてある、其サウロと云ふは諸君の御承知のパウロである、ステパノの死が獨りのサウロを生出したと云ふ事だけで澤山である、此サウロを通じて天下後世に至るまで、キリストの福音が盛んに傳へられた事を考へ來る時には、ステパノの死は決して無益でなかつたと云ふ事を明かにする事が出来る之を外にしても、羅馬の時代に於て御承知の如く、十度まで基督信者を塵殺にするばかりの大なる迫害が起つた、其迫害の都度幾百幾千幾萬の人が虐殺された、或は火刑に遭ひ或は八裂に遭ひ、或は磔刑に擧げられ、其何とも云へない慘酷な殺されやうをする時に、ユライ人もエラクない人も讚美歌を誦ひつゝ、笑つて死に就いた者が多かつた、笑つて歌を誦

ひつゝ其苦しい死を受けたと云ふは、何人の感化であるかと云へば、第一の殉教者ステパノの感化に他ならない、實にステパノは生きてそれだけの働きをしたかは分らぬが、第一の殉教者としてキリストの爲に命を致したと云ふ事は、是は幾千萬の人々を立しめた、偉い働きであつたと云はざるを得ない。

さて諸君、其ステパノの死は、我日本に興つた元龜天正の頃の基督信者にも非常なる感化を與へた事を忘れてはならぬ、當時基督信者となつたところの者は、長崎の附近で蕪俵の中に包まれ、及にて串刺にされ、海の中へドン／＼と放り込れたが多くは笑を含んで殉教したと云ふ是實にステパノの感化に他ならない、扱殉教者と云ふ意味は、己か信するところを血を以て裏書することである、古來殉教者の血は教を擴むるところの種子となること云ふ該さへ生出された、血を以て證明する、ステパノは即ち第一の殉教者として、己が鮮血を以て信するところを證明した、此記事を読んで見ると、實にステパノは大膽不敵な演説をやつた、其演説は當時猶太人はエルサレムの神殿を尊ぶ事は、今日の日本人が千代田城即ち大内山を尊ぶにも優つて居つた實にエルサレムの神殿を守らんが爲には、生命を差出す猶太人は幾千幾萬あつたか知れない、ステパノは斯くの如く尊ばるゝところのエルサレムを見る事實に蕪小

屋の如く、活ける神は手を以て造るところには住み給はず天地宇宙の神は、人間が手を以て拵へた宮には居らつしやらぬ、サア此一言には猶太人は憤激せざるを得なかつた、また其上に猶太人はモーセの律法を尊び守る事は今日の日本の教育家が教育勸語を尊ぶにも優つて居つたモーセの律法を非議する者があるならば、石にて打殺すくらゐの事は何でもなかつた夫にステパノは爾曹は神の律法を守らざる者である大膽なる言を吐いた、其時に之を聴いて居た猶太人は、皆我を忘れて切齒しつゝ、立つてステパノのところに寄つて來たと云ふ、實にエライ精神である今日の我日本でも若し我々が明治神宮を建つると云ふやうな議を聞いた時に、先帝を尊敬する事は我々基督教徒は他人に譲らないが宮を立て、之を祀ると云ふに至つては、何うしても承知が出来ないと叫び更に自殺をするが如きは天地容れざるころの大罪であると叫んで見られよ、直ちに迫害が起るであらう、迫害が起つても何うしても構ふ事はない、我心の中に眞理と思ふところは、之を叫ばざるを得ないと云ふところがステパノの精神であつた、ステパノは世の中の迫害を苦にしなかつたのである、ステパノは天下の人間皆悉く非なりと云つても、我信するところは貫ぬくと云ふところの意氣込を以て立つた今日の我日本には、我々基督教徒の間にも斯くの如き豪氣なる精神が乏しくして、動ともすれば八

方美人になり易い傾きがある如何にも殘念の事と云はざるを得ないけれども私共は要らざる事に激語を吐いて、多くの人を怒らす必要はない何うしても斯うしても反對せざるを得ない事には反對し、何うしても斯うしても自分が立てなければならぬ主義を貫く上に於ては反對があつても構はないと云ふ覺悟で立つのが、是れ基督教徒の意氣である。

斯くの如くステパノが叫んだ時に、もう皆飛付いて來たのである、其時にステパノはもう是までと思つた、視よ我天ひらけて神の右に人の子の立るを見る、此所にステパノの言葉が三つ書いてある、此三つは昔より今日に至るまで基督教徒の三つの徳として、算へられたものを現はして居る、今私が讀んだ言葉は、三つの徳の第一に立てられた信仰である、ステパノは活きた信仰を有つて居つた、此天地の奥に神が居らつしやるだらうくらゐな事ぢやアない、イエス、キリストは神の顯現でなござらうと云ふやうな、曖昧模糊な信仰ぢやアない、ステパノは愈々取擱へられて、是から其頭腦を石にて打碎かれると云ふ、危急の場合である、其時に神色自若として多くの人の前に立つて、見よ天開けて神の右に人の子の立てるを見る、と云ふ、平素の活ける信仰が現はれて來た、神を見て居る事は勿論、神の右にイエスキリストを見て居ると云ふのである、ステパノは寢ても醒めても靈なる神と離れない人である、同

時に彼れの心の中には十字架上に生命を棄て、我を救ふて下された救世主を見て居る人であつた、是即ち活きた信仰である。

使徒パウロは哥林多後書の十二章の始めに第三の天に登つて、人の語るまじき言葉を聞いたと云ふ、是はパウロの活きた信仰である、イエス、キリストは馬太傳の十七章にヘルモン山頭にお登りになつて是我心に適ふ愛子なりと云ふ神の御聲をお聴きになつて、その御顔は雪よりも白く輝いたと云ふ、是則ちキリストの活きた信仰である、ヘルモン山頭に於てイエス、キリストが活きた神の靈にお觸れになつたからして御顔が輝いた、輝くほどの活きた信仰であつたからして、十字架上に斯くの如き死をお遂げになる事が出来た、ステパノは神の右に人の子の立てるを見ると云ふ、此活きた信仰に這入る事が出来たから、此所に書いてあるやうな死を遂ぐる事が出来た、何うしたらば我々は此活きた信仰に這入れるか、今朝私は之を諸君の前に説く暇を持たない、今晚神靈の渴仰と云ふ題を以て其邊の消息をお話して見たいと思つて居る、斯くステパノが叫んだ時に、此猶太人は耳を蔽ひ、大いに呼はつた、何を云ふか何を吐すか、神の右にキリストを見たなど云ふやうな、そんな白痴た事を云ふものではないと云つて、皆が動搖めき叫んだのである、さうしてステパノの云ふ事を聴くまい

と思つて兩方の耳を蔽ひつゝ、ステパノの許に匿寄つて來た、さうしてステパノを掴へて、エルサレムの門から曳摺出して、北の方に連れて行つて、さうして其所で自分達が着て居るところの、マア日本人で云やア羽織、其羽織を皆脱いで、タルンのサウロが番をして居つたところ、各自に石を取つて、ステパノに投付けた、頭腦は碎かれ、血汐は流れて眼も見えなくなつた、此所で基督信者の徳の第二が現はれた、夫は望み即ち希望である、ステパノを打てる時彼れ祈り曰けるは、主イエスよ我靈魂を納たまへ、死んだら行先は分らない眞暗黒であると云ふやうな考であつたらば、何うしても騒がざるを得ない、或は取亂すやうな事があつたかも知れないけれども、ステパノの活ける信仰は神の右に人の子の立てるを見て居る、其信仰は懸てステパノをしてもう肉體は碎けた、生命は今絶えるさてステパノの靈は主イエスよ之を納たまへ、此世を去つた曉には、主イエスが神の右に立ち給ふ、其立ち給ふ主イエスはステパノの靈を納けようと思つて、同情の手を伸ばして彼の靈をお納けなさる、是は限りなき生命の望みである、私共は今まで日本で迫害を受けなかつたのであるが、洗禮を受けた當時は何時打殺されるかと思つた我も、或は壘の上で死ななければならぬと思つて居る、或は今後又何う云ふ事が起るかも知れない、マア何方にしても壘の上で死なうが或は迫害に

遇ふて死なうが、何うせ一度は死な、くちやアならぬのである、其死な、ければならぬ時に、私共は主イエスよ我靈を納け給へと云ふ、此祈禱を以て笑を含んで此世を去るのは、是實に活きた望みである、此活きた望みが私共になかつたならば、基督信徒はパウロが云ふやうに最も禍なるものである。此活きた望みを以て笑つて此世を去ると云ふは是何等の愉快、何等の悦樂、之に優るところの喜悅、之に優るところの快樂はない、ステパノは之を得たのである。更に今一ツ實にステパノに於て見出す事の出来ないものがある、夫は何であるか、最期の祈禱である主よ此罪を彼等に負はしむるなかれ、石にて打たれ脳味噌は碎かれ、血汐は彼れの額や肩から吹出して居る、其時に己れを殺す者の爲に主よ彼等に罪を負はしむるなかれと云ふ祈禱は、是は活きた信仰が生出した愛である、活きた望みが生出したところの活きた愛である、私共は或は罵られ、或は誹謗られ、或は裏切をされる場合にはおのれ覺えて居れと云ふやうな事は勿論口には云はないであらうが心の底には怪からぬ奴である、今に彼れは天の罰を受くるであらうと云ふやうな、詛の思ひを生ずる事がないではなるまい、ステパノは肉は裂かれ骨は碎かれて、玉の緒の断えんとする刹那に己れを殺す者の爲に斯くの如き祈禱をする實に非常なる愛である、是は親心の現はれである、親は子供に背かれても、決して

子供を呪ふやうな事はない、アブサロムは其父ダビデに謀叛をした、ダビデはアブサロムと戦ふ事を避けて野原に逃げた、ダビデの家來共は何うしても此謀叛人を攻めなければならぬとして戦ふて、其アブサロムが殺された時に、父ダビデはオ、アブサロムよと云つて深き悲嘆に沈んだところを考へ來る時に、其所に親心を見る次第である、ステパノが己れを殺す者の爲に祈つたのは、是はダビデが現はした親心以上である、此愛があればこそ實に基督教は今日の社會を救ふ事が出来る、此愛があればこそ基督教は今日の世界に生きて居る譯ではあるまいか斯くの如く茲に第一の殉教者を生じた原因は、是は天の神が我々の父である事を、主イエスが身を以てお示しになつたからである、又其主が爾曹心に憂ふるなかれ恐懼るゝなかれ父の家に第宅多しと云つて限りなき生命をお教へになつたからである、キリストイエスも其死ぬる時には其の靈を天の父にお渡しになつたと書いてある、さうして主イエスが十字架に於て、彼等に罪を負はしむるなかれと云ふ愛の祈禱をして此世をお去りになつたから、其の御龜鑑が此所に活きたステパノを生んだ、第一の殉教者のステパノがパウロを生み、パウロがテモテ、テトス其他の活きた信者を生んで、遂に二千年後の今日に至るまで基督教が生命を續けて來た譯である。

第六章 奮闘的教會

祈 禱

天の父よ、今世界の表に御道が傳はりまして、千萬の多くの民が御道に歸依して居りますけれども、未だ世界の人口の多くの部分は主の感化に浴せざるを見て、傳道の抄々しからざるを非難する聲も聞える事でございます、去りながら過去二千年間の傳道の跡を回顧しますれば、實に血と涙と汗と悉く奮闘の跡を現はさざるはなき事でございます、實に主を信する者が最上の力を致して結びなしたる傳道も、其勢力甚だ弱くして充分の効を奏する能はざるを見ては、我儕が双肩に擔はせられたる其使命と我儕の努力は尙我儕を勵まして、愈々益々奮闘せざるべからざる事を思はしむる次第でございます、實に今日の我國の教會は或は小成に安んじ、或は一時の安きを偷みて、奮闘努力するの意氣精神を缺き居るかの如く見受けられまして、我儕は時に憤慨の念に驅らるゝ事もございませぬ、どうぞ主よ、今日此國に於て召を蒙りたる所の者は、初代教會のステパノ、又はヒリビをも凌駕する犠牲の精神を以て、聖名の爲に奮闘する事を得させ給へ、斯くして我國の教會組織を飾るやうに、我儕に光榮を擔はせ給はん事を冀ひ奉る。古への使徒達は敢の爲に鞭打たるゝ事を以て、此上なき光榮と致したりとの事を聞きまして我儕實に今日は只安し々と叫んで喜ぶべきの時に非ざるを思はす、我儕の安きは我儕が奮闘の足らざるが爲であるかと思ひます、どうぞ主よ、益々我儕に奮闘の元氣を興へ給ふて、遂に我國に大迫害をも惹起すまでに、戦はせ給はん事を冀ひ奉る。ご

うぞ今朝此所に集りたる兄弟姉妹は、各自自己の安心、自己の悦樂を顧ふに止まらずして、如何にすれば我全家庭を主に捧げ得べきか、如何にすれば各自の事業に關係する人々を聖化し得べきか、更に如何にすれば我國全體を救ひ得べきか、是等の問題に深く心を寄せまして、我奮闘の足らざる事、我精神の乏しき事を主の聖前に告白せしめ給へ、翼くは主の御力を添へさせ給ふて、どうぞ獨り此教會のみならず、全國の總ての教會が愈々奮發興起して、主の御輝きを現はす者となさしめ給はん事を、キリストの聖名に依つて冀ひ奉る。アーメン

此日エルサレムに在るところの教會を大に逼迫こと起り使徒等の外は皆ユダヤとサマリアの地に散されたり(使徒行傳第八章一節)

是に於て散されたる者ども徧く往て福音を宣傳たり。(使徒行傳第八章四節)

近頃サージョルジビールと云ふ人の著した「英國の將來」と云ふ本を讀んで居つたが、其中に外交の前途と云ふ章が二章あつた、夫を讀んで、今日の英國は世界の平和を支配するだけの、大勢力を有して居るものである事を確かめて、今更の如くに英國の偉大なる事を知つたやうな事である、ところが英國が今日の位置に上り、又今日の如く大なる勢力を握るに至つたのは、決して一朝一夕の事ではなくして、夫は悉く奮闘と努力の然らしむるところである事をも認められたのである、昔の人が「無敵國外患者國恒亡」と申した事を覚えて居る、

二十世紀以後の世界は、或はそんな忌はしい敵國を控へて居るとか、外患を覺えて居るとか、云ふやうな事はなくなるかも知れない、けれども今日までのところでは、確かに敵國外患を有つた國は滅びずして榮えた、英國は即ち其通りである、今より二百幾十年の古へに遡つて見ると、より大いなるイスパニアと云ふ時代があつた即ちイスパニアが東洋にまで手を伸ばした時代で、我國で云へば元龜天正の頃で、天主教の僧侶が道を我國に傳へた時分であつた、丁度其頃ビリビ第二世と云ふ人物がイスパニアに出で、四方に勢力を施した「打勝ち難い海軍」と云ふ大艦隊を率ゐて英國を攻めたのも其時である、此時分の英國の敵はイスパニアであつた、イスパニアの爲に酷い目に遭はされたのである、其次にはより大いなる佛蘭西と云ふ時代が來た、ナポレオン第一世が興つて歐洲大陸を征服へた時代、佛蘭西の爲に英國は散々に窘められた夫が過ぎるか過ぎないかと云ふ時代に今度はより大いなる露西亞と云ふが興つた、歐羅巴の東北の方を露西亞が我物としてしまつたばかりではなくして、東洋にまで手を伸ばして來た、英國の大切な領地である印度境まで露西亞が手を伸ばして來た、さうしてカザリン二世が武裝的中立と云ふ同盟を造つて英國に當つた、何時でも憎まれ役は英國であつた、尤も英國は憎まれるやうな事をやつたのである、殆んど數年前まで英國と露西亞

亞とは大猿管ならざる有様近頃は、大分よくなつて來た、夫が濟むと今度は獨逸がより大いなる獨逸となりたといふ、世界に擴がりたい、獨逸人は現に世界の表に一億三千万人居ると云ふ、本國に六千萬居る、後は世界に擴がつて居る、動もすれば獨逸が英國の領地を奪はうとする、其所まで行ないにしても、英國を敵の如くして、英國の勢力範圍を犯さうとする、何とか彼とかやつて居るけれども、今日は英吉利と獨逸と云ふと宛然仇敵である、日本は英國と同盟をしたと云ふ爲に、今日獨逸からは非常に憎まれて居ると云ふ、獨逸邊りに行つて何か事をやらうとする人は、何うも獨逸人の日本人を憎む事は甚だしい、堪え切れないと云ふ、坊主が憎ければ袈裟まで憎いと云ふ、英國が憎ければ、其同盟國の日本人まで憎いと云ふ、今日は先づ英國は獨逸に睨まれて居る。

此睨まれて居ると云ふ事は英國の損にはならない、これあるが爲に英國は發達をした、これあるが爲に英國は非常なる進歩を來して居る、私は夫を讀んで國ばかりでもなからう、一人一個も亦同じ事だと思ふ、誰かに睨まれて居つちやア氣持が悪い、こいつは困るけれども、餘りに順境に育つた人間は物の役に立たない、逆境に置かれて奮闘努力した人間が偉くなる、貴君方の朋友の中でも算へて見らるゝならば明瞭する、境遇が悪い爲に非常なる奮闘努

力をやつたと云ふ人間であつたならば、矢ッ張り今日世の中で何かやれる人間になつて居る、何の奮闘努力も要しない、誠に可愛く育つたと云ふ人間であつたならば、矢張り役に立つやうになつちやア居らぬキリストの教會も亦同じ事、總ての宗教又然りと云つても宜い、戦ひのない宗教は衰へてしまつた、奮闘のある教會は榮えた、前回にステパノが石にて打殺された云ふお話をした、是は多分キリスト此世を去り給ふて六七年、或は五六年経つた時の事であつたらうと思ふ、教會員の數は是又五六千人にはなつて居つたらうと思ふ、辛とエルサレムに基督教の基礎が座るか座らないと云ふ時に迫害が起つた、其迫害は誰が起したか、教會の幹部ペテロ、ヨハネ其他の使徒達は、餘り猶太人に憎まるゝやうな事はしなかつたやうに思はるゝ、猶太教の攻撃はやらすして、諄々としてキリストの福音を説いて居つたやうに考へらるゝ、ところが若手は夫ぢやア満足が出来ない、ステパノやピリポや若手の連中は、使徒達の遺口を些と齒痒いと思つたかも知れない、夫で猶太教の攻撃を始めた、エルサレムの殿を、神は手にて造りたる殿には住み給はない何と云つて、猶太人が此上もなく尊敬をして居る神の殿の攻撃を始めた夫が爲にステパノは殺された、ステパノが殺されたを機にして、使徒達を除くの外はキリストの信者はエルサレムに居られなくなつた、サマリヤ

其他の地方に皆チリ／＼バラ／＼に逃さなければならぬやうな事になつてしまつた、是から愈々基督教會は奮闘の時代に這入つた、迫害の爲に其エルサレムに居堪らずして、猶太及びサマリヤに散らされた云ふ信者は、若し基督教が奮闘的の教でなかつたならば、頭を出すと打たるゝから、先づ引込んで居らうと云ふやうな事で怯けてしまつたかも知れない、けれども由來基督教は奮闘的の教であるから、散らされた連中が直ちに傳道始めた、幾千と云ふ人間が彼方此方に散らつた、其散らつた人間が皆悉く傳道を始めた、殉教者の血は教の擴まる種子となると云ふ言葉があるが、ステパノの血が四方に神の道を弘むるところの機會を造つたのである、是は確かに神の攝理であつたらうと思ふ、是なかりせば或は基督教會は初代の頃に萎靡として振はなくなつたかも知れない、ステパノが血祭に遭ふた、其勢で四方に散らされた者が獅子奮迅の勢を以て教を傳へる事になつた、實に盛んなるかな、誠に凄じい勢を以て教を傳へたのである。

先に私が朗讀したところを讀むと、ステパノが殺されて直ちに今度は七人の執事の一人であるピリポが頭を出して來た、此所にピリポの働きが特筆大書してある、之に依つて學ぶべき事が實に多い、丁度大正二年には我組合教會は全國に十ヶ所を撰んで、大傳道を試むると云

ふ決議をやつて居る、其傳道の方針方略は、此所を學びさへすれば、チャンと大正二年の傳道は出来る、大成功を奏する疑いなしと私は信じて居る、何う云ふ方略であるか、先づ散らされた人々がサマリアの邑へ行つて道を傳へた、ピリボも行つた、此所にはサマリアの邑に道を傳へたと書いてある、惟ふにスカルと云ふ邑であつたらう、キリスト御在世の時に二日間留まつて種蒔をされたのが即ち其邑である、縁故のないところへ道を傳へても、決して道は擴まるものぢやない、キリスト、イエスが種を蒔いてお置きなされたところへ行つて散らされた人々、殊にピリボが道を傳へた爲に、全村悉く大いに悦んだと書いてある、種の蒔いてあるところへ行つて道を傳へたからして、村中の者が悦んで教を受けた、全國に十ヶ所を撰ぶと云ふ時には、矢張り其意味で撰ぶ必要があらうと思ふ、縁故のあるところを撰ばなくちやア不可い。夫から此傳道に先發隊と後發隊とある、ピリボは先發隊で行つた、其先發隊は何をやるか、其村の中にシモンメゴスと云ふ魔法使ひが居つた、此男は己れを大なるものとして、おれ以上の者は世の中に居ないと云つて高慢なる態度で己が道を傳へて居つた、總ての人間が其シモンメゴスを偉い人と思つて其教を受けて居つた、先發隊のピリボは何をやつたか、キリストは邑に行つて傳道をするならば、其邑の中の良き人を選んで、其所に根城

を構へて道を傳へよと仰せられた、ピリボは此大勢力家に向つて突貫を試みた、金はあり勢はあり智慧はあり、素晴らしい勢力を示して居るところのシモンメゴスを目覓けて突貫をやつたのである、此大勢力家がピリボに攻落された、邑の某々と云ふやうな連中も一緒にバブテスマを受けられども先發隊の働きは、まだ眞個に此大勢力家を悔改めさせることは出来なかつた、基督教でなくちやアならない、我誤れり、私共も一ツお仲間に入りますと云ふので洗禮を受けた、けれども眞個のものになつちやア居らない、丁度私共が擴張傳道に行く時に斯う云ふ趣が現はれる、恐ろしい勢で道を傳へると、イヤ何うも降参ました一ツ私共もバブテスマを受けて信者になりませうと云ふ人が出て来るが腹の底はまだ眞個に改まらちやア居らない、基督教でなくちやアならぬと云ふだけの自覺を生じたのであつて、心の隅々限々までも改まつちやア居らない、夫で置いとくから駄目である、擴張傳道は詰らないと云ふ事を毎も耳にするが、擴張傳道が詰らないのぢやアない、先發隊の働きだけで止めて置くから駄目になるのだ、ピリボは先發隊に出掛けて行つて、シモンメゴスを始めとして、其仲間の者や邑の誰某を降伏せしめた、今度は後發隊が攻めて行つた、誰であるか……當時の教會に於て一番偉い人が行つた、ペテロとヨハネが行つた、エルサレムの幹部は是以上の

人を見出さない、ペテロとヨハネがサマリアに道が傳はつたと云ふ事を聞付けて、遂に後發隊として出張した、此後發隊は何をやつたかサア其點が實に學ぶべきところだと思ふ、先發隊は行つて草を薙倒すが如く大演説をやり、大説教をやつて、大勢力家や其他の人々を靡かせて置いた、後發隊は行つて聖靈の降臨を祈つて、此人々を悔改めさせた、來年度の傳道にも是でなくちやアならぬ。後發隊には最も神の力に満たされ、恩寵に満たされた者が參つて、先發隊が薙倒して置いたところに行つて、靈味津々たるころの奥妙な基督教の眞理を説くのである、さうして此人彼の人と云ふやうな連中を捕へて、君は眞個に洗禮を受けたと同時に聖靈を受けたか、聖靈の御感化に依つて生れ變つて居るかどうか、或は教へ或は論し、或は叱り或は慰さめ……少し時が費る、先發隊は二日三日で宜しい、後發隊は一週間も二週間も費つて、右の如く人の心から養ひ立てなければならぬ、シモンメゴスはヨハネとペテロの祈禱に依つて、多くの人々が聖靈を受けたのを見て是は旨い、自分も一ツ他人に聖靈を受けさすやうな力が得たいと思つた、澤山金があるからして、其金を持つて來てペテロとヨハネに差出してどうか一ツ私にも他人に聖靈を與ふるやうな力を受けさせて下さいと云た時に、ペテロ、ヨハネは斷乎として其金を退けて、汝は金を以て神の力を買はうと思ふか不届千萬

な奴だ、大喝されて大方横着なシモンメゴスも、此ペテロとヨハネが聖靈に満たされて酷く叱つたのには大いに降参つたやうと思ふ。
更に二人は此男に向つて爾の心神の前に正しからず汝は怪からぬ奴だ、神の前に曲つた心を有つて居る聖靈を他人に受さすやうな力が得たいと云ふのは、金儲けの爲にしようと思ふ曲つた心だ、爾の心は神の前に正しからず、更に申した、故に爾の惡を悔改めて神に祈れ、爾の心の念、或は赦されんと。宗教は決して洗禮を受くとか、受けないと云ふやうな形式のものぢやアない、宗教は決して金儲けの道具に使ふべきものぢやアない、宗教の本意は神の前に正しくなると云ふこと、即ち惡を悔改めて、心の思ひが神の前に清めらるゝと云ふこと、私は此一言は實にメゴスの肺腑に徹底したらうと思ふ。先日も或教育家が私の家に来て、私と色々話を居つたところが、言行一致と云ふは實に六ツかしい事でございますと嘆息された、夫から私は言行一致何にも六ツかしい事はない、エラさうな事を云ふて行はないから言行不一致だ、言の方を謹しむさへすれば宜い、其云ふ言に叶ふだけの事を行ひさへすれば言行一致が出来る。私共が實に苦心慘澹惟れ日も足らない、神の前に頭が擡らぬと云ふのは言思齟齬すると云ふ事である。言思一致が出来ない、言思の一致が出来ないと云

ふ事である、思ひは實に理想に達して居るが、行が伴はないと云ふやうな譯で言思一致が六ツかしい、シモンメゴスは洗禮を受くると云ふやうな形式の事なら實行が出来たけれども言思一致、爾の心が神の前に正しくない、人の前に正しいのは譯もない話、神の前に正しくない故に此惡を悔改め、さうして祈れ、さうしたならば或は汝の思ひ神の前に救るゝ事があらうと云ふ、此思ひを清くする、此思ひを正しくすると云ふ事が宗教の本位である、其點を教へた。先發隊は行つて決心者を救つたら宜い、後發隊は行つて其人々を聖靈に満たさるゝやうに、決心して人々が眞個に心の底から清められて、神の子となるやうに導くと云ふ事に努力しなければならぬ、此先發隊、後發隊の二ツが程よく行つて、遂に此時代の傳道は大成功を奏したのである。諸君、「奮闘的の教會」と云ふ意味は、其教會の存在する爲に奮闘しなればならぬ場合がある、ステパノが石にて打殺さるゝまでの奮闘は、教會の基礎を据ゑる爲の奮闘であつた、夫が爲に信者は自分の財産をも弟子方の足許に持出して、夫で支へて來たと云ふ實に教會の基礎は稍や座つたのである、今度は其教を天下に傳へようと云ふ傳道の爲の奮闘、けれども初代の教會から、コンスタンチン大帝が紀元三百二十五年にニカヤの會議を開くまで凡そ三百年間教會は非常なる迫害を受けた、十度まで根絶しにされんばかりの大

迫害を受けた、其大迫害に遭ふ度毎に教會は何を奮闘したかと云へば、道を傳へる爲に奮闘して、傳道の爲に奮闘した、さうして迫害のある度毎に信者が殖えて來て、到頭コンスタンチン大帝の時に至つては、基督教の根絶しは出來ないと斷念してしまつた、のみならず此基督教を一ツ利用しなければ、己が帝國は立派に建設されないと云ふ事を認めたから、コンスタンチン大帝は自分は信者でもないで、頭から水を浴らなくらやアならぬ事になつた、けれども其時分頭に水を浴つたらば、其以後に罪を犯したならば許されないと云ふので、コンスタンチン大帝は瀕死まで洗禮を受けなかつた、けれども基督教を國教とした。其所までやつたと云ふは、只自分の教會の基礎を据ゑると云ふ奮闘だけぢやアない、神の道を天下に傳へたいと云ふ奮闘であつた事を思はなくちやアならぬ、斯くの如くして始められた教會は中世紀の頃になつて暫らく奮闘を怠つた時代もあつたので、其時は腐敗した、愈々新教が興つて天主教が危ふくなつて來た、イグネシヨスロヨラと云ふが興つた、ゼズイット教が興つた、其ゼズイット教と云ふは東洋に手を伸して、印度にザビエーが道を傳へに來た、夫が日本にも道を傳へに來たのだ。其時歐羅巴では新教が興り之に反抗してイグネシヨスロヨラは非常な勢を以て新教に先だつて東洋に手を伸ばして、夫が爲に天主教の勢力を盛返した。新

教の方もルーテルが羅馬に對して謀叛の旗を翻へして以來、一方に於ては教會の存在の爲に戦ひ、他方に於ては道を傳へる爲に戦ふた、けれども夫も十八世紀の末頃までは傳道を怠つた、十八世紀の末つ方よりして、愈々世界に傳道をしなければならぬと云ふのでアメリカン・ボードが興る、英國の教會に於て傳道會が興ると云ふやうな譯で、盛んに傳道を始むる事になつた。現在は何うであるかと云ふと、歐米の諸教會、傳道をしない教會は死んでしまひ傳道する教會は愈々榮えに榮えて益々其勢力が盛んになつて來ると云ふので、どの教會も未だ道の傳はらないところへ傳道をしなければならぬと云ふ氣運を造つて來たのである。

諸君、我教會の歴史を考へて見たいと思ふ、此教會は始め川口の梅本町の間口三間與行六間半の小さな家に借屋をして建てられたのである。其次に本田に移されて、本田に居る時に此教會は家を取上げられた事があつた、實に教會の存在は累卵の如く危ふかつた。教會は借屋に居つて禮拜をやつて居つた時に此教會は傳道した、教會の土臺が未だ据らないのに傳道をやつた、さうして先づ浪花教會を生み、其次に島の内教會を生んだ、其島の内教會を生んだ時は母體が弱くなつて、愈々自分の教會は立たない、母教會は立たないと云ふまでに困つたのであるけれども教會の中に何うしても一面教會を維持すると共に、更に傳道をして行か

なくちやアならぬと云ふ元氣を有つた人があつた。遂に中の島七丁目之間口四間に興行五間の日本家を買受けた、私は其時に大阪教會に參つたのである。雨の降る日は洋燈を點けなければ聖書が讀めないやうな、薄暗い汚穢い場所をやつて居つたけれども、其時も矢張り此教會は傳道をしなければならぬと云ふので、泉州堺に道を傳へて堺教會を生んだ。愈々斯う云ふ會堂が出来て教會の土臺が据るやうになつてからは何うなつて來たかと云ふと、以前借屋をして居つた時のやうな傳道が出来ず、此教會の存立の爲、此教會の維持の爲に汲々として居ると云ふやうな憐れ憐れ状態である夫ちやアキリストに對して濟まない、夫ちやア初代の教會に對して濟まない、奮闘的精神何所にあると云はれたならば、私共は傳道の爲に奮闘するの勇氣は、業に已になつてしまひましたとお答へしなければならぬやうな、氣の毒な有様ぢやアないかと思ふ。昨年の我教會の總會に於て傳道地を開くと云ふ決議をやり今は委員が擧げられて、愈々一の傳道地を開かうと云ふ事になつて居る、けれども諸君、借屋をして居つた時でさへも浪花教會を産み島の内教會を産み、更に堺教會を産んだと云ふ、其我教會の奮闘の精神が此所に存するならば、今日の大坂教會として一ヶ所ぐらゐの傳道地で満足が出来やうか、東西南北に各一ヶ所の傳道地を即時に開く事の出来るまでに、天

の恩寵を受けて居ると思ふ此恩寵を空しうして奮闘しなかつたならば、何の爲に教會が存在して居るか、其存在の目的は半ば失ふたと云つて宜いと考へて居る次第である。今日我日本の總ての教會が、私共が豫期する如く揮はないと云ふ原因は何所にあるかと云ふと、この教會も一々只自分の教會の存立のみを考へて居る、其教會を維持して行く事の爲に汲々として居る、力が足りないから到底傳道が出来ませんと云ふ、何ぞ其意氣の乏しきやと叫ばざるを得ない、借屋をして居りながら傳道をした當時の精神を思ひ玉へ。エルサレムの初代教會は立派な會堂は有たなかつたらう、矢張り他人の家の軒下を借りたりして、而も猶太サマリアの地に斯くの如く盛んなる傳道を試みて居つた。日本の總ての教會が今日は奮闘的の教會とならねばならぬ筈である、只今は何の迫害もありやアしない、誰が教會へ来て今日迫害を試みんとする者があらうか石一ツ投げる者もない、是れ神の道を天下に宣傳する爲に奮闘する好い機會である。此奮闘をやりさへしたならば、今日の我日本の教會は非常の勢を以て進歩發展するのみならず、遂に日本は五十年を俟たずして、基督教の勢力の下に這入つて來ると思ふ。けれども自己の存在と云ふ事をのみ考へて、神の道を天下に傳へる奮闘の精神がなくなつたならば、到底神の恩寵を受くる事は出来ない、どんな困難が來ても、どんな苦痛

が來ても笑つて其間に立つて、泰然自若として猛進して行くと云ふところに、初めて神が援助を與へ給ふと思ふのである。

實にステパノは打殺され、基督教會は此日いつか滅びんと云ふやうな場合にエルサレムから追出された人間は、猶太、サマリアの地に擴まつて、散らされた者が各自福音を説いたと云ふ實に非常なる勢である、我々は追出されもしなければ、誰も來て毆らうとする者もなく安しや安しと云つて、今日私共は喜悅を以て其日を過す事が出来る、さう云ふ喜悅だけで神の使命が完うせらるゝものならば誠に結構である、愈々奮闘し、益々努力しなければ、私共が神から賜はつた使命は完うする事が出来ないと思ふ。日本の諸教會を振ひ興さんと云ふ諸君の覺悟なれば、先づ第一に決議したやうに講義所を一ツ開き續いて第二第三第四第五六と大阪教會が五ツも六ツも講義所を開いて、さうしてやると云ふ事にしなければならぬ。日本に傳道するのに、一二の講義所を開くぐらゐの事で、何うして教會の使命が完うさるゝであらうか、切めては七八の講義所を開いて奮闘努力して全國に大成功を擧げられん事を希望する。委員諸君が一日も速かに第一の講義所を完成せられん事を希望すると共に第二第三第四の委員を擧げて、身代限りをして構はないと云ふ勢で傳道擴張をやると云ふ事で

なければ、今日神に恵まれたる其恩寵に對して應ふるどころはないと思ふから初代教會の大奮闘を見て、私共は實に骨鳴り肉躍ると云ふやうな感を致して居るやうな次第である。

第七章 一生の大革新

祈 禱

天の父よ、今朝は如何にしてキリスト以來の第一人と稱ばるるパウロが生じ來りしや、パウロが斯くの如き御恩化に沐浴致しましたことが、世界に前古未聞の一大革新を捲き起したることを考へまして其間に含まれたる深奥なる真理を學ばんと存じます、主よ、今朝我等と共に在りまして、銘々の心に大いなる反省を興へ給はんことを希ひ奉る、我等既に更に生れたりと自覺する者も、其更に生れしは遠き以前のことにして、今日は更に再び生るべき、生れればならぬ必要を生じ居りは致しませぬか、また御道を長く耳にするに雖も未だ會て更生の實驗を経ざる者は、今朝パウロを學びまして、各の心に聖靈が活動を始め給ふて、其心の裡に一大革新を起すに至らしめ給はんことを希ひ奉る、今日の我國は實に憤慨すべきこと多く、又相愛すべきことの多き場合に際しまして我等は如何に社會の改善を企て、又如何に國家の改善を企てまして、其社會其國家を成立せしむるところの一人一個の間に眞に更生せる人物を生ずるに非ざれば到底我等の希望を抱負も、悉く水泡となることを知るものでござります、さりながら、主よ、人の心を更生せしめんとすることは到底我等の力の及ぶところでは御座りませぬ、願くば聖靈諸々の心に働き給ふて、新たなる精神と生命を得て聖殿を下り行くやうに御祐けあらんことを希ひ奉る、斯く聖前に祈るところの僕にも更に革新を興へ給ふて、いよく新たなる年を迎へまして、大正二年の講壇に立つことを得させ給ふやう只誓に希ひ奉る。

アーメン

彼れ戦き駭きて曰けるは主よ我に何を行しめんと爲給ふや主かれに曰けるは起て邑に入さらば爾行べき事を示さるべし。

(使徒行傳第九章第六節)

是に於てアナニア往て其家にいり手を彼の上に接て曰けるは兄弟サウロよ爾の來れる路にて現れし所の主イエス爾が再、見ることを得かつ聖靈に滿されん爲に我を遣せり、忽ち彼の眼より鱗の如きもの脱て再び見ることを得すなはち起てマブテスマを受く。

(使徒行傳第九章第七十八)

天地宇宙は二ツの要素より成立つて居る、一ツは無機物、一ツは有機物である、無機物と云ふは生命の無いもの、金銀銅鐵寶石、又は石炭、石、岩、砂と云ふやうな類のものである、この無機物は人間の用やうに依つては大いに用を爲すが、物夫れ自身はいつまで経つても殖えることもなく、變化することも無い、無機物の仲間になつた其時から未來永劫物夫れ自身は何等の發展も進化もないことであらうと思ふ、日本の國歌に「君が代は千代に八千代にさざれ石の、巖となりて苔のむすまで」と云ふことがある、これは歌であるから別に科學的に穴を捜す必要はないが理窟に合はない歌ではなからうかと思ふ、さざれ石が千年萬年経つたとても、岩に化るとは無い、さざれ石は元のさざれ石、岩は元の岩で決してさざれ石が成長して岩となると云ふやうなことはない、斯くの如く無機物には歌や本などにこそ殖えるや

うに、大きくなるやうに、増し加はるやうに書いてあるけれども、事實は然うでない、決して變化はない、有機物と云ふ方は生命の有る物、植物、昆虫、魚貝動物及び人間、斯う云ふ類のものである、是れは成長がある、發展がある、随つて驚くべき變化がある、殊に人間に近い動物物は、殆んど元の形を失ふまでに進化して居ることを見る、例へば櫻島の大根は、是れは鹿兒島縣の櫻島に限られたものである、元からあんな大きなものではなかつたかも知れない、我等がお漬物にするやうな大根の類であつたかも知れない、けれども櫻島と云ふやうな地味に人が植ゑつけて、之を培養したところからこんな大きな大根になつた、一匹の馬に二つの大根を辛つと着けて行くと云ふ話がある、聖護院の燕、實に見事なものであるが、これも土地が瘠せてはあゝ立派な燕はなかつたであらうと思ふ、人間が培養して遂に名ある聖護院燕を作り出したのではなからうか、此間私は新聞紙上で、我農商務省に買入れた種馬は價二萬圓以上と書いてあつたやうに記憶して居る、英國では一萬圓以上の馬があるやうな、種馬であれば、一頭二萬圓ぐらゐは無論するだらう、さう云ふ馬は決して野生の馬では見付からない、矢張り人間が培養する乗馬用のものである、足が小さくて長い、胴が長い、能く走れるやうに拵へられたものである、荷物を運搬する馬は象の脚の如な、大きな脚

で、胴體も誠に逞しいものを作り出して居る、軟く力が強い、牛の如きも私は何時であつたか巢鴨で乳牛を見た、一日に二斗一合七勺乳が出る云ふその牛の體軀が瘠せ焦けて居る、たい乳の所だけは夫れは大きく斯う云ふやうな乳房になつて張つて居る、野生の牛にさう云ふ乳房を有つたものはあるまい、人間が養ふて茲に至らしめた、變化も變化、非常なる變化を來したものと云はざるを得ない、殊に驚くべきは裸虫が變じて蝶々となることである、殆んど何と文字で形容して宜いか、形容の出來ない程の變化である、蠶を飼つて見られよ、桑を喰はせ、時期が參ると、その裸虫が透明になる、それから繭を造る、繭の中に這入つて居る時の姿が如何にも汚なく、誰れも嫌がつて棄てるやうなものである、夫れが時日が経つとその繭を喰ひ破つて出て來た時の雄蝶、雌蝶、實に美しいもので、今まで裸虫の時とは僅かに其所等を這ひ廻るに過ぎなかつたものが、蝶々となつて出て來た時は、先づ自由にそこらを飛び歩くことが出来る、而かも顕微鏡を以て其姿を見るならば、何とも言へぬ美しい装ひを擬して居る、變化も變化、大變化、實に大なる變化をなしたものと云はざるを得ない、況んや動物の上位を占むる人間をやである、この人間には變化なかるべからずどうしても變化が無くてはならぬ、けれども支那の或書物に書いてある通りで、上智と下愚とは移らず、マア云

はい聖の聖なるもの、智慧に於ても能力に於ても、徳に於ても、殆んど此上無しと云ふ上智の人であつたならば達せるところまで達して居るから之には變化がない、下愚と云ふは、これは愚人……愚かも愚か最下等のもの、マア低能兒の類であらうと思ふ、低能兒と往かなくとも本當に芋掘の百姓、水呑百姓と云ふやうな類、これも變化がない、人間の上乗と人間の下等とは變化が無いのが幸ひだと云へば、上智と下愚とは得なものと云はざるを得ない。けれども私は上智と云ふ人には、目に見える程の大變化はないか知らないが、矢張り變化があると思ふて居る、ナザレのイエス、キリストの如き即ち上智である、さらば絶對的にキリストには何等の變化が無かつたかと申したらは矢張り有つた、私共が驚くやうな著しい變化はなかつたかも知れない、最下等の人間の變化がないと云ふことは、これはもう言葉を使ふ必要はない、此の變化と云ふことに就て色々なる言葉を用ゐる、革命と云ふ字がある、これは何を意味する、平氏が倒れて源氏が代り、源氏が亡びて北條氏が其後を襲ぎ、北條氏轉覆して足利氏其後に立ち、足利氏亡くなつて徳川氏、徳川氏亡びて明治の天地を形造つた是れ革命である、遠き昔のことを言はなくても、支那の元朝が倒れて明朝となり、明朝が倒れて清朝となり、清朝が衰えて今度は袁世凱の總統たる共和政治を形造つた、是れ革命であ

る、次に變革と云ふ字を用ゐる、御變革、徳川氏の世などには代變りがなくても風紀が弛んで居れば松平定信公が宰相となられて變革をされたこともある、それから又維新の後と雖も時には多少の變革はあつた專制政治が變つて立憲政治となつたと云ふ類も、矢張りこの變化である。

今朝の私の題は革新と云ふのである、革は更たなり、新は更なり、どちらから申しても更たなり〜で、新たになつて行くのであるからして、根本的に變ることを意味する、其の革新と云ふことをキリストは更たに生れ變ると仰せられた、裸虫が變じて蝶々となること云ふのが先づ生物の世界に於て根本的の變り様、更生と云ふは、人間の生涯に於て根本的の革新を意味する、何故にナザレのイエスは人もし更たに生れずば神の國に入るに能はじと仰せられたであらうか、諸君が詩の第十四篇をお開きになつたならば、之を精讀するに連れて如何にもとお感じなさるだらうと思ふ、夫れは外ぢやアないエホバが天のいと高き聖座から人間世界をお見下しになつて、何所に善を行ふ者があるか、何所に義を行ふ者があるか、あれか此れかとお調べなさつたところが何億と云ふ人間の中に善を行ふ者が一人も居らない義を行ふ者が一人も居らない、みな悉く曲りくねりて實に邪曲なる非常識なる罪人となつて了

つて居るノアの洪水以前に人間が皆な悉く殺されて了つた、それで此大洪水があつて、ノアの家族八人の外悉く根絶しをされた、之に依つて世の中は新たになると期待されたが、ノアの子孫又悉く右の如く腐敗して了つた、満室の蒼蠅拂へども盡きない、濱の眞砂は盡くることがあつても、世に盜人の種子は盡きないと或盜人が詠ふたのは、實によく人間の心中を言ふたものではあるまいか、如何に神が人に善くなれ善人になれ、義人になれと御希望なされても此人間はみな腐れて了ひ、イエス、キリストは此世に生れ來つて、物心お着きなつてから十八年の間日々大工の仕事を爲しつゝ、世上の人々の有様を御觀察なさるゝのに、偽善者嘔吐、不義奸惡なる者ばかりである、約翰傳の二章の終りを見ると、イエス、キリストは人の心を知り給ふが故に、人にお任せなさらなかつた、如何にも不義奸惡なる者、偽善者や不義人で滿されて居ることをお認めになつては、どうして此人達に心をお任せなさるゝことが出来やうか、神の容であるべき人間、萬の物の長であるべき人間此人間がみな悉く腐敗してしまつたと云ふのであるから變革でも駄目だ、革新ぐらゐな言葉ではまだ其意味が徹底しない、それで新たに生れ更ると云ふ字をお使ひになつた、裸虫が變じて蝶々と化するがごとく、人間は新たに生れ更らざるを得ない、斯く言つてパリサイの人、而も七十子會議の一人たる

ニコデモを驚かせたまふた、ニコデモは新たに生れ更ると云ふキリストの御眞意が充分に分
 らなかつた、其後五年か六年か、日は明瞭と申すことは出来ないうが、兎も角もニコデモを驚
 かされた後數年を経て、只今私が論じた如く、使徒行傳の第九章に於て、更たに生れ變ると
 云ふ事が使徒パウロに依つて實現された、諸君はパウロを御存知であらうと思ふ、キリスト
 以來後にも先きにも彼が如き人物は世に出なかつた、そのパウロが外部から見ても何う云ふや
 うな變化をしたか、彼れはタルソのサウロと云ふ、名からして何うも虫の好かない名である
 タルソのサウロ、サウロとは何であるかと云へば、これは猶太王國第一の王位を占めた帝王
 の名前である、サムエルの時に人民が、何うか我等にも隣國のやうに王を授け給へと懇請し
 た、其時に多くの人々の中を見たが、肩から上脊の高い骨格の逞ましい男が居つた、之を王
 位に即かせたら宜からうと云つて、王位に上らしめたのがサウロである、キリキヤのタルソ
 の一名門の家の男の子が生れた、父親はその子供の成人の後に何うか羅馬帝國の名有る一大
 政治家とならしめたい若し都合好くは猶太國の恢復の勇將とならしめたいと云ふやうな野心
 からして、我子にサウロと云ふ名を命じたかも知れない、英國人ならばアルフレッド獨逸人
 ならばフレデリック、日本でならば秀吉とでも命名するところである、タルソの名門の家に

於てはサウロ、親の抱負が分る、さう云ふ家庭に生れたところの青年には、當時十五六にし
 て故郷を出で、エルサレムに上つて、ガマリエルの足許で舊約の豫言、法律、即ち猶太教
 の眞髓を學び、さうしてパウロは羅馬の法律も知つて居れば、希臘の文學にも通じて居つた
 いかにも學殖に富んだ青年であつた其サウロがキリストの召を受けると今度は自分でパウロ
 と云ふ名を付けた、パウロと謂ふは之を翻譯すると小太郎、又は小平と云ふやうな名前、兎
 に角小と云ふ意味である、サウロと云ふ實にどうも聞くにえらさうな名前を棄て、しまつ
 て小太郎、小平と云ふやうな小さな名前を付けた、其名前だけを考へて見ても、如何に此男
 の上に變化が来たかと云ふことが分る、又大迫害者が變つて信者となつた、尙も脅嚇と殺氣
 を含んで祭司の長から命令書を貰つて、家來を連れて馬に跨つて、意氣揚々としてダマスコ
 を指して出掛けて行つた其男が、キリストの召を被るや直ちに變じて「主よ、我れに何を爲
 さしめんとし給ふや」と實に順直に實に優しく、又は實に殊勝氣にイエスの仰せに従ひます
 と云つて信者となつた、信者になつたばかりぢやない、直ちに身を獻げて天下にキリストの
 福音を宣傳へるところのお弟子となつた、變化、大變化である、外形の上から見ても名前の
 變化、又其仕事の變化、非常なる變化が来たのである、さらば心の上には何うであつた

か、之をお話すれば長くなるが羅馬書の七章に彼れが戦の跡が遺つて居るところを見ると、肉の事を思つて居つたパウロが、肉のことを思ふは死なり、依つて靈の事を思ふやうになつた、肉體の事を全く棄て、顧みない、心靈の事をのみ思ふやうになつた、己れの名譽さへ出れば宜いサウロ、政治界に立てば王になりたい、法律家となれば第一の位を占めたい、文學者となればセネカや其他の學者を後に撞着せしむるやうなものになりたいたいと思つた其サウロが、今度は名譽を忘れてしまつて、唯キリストの榮光の現はれん事の爲めに盡す、今生くるどころのものは我れにあらず、イエス、キリストが我が裡に生きて在らつしやる、我は總ての物を糞土の如く棄て、了ひ、イエス、キリストを知るを以て最も優れた事とすると云ふのである、變化、大變化、此上もない變化を來したのである、何うして此變化が來たか、三節を見るにダマスコに近づける時忽ち天より光ありて彼を環照せりとある、パウロは光を見たいつ光を見始めたか、三日ばかり前にステパノが石にて打殺されて、彼れの顔が天の使の顔の如く輝いたのを見た其時に雷電のごとく靈の光がバツとパウロの暗き心を照したけれども行掛り上家來を伴つてダマスコに基督信者を苦しむる爲に出掛けた、そのダマスコの途中、ステパノの顔に輝いた光りが漸次々に大きく照り始めた、さうしてダマスコの村に近づい

た時に苦悶を仕出した、いよ／＼其光が彼を巡り照すことになつた、目映くなつてドーと倒れた、私は大方馬の上から落ちたらうと思ふ、然う書いてはないけれども光を見た、あゝ我れ誤り、何うして神の子なるイエス、キリストを見ることが出来なかつたか、キリストが神の子でなかりせば何うしてステパノの如く從容迫らざるの態度を以て、人の罪を許されん爲めに、あれ程輝ける面容を以て此世を去ることが出来たか、其光が照り輝いた、是れは獨りパウロばかりぢやない、オーゴスチンの心にも輝いたルーテルの心にも輝いた、フィニールの心にも輝いた我等の心の中にも此光が輝く、此光が輝くと今までの罪がバノラマを観るがごとく目の前に現はれる、パウロはあゝ我れ誤り、我は知らずして實にキリストに背いた、あゝ我れは實に野心に驅られて基督信徒を迫害した、我れ誤り、この悔悟の心はパウロには非常に強かつた、ごに立つて演説をするにしてもアグリッパ王の前に引出されて審かるゝ時にも我れは實に罪を犯した、我れ誤り、神の子に對して濟まぬ、キリストに濟まぬ、正しく神に背いたと云ふ罪人であるとの自覺を有つたのは此光りを有つたからである。

其次には第四章に「サウロ、サウロ、爾は何故我れを窘迫やと云ふ聲を聞けり」光りの次に來たものは聲である、聲を聞いたと云ふは實に我はキリストを責めた、イエスの弟子を縛つて牢屋

に打込んだ、ステパノが石にて打たる、のを快しとして居つたイエスの弟子を責めたのは、イエスの弟子を縛つたのは、正しくイエス、キリストを責たのである、然うだ、何故私はイエスを責たのであらうか、此キリスト教は是れは天意だ、天來の教だ、神が基督教の後方に立つて、此教を自分が潰さうとするのは、恰も手足で荆のある鞭を蹴る様な者だ、相だ、實に我は誤つた、斯う云つて心の耳に靈の聲を聞いた、パウロの思想が明瞭となつて來た貴君方でも何か物を考へて居らつしやるが、唯だ考へて居る間は明瞭しない、愈夫を言葉に云ひ現はすと云ふ時に明瞭して來る、初め光を見た時には悪かつたと思つた丈けである、今度聲を聞いた時にいよ、我は基督教を迫害した、基督教者を迫害したのは正しくキリストを迫害した、キリストを苦しめたのは、キリストの背後に立つて御座る天の神に背いた、さうだ、罪を犯したと斯う思つたのである。そこで今度は第六節に「彼れ戦き駭れて言ひけるは主よ我れに何を行しめんとし給ふや、戦き駭れた、胸がドキ／＼して來た、あなた方でも然う云ふことがあらう、誰れも知らないと思つて悪いことをして居る時に、あなたの尊敬する人が不圖顔を出して見られよ、總身冷汗が流る、恐れ慄く、パウロは其の駭きを覺えた、慄き顫へたパウロは絶對絶命、我れに何の力もない、我は地上に倒れて居る、主よ何を我に爲さし

めんとし給ふや、其時にキリストは直ちにパウロの心に何かお命じなされさうなものだ、けれども些ともお命じなされない、起つてダマスコの邑に入りスグと云ふ町の某の家に往くと仰せられた、サア其點が私は神の智慧だと思ふ、胸がドキ／＼して恐れて居る其時は、是れ情感の時代、感情がズツと激昂して居る、感情が激昂して居る時に何を行つても間違つて居る、それでダマスコのスグと云ふ町の某の家に這入れ、其所は静かなところであると云ふてパウロが擔ぎ込まれた、三日三夜眼が塞つて何も見えなかつた、鱗の如き物が這入つたと書いてある、三日三夜目が塞つて何も見えなかつたと云ふ、これ外界のことは棄て、了つたと云ふこと、大政治家となることも、大文學者となることも、大法律家となることも、今まで自分が彼所此處で學んだことも、マアさう云ふやうな我名譽に關することや、我れに關すると云ふやうなことは一切目が見えなくなつて了つた、さうして三日三夜の間に、我は誤り、ア、我れは神に背いた、何うしたらば此罪は許さる、だらうか、而もキリストは我れに光を與へ、キリストは靈の聲を聞かした、何を爲さしむると云ふのがキリストの御目的であらうか思案に暮れて居つた、そこにダマスコに居る聖者アナニアと云ふ者がやつて來た喜んで會つて見ると、キリストが何を命じたかと云へば異邦人に道を傳へることの使命を

お授けになつた、ハツと思つて目を開いて今度はイエス、キリストを見ると云ふ、今まで閉されてあつた眼が開けてイエス、キリストを見た、イエス、キリストを見たと言ふのは我心既に定まれり、我れは死ぬるも生くるも、裂かるゝも辱かしめらるゝも、此イエス、キリストを我主と仰ぎ、救主と仰ぎ、我理想と信じて此キリストに服従し、絶對的に服従してキリストの命の儘に動くと言ふ決心をした、そこでパウロの心の上には皎々たる真如の月を見るが如くに明かに我前途を照す光りが見えた、この十七節以下をお讀みになつたらば其事が書いてある、是に於てアナニア往きて其家にいり手を彼の上に接して曰けるは兄弟パウロよ爾の來たる路にて現はれし所の主イエス爾が再び見ことを得かつ聖靈に満されん爲に我を遣せり、忽ち彼の眼より鱗の如きもの脱て再び見ことを得すなはち起てバプテスマを受く」パウロは全く變つた、パウロを産み直すのには三日三夜神が生みの苦しみをなさつた即ちキリストがパウロを産み直すのに、三日四日は産みの苦しみをなさつた、サア生れた、喜びに満されて大勢の前に起ちて、今まで私が苦しめて居つた、私が今まで苦しめて居つたお方はメサヤであると叫んだ、さうすると大勢ガヤ／＼と騒いで「何を言ふか、昨日まで基督教を迫害して居つて、今日は忽ち變心をした、打殺して了へ」と云ふ譯で、何うも命が危くな

つて來たから、パウロの友達が筐に入れて石垣の下に吊り下して逃した、斯様に私共は更たに生れると云ふ一種の大革新をやらなければならぬイヤもう私は信者になりました、今度は變りました洗禮も受けましたと云ふが矢張り元の空阿彌で詰らない、人間になる革新はした變化はした、けれども夫れは感情の上にて於ての變化である、理想の上、思想の上、生命の上、總ての上に大革新をやるのには三年ぐらゐも費る、私は七年費つた、此生れ更りは只一度ちや可けない、三度も五度も七度も生れ變はる、私にしても三度や四度は生れ更つて居る、まだ死ぬるまで三度や四度は生れ更るであらう、さう云ふ工合に大革新を経る毎に人格を磨く、斯くして信仰の濫奥に近付いて來る、何うか大正元年の將に盡きんとする今日、殘る十五日の間に一ツ大いに願ひて、洗禮を受けて居らぬ人があるならば喜んで此際洗禮を受けて形の上に於てパウロがパウロとなる必要がある、また天意に背くやうな仕事をやつて居るならその仕事を變へることも必要である、正しい仕事なら變へるに及ばないが少しでも疑問のある仕事ならば變へる、さうして心の裡に大變化を経て、大正二年の一月の元日は全く新たなる者となつて、神の子の仲間立つと云ふことが是れ實に愉快な事ではあるまいか、既に神の子の仲間に入つて居る者の中でも大分カビが生へて、何うやら面白くなつて

來たと云ふ人があるならば、第二第三の生れ更りを行つて、大正二年は新たなる人間となつて之を迎へて貰ひたいものである。

第八章 獄中の聖者

祈 禱

天の父よ、我儕は主の御召を蒙り御教訓を受けて以來、此世に於て最も安全なる道は、惡を避けて善をなす事であると悟つた一事でございます、キリストに倣ふて如何なるところに行くも、亦如何なる場合にあるも、皆善事のみ行つて居るならば、假令人あり誤つて我を獄中に投ずるも、我儕は何の痛苦を覺ゆる事なく、晏如として其間に在り、且睡る事を得ると存じます、去りながら若し過まつて罪を犯すか、或は殊更に罪を犯すならば、假令縛られて獄中に投ぜられざるも、我儕の心の中には實に云ひ難きの痛苦ありて、眞に堪え難きものなる事を感じるであらうと存じまして、今更ながら御擲びを蒙り御恩寵に沐浴致し居る事の如何に幸ひなるかを感ずる次第でございます、オ、主よ、今日の我日本日本の社會は腐敗に腐敗を重ね、人々の中には罪に罪を加へまして、誠に名狀すべからざるが如き醜體を現はし居りますれども、社會の本心も人々の本心も腐爛してあり、格別自ら責めらる事もなく、又社會も之を咎むる事なく、實に安からざる時に安し〜と叫びまして、恰も別なきかの如く裝ふて居ります、主よ此時に方り聖靈の力を以て、斯くの如き横着なる罪人を打ち給ひ、斯くの如き社會を責め給ふて、切めては個人の本心と社會の本心が動かされまして、國民も亦個人も主の聖前には、實に罪人なる自覺を有するやうに、又其罪より如何にかして脱出せんと欲する向上心を得ますやうに、上よりの御力を注ぎ給は

人事を冀ひ奉る、御召を蒙りたる我儕、基督信徒とパリサイ人の如くならずして、眞實主の聖前に正義の民として、權威を以て社會に望むだけに我儕を清め給はん事を、冀ひ奉る、オ、主よ、日々夜々に穢なされたる聲を聴き、汚れたる有様を見るところの我儕、國民は惡に染み罪に馴れまして、之を憎み之を嫌ふては感想に乏しき者でございませうれば、我々、錦々の感覺を正義の上に立たしめ給ふて、己れ自ら罪を犯さるも人の罪を犯すを見ては、己れ自ら、之を流の中に陥れるが如き思ひをなす者とならしめ給はん事を、冀ひ奉る、今朝、我儕がペテロを學ぶと共に、又ヘロデ王を學び、大いに警覺するところあらしめ給ふやう只管に冀ひ奉る、仰ぎ冀くば罷らんとする者、又聽かんとする者、各自を惡み給ふて、愈々主の聖なる聲を聴かしめ給ふやう只管に冀ひ奉る、願はくは此所のみならず國の四方に於て主を禮拜する者、又世界の全面に於て主を禮拜する、兄弟妹を惡ませ給ふて、聖日を守り聖前に禮拜する事に依つて、此世界は一段の進歩を遂ぐるやうに、御力を添へさせ給はん事を主イエスの聖名の爲に冀ひ奉る、アーメン。

ペテロは如此獄に守られ教會は之が爲に懇切神に祈る、ヘロデ彼を曳出さんとする前夜ペテロは二の鍵に繋れて二人の兵卒の間に睡り守者は門の前に在て其獄を守れり。
(使徒行傳第十二章五、六節)
 ヘロデ榮を神に歸せざるにより主の使者たちを彼を擊しかば彼は蟲の爲に噬れて氣絶り。
(使徒行傳第十二章二十三節)

時は紀元四十四年、羅馬の都ではオーゴストカイザルより四代目の王クロデオが位に即い

た時である猶太ではヘロデ大帝の孫アグリッパ一世と云ふが、元ガリラヤの分封の君であつたのに、クラデオが位に即く時に、元老院の間に大いに斡旋したと云ふ勳功に依つて、猶太とサマリアを加へられたと云ふ事である、此アグリッパ一世は長らく羅馬の都に住んで居つたが故郷が戀しくなつたか、或は錦を故郷に飾ると云ふ考であつたか、羅馬を引拂つて猶太に歸り住する事になつた、猶太に歸つて見れば、どうにかして猶太人の歡心を買ひたい、即ち人望を得たいと云ふ考から、心にもないのに俄かにモーセの律法を振廻して、之を嚴重に守らなくてはならないとか、或は祭事に骨折ることになつた、けれども猶太人はアグリッパ一世は随分俗悪なる小人である事を知つて居るから、夫くらゐな事では餘り謳歌しない有難がらない、何とかして今一つ猶太人にヤンヤと喝采を得たいものだと思へた、困つた事はナザレ宗、即ち當時の基督教が槍玉に擧げられたのであるアグリッパ一世は名もないやうな基督信者を苦しめて見ても夫では猶太人が喝采しまいと思ふて、誰を槍玉に擧げやうかと思ひ物色した末に、彼のヨハネの兄弟であるヤコブを捕へて、別に是と云ふ罪もないのに、其首を打落してしまつた、さてヤコブの首を斬落したので、嗚かし猶太人が喜ぶであらうと待構へて居つたが、どうもヤコブでは餘り効能がなかつた。

そこで當時の基督教會では大立者と仰がれ、即ちエルサレム教會の頭目と仰がれて居るペテロを槍玉に擧ぐるの外はないと思つた、遂にペテロを捕へて牢に放り込んだのである、御承知の如くペテロは一度は使徒行傳の四章の四節に依ると牢屋の中に放り込まれ、又五章の十八節に依ると再び放り込まれて居る、今度は三回目である、第一回と第二回は不思議にもペテロは牢屋の中から遁れ出た、牢に這入つて居ると思つて居れば、宮に立つて説教をやつて居る、所謂神出鬼没と云ふやうな譯で、七十子會議の議員達は、どうもペテロと云ふは手に合はない怪物と思つた、牢屋に放り込んで置いたと思つて居るのに出て来て説教をして居る、今度は云ふ今度は嚴重なる上にも嚴重に、奥の牢に放り込むの外はないと思ふたから、第一の固め第二の固めを過ぎて、其奥の牢屋の中に入れたのである、けれども夫だけではまだ安心が出来ない、兵卒を十六人選んで四人づゝ一組にして、六時間交代で警衛をさせると云ふ事にして、二人は牢の外で番をして居る、二人はペテロの右と左に立つて番をして居る、ペテロの右の手は鎖で右に立つて居る兵隊に縛り付け、左の手は其左に立つて居る兵の手に繋がれて居る、兩方共に張番をして居る兵隊に繋がれて居る、もう此くらゐに繋がれたらば、到底遁るべき途はない。

さて諸君！此所の模様を見ると、エルサレムの教會は其頭と仰がれるペテロが、又候引縛られて牢屋の中に放り込まれたと云ふので、今度は何うしたかと云ふと、毎夜ペテロとヨハネの爲に信者達は一ツ所に集つて神に祈つた、祈禱は聽かれて二人は出て来た、今度は云ふ今度も信者達は馬可傳を書いたマコの母親の家に集つて、固く門を閉じて其中で一生涯懸命に祈禱をして居つた、友の祈禱と云ふ題でお話を致した事を御記憶であらうと思ふ、斯くの如く禍に出遭ふた時に、我爲に一心不亂に祈つて呉れる友があると云ふ事は、是人間に取つては非常なる強味である、友が祈つて居つて呉れると云ふ自覺を有するだけでも、其人に取つては非常なる力であらうと思ふ、さてペテロは或は一日前か二日前の事であつたかは分らないが、イエスのお弟子の中でもペテロ、ヨハネ、ヤコブ、此三人は最もイエスが御寵愛なされた弟子である、云はゞ三人の中の一人、其ヤコブが首斬られた時にはペテロはごくらくらゐに嘆いたであらうか、悲しんだであらうか、嘗に嘆き悲しむのみならず、今度は確かに自分の番だと思つたであらう、果して然り、遂にペテロ自ら縛られて入獄の身となつた、ヤコブが首を斬られたくらゐだからして、ペテロの首が飛ぶのは、疑ひもない事である、實に死は眼の前に迫つて居る、而も自分は右左に立てる兵隊に鎖で縛り付けられて居る、夫に

何と書いてあるかと云へば、此所にペテロは二ツの鎖に繋がれて二人の兵卒の間に睡れり、ある、二人の兵卒の間に安らかに睡つて居る、どれくらゐに熟睡して居つたかと云へば、先きの方を讀んで見ると天の使者が来て揺り起したと云ふ、能く睡つて居つたに相違はない、私は此睡と云ふ一字を讀んで、實に是はエライ言葉だと思ふ、深く味ふべき言葉であると感じた、ペテロが二人の兵卒に鎖で縛り付けられて少しく睡ると云ふ此所まで修養を積んだ此所まで進歩したと云ふ事を考へ來る時には、實にペテロの修養はエライものであつたと思はざるを得ない、諸君が馬太傳の八章の二十四節をお開きになると、斯う云ふ事が書いてある、「此とき大なる颶風おこりて舟を蔽ふばかりなる浪たちしにイエスは寝たりイエスがお弟子方と共に小舟に集つて、ガリラヤ海の中程にお來になつた時に大風が起つて、其湖水は實に大浪小浪で大變な事になつて來た、船も顛覆りさうだ、ペテロもヨハネもヤコブも其他の弟子も多くは此ガリラヤの湖水に馴れた漁夫であつて、度々大風にも出遭つた経験がある、其お弟子達が何うなるか知らぬと思つて周章騒ぐのに、主イエスはごうして居らつしやるかと思れば、船の方に枕して安らかに寝つて居らつしやる、此有様を見たお弟子方、殊にペテロは非常に驚いた、我々海上生活に馴れて居る、大風や大浪に馴れ、居る者でも、斯う

云ふやうな颶風には曾て遭つた事はない、船も顛覆りさうな場合であつて周章だが、主イエスはごうして斯う云ふ事が出来なさるだらうかと、眞實心の底に其イエスの安らけき有様には驚いた、爾來ペテロはごうしたらば斯くの如き場合に安々として睡るやうな人間になれやうかと考へたであらう。

ところが諸君！ゲツセマネの園でイエスが我身の一大事一時起きて居つて呉れると仰しやつたのに、ペテロと他の二人は睡つた、其時キリストは僅か一時眼を覺して居る事が出来な

いとかと甚くお叱りになつた、けれども其時イエスは慈悲の一言をお殘しになつた、心には願ふなれど肉體弱き故なり、睡つてならない時には睡つてならぬ、睡つて宜い時には睡つて宜いところがペテロを始めヨハネ、ヤコブは寝てならない時に寝た、是は失敗である、更にイエスは祭司長の屋敷に曳かれて、四苦八苦の苦痛にお出遭ひになつて居るのに、其時こそペテロは泰然自若として我はイエス、キリストの弟子でござると下僕の間に答へなければならぬ筈であつたのに又遣損つた、私はナザレのイエスなどは知りませんと白を切して空嘯いて居つた、大失敗である、斯くの如く失敗に失敗を重ねる間に何うして自分はこんなに失敗するだらうか、實にごうも取返し不着かない遣損ひをやる、ごうしたらよからうと思つた

101

であらう、遂に我は信仰が足りない、天地萬物の主なる神を信する信仰が足りない、愛の神にて在ます天の父にお任せする信仰が足りない、此信仰の秘密を眞個に握つて居らないからして、又してもく取返の着かない失敗をするものだぞ深く心に感じたであらう、遂に彼は愈々其信仰の秘密を握つた、五旬節の日に立つて大説教をやつたのも、此信仰の秘密を握つたからである、七十子會議の前に引出されて、汝は以來イエスの名に依つて説教をする事はならないぞと戒められた時にも、人に聞くよりも神に聞く方が當然ぢやアないか、我儕見しどころ聞きしところは之を證明せざるを得ざるなりと云つて、七十子會議の議員達があの無學な漁夫、東西の辨へもないやうな愚民と思つて居る漁夫共が、どうしてあゝ云ふ事を云へるやうになつたらうかと驚いたくらゐに、ペテロの態度はシツカリとして居つた、實に一糸亂れない態度を以て、其困難に處する事が出来た、サア今度と云ふ今度、三度目は先にお話する如くヤコブは首を打斬られた、ヤコブの生血の臭氣はペテロの鼻に附いて居る時である、もう今度は自分の番だ、夜が明けたら引張出されて、首は前に落つる場合になつて居る夫にペテロは睡るも眠つたが、安然として嬰兒が母の乳房を啜へつゝ睡るが如き有様で、身は鎖に繋がれてある事を知らずして、錦の褥の上に寝かされたやうな工合に睡つて居る、即

ち信仰の秘密を握つた證據である、神我と共に在す、天の父我と共に在す、主イエス我と共に在す、聖靈の神は常に我四邊に在す、剩へ我を守るところの天の使は我を取巻いて居る、此信仰の秘密をペテロはチャンと握る事が出来た、尙夫に加へて云ふべき事は、ペテロの心の中には神に賞めらるゝと云ふ思ひこそあつたれ、責めらるゝと云ふ思ひは少しもなかつた、又彼得前書を開いて見られよ、基督敎信者たるに依りて責められ耻しめられ誹られると云ふ事は實に幸福である、若し罪を犯したる事の爲に責めらるゝならば何の價値もない、基督敎信者たるが故に如何なる耻辱に遭ふも苦痛に遭ふも夫は幸福だと、斯く斷言し得たところのペテロは、己が心に願ひて寸分耻かしいところはない、何等獄中に打込まるべき罪を犯した事はない、是は正しく基督敎信者たる者が、キリスト、イエスを證明する爲に事茲に至つて居る、首を斬らるれば即ち殉教者として榮光の冠を受くべきものと云ふ自覺を持つて居る。

102

今一ツは第一回の入獄であつたらば、少しはペテロの心にも慟季が打つやうな事があつたかも知れないが第三回目の入獄、牢屋生活を實驗して來た、前の二回は不思議にも神の恩寵に依つて救はれた、第三回目もエルサレムの兄弟達は或所に集つて、我爲に只管祈つて居る

と云ふ事を知つて居るペテロである、神が必らず我を守り我を助けて下さる、我生命は神の御手にあるが故に、何者が我に剣を刺さうとしても、神の御許しがなかつたら駄目である、若し神がもう死んで宜いと云ふ思召ならば、何時でも生命は捧ぐる事が出来ると云ふ、ペテロであるから、斯くの如く安らかにして居る事が出来た、私共でも只今巡査が来て引縛つて、堀川監獄に放り込むやうな事があつても、何にも悪い事をした覚えがない、入獄するやうな筈がない、何かの間違ひであらう、若し人が我を社會黨として囚屋の中に打込んだにもせよ、神我と共に在す、父我と共に在す、何かあらん、此信仰の秘密を握つて居つたらば、夫で安らかに居る事が出来る、彼の山鹿素行が一日阿波守の屋敷に出るやうに、何かお尋ねの次第があると云ふ使節が参つた時に、一度は是はと思つた、けれども平然として總ての始末を着けて、さうして其屋敷に出た、お目に懸ると怪からぬ書物を書いた、播州の赤穂にお預けになると云ふ言渡しを受けた、其時に素行は我を見て居つたところの者が、我態度は少しも亂れず、禮儀作法に叶つて居たさうである、夫から九年の間赤穂に在つて、病氣の外は一日たりとも怠りなく己が道を……己が信するところを行ひ済ましたと云ふ、ペテロは僅か一夜で、山鹿素行は九年の久しきお預けの身であつた、けれども其間に何等本心に耻づると

ころがないからして、己が信する聖賢の道を説いて、遂に大石義雄を始めとして、彼の四十七士を生み出すところの基を拵へたと云ふちやアないか、獄中の聖者、違つたものだと云はざるを得ない近くは吉田松陰が山口に囚の身となつて居るにも拘らず、多くの人物を其間から生出したと云ふ、獄中の聖者は違つたものである。

ところが諸君！世の中には獄外の罪人と云ふ者がある事を忘れちやアならぬ、獄中にも聖者がある、獄外に罪人が居る、ペテロを牢屋の中に放り込んだアグリツバ一世は正しく獄外の罪人である、實に彼れは羅馬にあつて賄賂を使ひ奸策を巡らしカリギユラと云ふ暴虐無道の人が王位に即いた時にも彼れは斡旋して居る、夫にも劣らざるクロデオが羅馬の王位に即くにも、元老院議員の間に黄金を撒き散らして、議員を買収したに相違ない、さうしてどうも彼れの死期と云ふものはひどいものであつた十二章の二十三節を見ると、ビニケ海岸の人々が歩つて来て、さうして非常に賞讃した、アグリツバ王は神のやうなと云つて賞めた、心地よ氣に其お追従を受けて居つた、何と書いてあるか、ヘロデは蟲の爲に噬れて氣絶ゆ、私は此語は何を意味するか知らなかつたが、所謂腹の底が苦痛で轉覆返るやうに痛かつたのだらうと思ふ、さうして遂に心臓が破裂して息が絶えたのであらうと思ふ、私共が子供

の時から知つて居る人で、四十七とか云ふ分別盛りの年齢をしながら、己が保管して居るところの公債を融通し（子供の時に基督教を教へ込まれて居るに拘らず女狂ひをし）、遂に其事が露顯に及んだと云ふ時に、非常に激烈なる腸胃加答兒を起し、遂に突然死んだ者がある、使徒行傳の記者をして筆を執らしめたならば彼れも亦蟲に噬まれて息絶ゆと書いたであらう。

諸君！獄外の罪人は露顯するまでは空嘯いて、罪を犯さるゝが如き顔をして居る、けれども一度神が之を打ち給ふ時に、蟲に噬まれて息絶えざるを得ない、あゝ諸君！我々は神の召を被むりたる者、我々は神の恩寵に沐浴せる者、我々は學者とパリサイ人の正しきよりも優つて、心の底から正しくあるべきやうにキリストの教を受けた者である、我々は若し僅かにも人の金を私するとか、或は不義なる道を辿るとか、本心に責めらるゝやうな事をして居つたならば、幸に露顯せずして其罪を掩ひ隠す事が出来たとして見ても、心の中には本心がある、其本心の後ろには神がある、其苦痛や實に堪え難きものであらう新聞を見る毎にヤア今日は誰が引縛られた、明日は誰の罪惡が露顯するであらうか、もう自分の番だと思つたらば身も世もあられないやうな氣がするであらう、ヤコブが首を打たれて、今度は自分の

順番が来た時に、ペテロは鎖に繋がれながら安らかに睡ることが出来た、私は獄中の聖者を思ふと共に、獄外の罪人の苦痛を思ひ生涯罪を犯さずして、神に仕へ度とは我本心からの祈願である。

第九章 亞細亞より歐羅巴へ

祈 禱

天の父よ。我儕は主が知召す如く肉の体軀を有する者にして、又其肉を誘ひ易き肉の世界に住居する者でございませぬれば、毎日々々肉の爲に忙しむ肉の爲に驅立てられ、時には肉の爲に壓迫されて此世を夢み、或は速かに此世を連れ出んと欲するが如き思ひを生じ易き者でございませぬ、去りながら主よ我儕の多くは肉の快樂に心を奪はれて、主が我儕の肉の中に深く植込み給ふたる靈性の要求を疎かに致しまして、遠く主の聖前より離れ出んとするが如き愚かなる者でございませぬ、主が我儕の爲に定め給ふたる聖日に會ふ毎に斯くの如く聖前に參集し、清らかなる歌を讀み聖書を拜讀し、又聖前に近接する事は、私共の生涯に取つては、恰も沙漠の中に膏腹の地を見出すが如く、最も大切なるものなる事を思ひまして、此日に會ひ斯くの如き祈禱をなすに際しまして、一層深く聖旨の存するところを味ふ者でございませぬ、オ、主よ、六日の間の戦ひに或は失敗を取り、或は心苦しき感じ、或は罪科の爲に抽處にせられたる者がございませぬならば、只今聖前に祈禱をなし、赤裸々にして主の聖前に立つ事に依りまして、各自其罪科の如何に憎むべきかを深く心に悟り、悔いて碎けし心を以て主に仕へ奉る事の如何に麗はしきかを味ひ、今日は各自が清められて御禮に入り、其心の要求を満たされて、聖殿を下り行く事を得させ給はん事を只管に冀ひ奉る、過ぐる日には高知に於て種々なる集會を開かせ給ふて、我儕を用ゐて

主の福音を宣傳なさせ給ふたる事を感謝致します、オ、主よ、此戦ひは未だ終らずして、僕等は歸り來りたる事でございますれば、後に殘れる兄弟達に聖靈を與へ給ふて、多くの靈を主の聖前に捧げ奉るまでに力を竭かしめ給はん事を冀ひ奉る、來らんとする日に開かれます多くの集會の上に、更に豊かなる恩寵と導きを與へ給ふて、此大會あるが爲に我諸教會は潤ひ、信者は勵まされ、更に多くの人々の前に福音の證明をなす事を得させ給ふやう只管に冀ひ奉る、主よ、今日の禮拜を始めより終りに至るまで御手の中に祝し守らせ給はん事を、イエス、キリストの聖名に依りて冀ひ奉る、アーメン。

(使徒行傳第十六章九十節)

使徒パウロは段々傳道旅行を續けて、小亞細亞の西の端、即ち亞細亞大陸の最も西の端であるトロアスと云ふ港まで參つて、信者の家であつたか將又旅館屋であつたか其邊は分らないが、其所に一夜泊まつて何う云ふ事を考へて寢床に就いたであらうか、歴山大帝は其時より凡そ三百幾十年前に歐羅巴より亞細亞へと攻めて來た、諸國を征服して遂に印度境なるインドス河の西の岸まで歩つて來た、斯くの如くして大王は希臘大帝國を打建てた、今パウロはイエス、キリストの使徒としてアンテオケより行を起して小亞細亞の町々に道を傳へて、

遂に亞細亞の西端なるトロアスまで歩つて来たが、心竊かに歴山王の偉大なる事業を聯想せざるを得なかつたであらう實はパウロの方が歴山よりも偉大なる人物であつたらうと思ふ、歴山王は肉的大帝國を興す爲に歐羅巴より亞細亞へ向ひ、パウロは靈的の王國を建設せんが爲に亞細亞の西端まで来たのである、サア是から亞細亞に留るべきか、一ツ海峡を渡つて歴山大帝が興つたマケドニヤに乗込んで歐羅巴傳道を始むべきか、パウロの心の中には確かに其問題が往來したであらう、斯くの如く考へつゝ、睡眠に入つて、其夜幻を見た云ふのである、ごんな幻であつたらうかマケドニヤ人がパウロの前に立つて、來りて我儕マケドニヤ人を助けよと懇ろに請求めた、來りて我儕マケドニヤ人を助けよと云ふ懇請は肉적ではない、靈的である、進んで歐羅巴傳道を始めてはどうかと云ふ聲をパウロは耳にしたのである、實にパウロたる者は心躍らざるを得なかつたであらう、遂に一大決心を致して、船に乗つてマケドニヤに乗込んだ。

諸君、世界に幾多の大宗教が興つたが、悉く亞細亞の産物である、ゾロアストルの教は波斯に興つた、モハメット教はアラ比亞に興つた、波羅門教と佛法は印度に興つた、而して猶太教と基督教は猶太に興つた、希臘は理性に於て論理に詳しい事に於て世界第一の稱を得た

どころの國柄である、ソクラテス以來二十八人の聖賢と名づけられる人々が興つた然るに一人の大宗教家も興らなかつた、只一人の宗教家も興らなかつた云つて差支はない、夫に亞細亞には今お話するが如き大宗教家が興つて大宗教を生出した、夫は何う云ふ譯であらうか希臘の外にしても羅馬は當時の世界を征服するほどの政治家軍人を出したに拘らず、羅馬にも一の大宗教家は興らなかつた、ゼルマンの森林の中にも、何うも釋迦やキリストに匹敵するが如き、否其草履取りになるほどの大宗教家もルーテル以前には興らなかつた、何う云ふ譯かと云へば、一ツは印度と云ひ波斯と云ひアラ比亞と云ひ氣候が非常に熱くして、實に人間の住家としては氣の毒なほどの場所である事を思はなくてはならぬ、昨年であつたか、波斯旅行から歸つて參つた一人の青年に出會ふて色々話を聞いたが、南風の吹く時には悉く南の窓を閉してしまはなければならぬ、何故かと云ふと、宛然輔の口から火を吹掛けるゝほど熱い風が吹いて来る、堪つたものぢやアない云ふ、波斯も熱いところ、印度も熱いところ、アラ比亞も熱いところ、又地上にては別に人目を喜ばしめ、人の身体に快樂を興ふるやうなもの極めて少ない土地柄である、そこへ持つて來て亞細亞人は詩歌的人民である、直覺的人民である想像の翼を擴げて高く九天の上に飛上り、深く九泉の下に潜ると云ふや

うな質の人間である、住んで居る世界が面白くない、搗て、加へて其性質が詩歌的であり、直覺的であり、想像的であるからして、此世の中は嫌な世の中だ、實に苦しい世の中だ、さう思ふと何うしても靈の世界に深く、這入りたくなるといふは是れ人情の常である釋迦の如きも菩提樹の下に坐して幾年の間か沈黙思想したと云ふのは、外の世界を離れて内の世界にズツと這入り込んだ、モハメットが洞穴の中に這入つて考へたと云ふのも外の世界を離れて内の世界を辿つた譯である、ゾロアストルの如きも大方同じやうな徑路を辿つたものであらう、ところが外が嫌であつて内が宜いと斯う云ふ事になると空想又空想、殆んど摺へどころのないやうな空想を人は描くものである、波羅門教、即ち大空想の波羅門教に次で興つた佛教の如きも、まあエライ空想を描いたものである、回教にしても多少空想が混つて居る事は明かである、極樂淨土を描いて、其極樂淨土の部屋の中には幾人でも美人が待構へて居るなぞと云ふやうな極く卑しい天國を描いたが、矢張り天上に美人の安樂國てふ空想を描いたものである。

さて諸君！我等が信ずる基督教は何う云ふ土地に生れたかと云へば、猶太は阿拉比亞、波斯又は印度の如く熱くはない、又後者の如き嫌な國ではなかつた、尤もエルサレム附近の岩

石の露出して居る邊は我等日本人が見たならば、如何にも物淋しいやうな心持がする處であらうが、さう云ふ嫌なところには基督教は生れなかつた、基督教はガリラヤに生れた基督教の開祖イエスはガリラヤのナザレにお生れになつた、ナザレは彼の地方では實に鳥唄ひ花笑ふ、誠に麗はしい自然を有する土地である、キリスト、イエスがお弟子を猶太に求めずしてガリラヤの湖水の畔にお求めになつたのはそも如何なる譯であらうか、ガリラヤ湖は翠綠満る山々に取圍まれ、その水は清冽水晶の如く、中に大小の魚が潑刺として躍つて居る、ガリラヤ湖邊より東北の方を眺むればヘルモン山は四時白雪を頂いて空際に聳えて居る、北の方に向へばレバノン山と對しレバノン山の山脈が綿々として其奥深いところを示して居る、私共は考へものだと思ふ、基督教が阿拉比亞、波斯、印度に生れたならば、全くの空想に陥つてしまつたかも知れない、幸ひにガリラヤの如き天然の美景に富める土地に生れた、尤も猶太人も同じ亞細亞人であるから、直覺的であり詩歌的であり想像的であると云ふ事は變らぬ、夫は大預言者、大宗教家を生ぜしむるに最も必要なものである、イエス、キリストも同じく其三ツの要素は備へて居らつしやつたけれども、今お話するが如き美しき地上に御生活をなされて四邊の人間は嫌な連中で堪へ難く、幾度もくお感じなされたであらうが、人間

が嫌になつて來れば一足お歩きになると直きに幾多の小山が待つて居る一度足を谷間にお
踏込みになると白百合の花や、其他の麗はしい花が入来しやい〜と云つてキリストを招い
て居ると云ふところである、キリストの教は深い〜天上の事を描き、其天上の主たる愛の
神をお描きになつたと共に、此世界を極樂にしよう、此世界を天國にしよう云ふの思召で
決して此世は悲しき辛き恨めしき嫌な世の中と思はずして、之を征服して正義と仁愛の満て
る神の國となしたいと云ふ思召で、福音の道をお擴めになつた、丁度夫で格好な教が出来た
譯である。

さて諸君！もう一ツ考へて見たい事がある、今パウロはマケドニア人の請に依つて、エジ
ヤン海を渡つて歐羅巴に這入つた、教は猶太から西へ〜と進んで行つた、若し其初めに教
が東へ〜と移つて來てアラ比亞に傳はり、波斯に傳はり、印度に傳はり西蔵に傳はつたな
らば、基督教は何う云ふやうなものになつたであらうか、近頃恁云ふ説がある、キリストの
お弟子のトマスが印度に這入つて達磨大師となつて教を傳へたと云ふ、マア是は傳説である
から信を措くに足らない、けれども基督教が西へ〜と行く代りに東へ〜と傳はつて來て
遂に印度に這入つたと致すならば、其結果は何か、其結果は碧巖録、其結果は神宗風の教と

變つてしまつたであらう神の攝理は亞細亞に生れた基督教を亞細亞で育てずして歐羅巴にお
育てになつた、マケドニアから希臘に這入つた、希臘の思想に養はれた人々の間に基督教が
傳はつた、さて此希臘人若くは希臘人の感化はどんなものか、希臘は南を受けた、西風のソ
ヨ〜と吹く良い國である、希臘人は實に人生を樂しんだ國民である、希臘人はウキナス女
神の大理石像やアポロ男神の像を残した、如何にも美を憧れ慕ふ國民であつた、アレオ山の
頂きに築かれたる神の宮又は裁判所は希臘風の建築と申して、今日世界の建築の範疇となる
べき、善美を極めた建物である、さう云ふ美しい都會を拵へ宮殿を作り、建築物を經營して地
上を樂しんだ、尙又希臘人と云ふのは理性に富んだ國民である、論理に長けた國民である、親
に孝行をせよと云へば、何故に親に孝行をしなくちやアならぬか、さうして親に孝を盡すべき
理由が分つたならば孝を盡すが、理由が分らなければ孝を盡す譯には行かないと云ひ、君に忠
を盡せと云へば、何故に君は尊いか、何故君たる者を置かなくちやアならぬかと、理窟を捏ね
る國民である、左ればこそプラトールの哲學も生るれば、アリストテールの論理學も生れ、ヘロ
ドドス、シユシデデスの如き歴史家も生れた譯である、さう云ふ哲學、文學、史學又は藝術
の盛んなるところに、パウロに依つてキリストが傳へられた、直覺的な、想像的な、詩歌的

な亞細亞風の土地に生れた基督教が論理的な、理性的な、哲學的な、藝術的な希臘に於て育
てられた、神經質の親が産んだ子供を神經質の家で育て、大きくなつたら、ヒステリーにな
るか神經衰弱になるか知れないからして、極々頭腦の確かなる親類の家に頼んで育てたら調
節が取れる、亞細亞で生れた基督教は希臘で育てられた、一方には亞細亞風の深い詩歌
的な翼を擴げ他方には歐羅巴風の論理的な、理性的な、哲學的な翼を拵へて、さうして此二
ツの翼を以て全世界に翱翔ると云ふ基督教になつた、實にパウロはトロアスに於て、一夜マ
ケドニヤ人來りて我儕を助けよと云ふ懇請を受けて、海を乗越えて歴山大帝の國を興した
が亞細亞から歐羅巴に來てインドス河に足を留めて再び歸つて遂に大帝の死後國は四分した
と云ふ事に比べて見れば、パウロの事業は彌々榮えに榮えゆき遂に今日は全世界を風靡する
事になつたのは、實に神の攝理と云ふの外はない。

私は斯くの如く考へ來つて、諸君と共に今日如何なる教訓を學ぶべきかを思はざるを得
ない、人間にはどうしても此二ツの方面がなくてはならない、詩歌的な、直覺的な、想像的
なところがなくては到底進歩しない、少年青年の時代は即ち夫である、冒險小説を好むもの

である、サア明日は遠足だと云ふと息子も娘もその晩は眠られない、何故眠られないであら
うか、サア明日は金剛山に行く、金剛山に就て幻を見る、イア琵琶湖巡りに連れて行かう、
琵琶湖に就て幻を見る、大きな山を描き谷を描き又湖水を描きさうして眠られない、其所が
進歩する所以である、老年になるともう血が涸れてしまつて居るからどうです、明日金剛山
に行かうぢやアありませんか、廠も生えて居ります、廠も生えて居るか知らないが廠取にゆ
くくらゐならば八百屋で買ふて來た方が宜い、そんな山へ登つたり何かすると腰が痛くて算
用に合はない、直きに算盤を弾く、義理か役かのやうにして引張り出されて辛と山登りをす
る、愈々此世界が面白くなくなつてしまふ、少年青年は幻を見る、夢を見る、實にどうも私
共が見て詰らないと思ふ事が、其連中には面白くて堪らない、其點が必要である、私共が
キリストの教を此所に味はうと云ふ時に、想像の翼を擴げて神の御前に上らねば不可い神の
恩寵の聖座にまでパウロは上つたと云ふではないか、我は第三の天に上つた、人の口にて云
ふべからざる言葉を聞いたと云ふ、パウロは若かつた、想像の翼を擴げて天に登つた、神の
御前にお話に行つた、我儕は時に想像の翼を擴げて未來の世界に乗込んで行つてヨハネと話
をしたり、パウロと交はり、時にはプラトーンやアリストテレスと膝を交へて大議論をやつて

見ると云ふくらゐにせねば不可い、算盤ばかり弾いて居ると人間は陰鬱な人間になつてしまふ、ア、内の家も大分疊が破れて来たし、壁は剥げて来たし、天井を見れば何だか染が附いて居る、此處で始終寝たり起きたりして居らなくちやアならぬかと思ふと人生が嫌になつて来る、其人生が嫌になつた時には、障子をサツと開いて縁側に出て仰向になり、さうして天を仰いで見る、ア、どうも神が居らつしやる天國がある、天國にはヨハネがどう云ふ顔をして居るだらうか、ペテロはどう云ふ風にやつて居るだらうか、ペテロとパウロは喧嘩したのが今頃は何う云ふ風に手を握つて居るだらう、さう云ふ事を考へて見る、イエス、キリストのお弟子方はキリストの足許へ行つてどんなに嬉しい事であらうか、夫からマア自分の行末は何うなるだらうかかく考へ居る間に其狭い六疊敷も、壁は剥げ疊の破れたのも何にも苦にならぬやうになつて来て、實に王侯貴人になつたやうな大きな氣になるではないかサア御婦人達がヒステリーになる、何の爲にそんな事になるのかと云へば、物は段々高くなつて来る去年までは薪炭料が月に三圓あつたら宜かつたが、今年は五圓要るやうになつた、味噌醤油は段々高くなつて来る、米の値段はお構ひなしにズン／＼上るそこへ持つて来て子供は遠慮會釋なく生れて来る、ア、辛い事だと斯うジツと考へ込んで、遂に氣が小さくなつてしまふ

と、神経がビリ／＼……(笑聲起る)もう堪らない、そんな時には其障子をサツと開けて天國を眺めたら宜い、私が師事したゼンス先生が怙云ふ話をされた、私の父の家に女中があつて、多年仕へた、今のやうに栓を振れば水がサツと出て来るやうな時代ではなかつた、其女中がバケツを兩方の手で提げて井戸に水を汲みに行く、夫から重たいバケツを提げてヨイシヨ／＼と歩つて来る、其重たい水の入つたバケツを下に置いて、さうして腰を伸ばしてジツと斯う天を眺めて居る。婆や何をして居ると聴かされると、星の閃く彼のところには天國がある神様が在す、今に彼所へ行けるかと思ふと實に嬉しくて堪りませんと云つた。諸君！夫が大切である。亞細亞人は其所に行かうと思ふて、ズツと一方の翼を擡げて見たのであるが夫だけに止まつた、キリストの教には、二ツの翼がある、左の翼では天に翱翔り、右の翼では此世の中を天國にする、家庭を天國にし社會を天國にする、二ツ揃はねば不可い、基督教が先づ東へ行く代りに段々西へ／＼と行つて居つたところが、理窟ツばい歐羅巴人、獨逸人が考へる、英吉利人が考へる、夫から實際的の亞米利加へ這入つて行つて、宗教が實際的／＼と云ふ事になつた、牧師はもう多忙／＼の一點張で祈禱をするよりも働かなくちやアならぬ、部屋にデツと這入つて聖書を読むよりも救貧事業に多忙いと云つて、さうし

て此世の中を極樂にする事ばかりに力を盡すやうになつたからして、想像の翼は餘り動かなくなつた、夫で今度は神の御攝理で歐羅巴から亞細亞、亞米利加から亞細亞へ段々と傳はり、到頭今度は亞細亞の東の端に基督教が這入つて來た、即ち日本に基督教が這入つて來た支那、朝鮮に基督教が這入つて來た、今度は何を意味するかと云へば、詩歌的な想像的な翼をもう少し擴げやうと云ふ意味である、歐羅巴の方では右の翼だけが大きくなつて左が利かぬ、夫で亞細亞へ基督教が這入つて來た、左の翼をもう少し大きくしなう、此方が右が擴がつて居れば、左も五尺にする、些ども變りはしない、日本に基督教が這入つて來たのは、キリストの教を直覺的に詩歌的に想像的にするところがなくちやアならぬ、私共が祈る信者となり、黙想する信者となり、想像の翼を擴げて神の聖前に始終進んで行つてさうして限りなきものと思ひ、限りなきものを慕ふて、天の父と共にあると云ふ實に奥行のある基督信者になつて、今度は又亞細亞から歐羅巴へ、亞細亞から亞米利加へ基督教を傳へねばならぬこととなる。

斯くの如くして初めて神の聖意が世の中に完成する譯である、御互ひ一人一個にして云ふならば、基督教によりて道德さへ得たら結構だ家庭が立派にさへなつたら宜いと云ふだけの

人は右の翼を擴げるだけの人である、もう道德や家庭やそんな事はどうでも宜い、悅樂の宗教で、毎日聖書を三時間も讀み、祈禱は五時間もするのが宜いと云ふ突飛な事を云ふ人は、左の翼のみ擴げる人である、亞細亞と歐羅巴……其想像的であると共に理性的であり、直覺的であると共に論理的であり、空想的であると共に實際的であり、始終心の中に調和して學んで行かなければならぬと云ふ意味である、此大教訓に基いて諸君と共に、もう少し私共は奥行のある、基督信者となりたいものである。

第十章 聖者と權利

祈 禱

天の父よ、我儕は主の聖前に出で、何を願ふべきでございませうか、實にカリホルニヤ選出の州會議員なる者は主の聖意に背き、人種の別をなし、人道を無視し、己れの名譽と利益の爲に何者をも犠牲にせんとするが如き暴舉を企て居る事でございませう、主よ、彼の地に在ります眞實主の旨を奉じて立つところの主なる兄弟姉妹は、斯くの如き非人道斯くの如き非兄弟、斯くの如き憲法違犯の議を通過せしむる事なくして、どうか彼等がワシントン以來の遺訓を奉じ、其國是を完うするやうに、上よりの御指導を與へ給はんことを 冀ひ 奉る、オ、主よ、我儕は今日我國の爲に何を祈るべきでございませうか、實に主の御道を奉ずるところの信者も正義の爲に戦ひ、正義を以て 眞く精神が乏しきには非ざるかを思ふ事でございませう、主が 贊はす時に果して斯くの如くでございませうならば、主よ、全國にあるところの基督教信者を 鞭ち勵まし給ふて、正義と權利の爲には一歩も負くる事なく、各自其信するところを貫徹する上に、偉大なる力を得せしめ給はん事を 冀ひ 奉る、今日我國に於て政事を執る者、會社、銀行其他有利の經營をなすところの者には其眼中正義なく、只自己の利益あるのみなるを思ふ事でございませう、主の聖前に於て果して斯くの如き状態にございませうならば、父よ、我國民全体に反省を與へ給ふて國の滅ばされざるに先立ち、どうか國民全体が正義に立歸りまするやう、上よりの御

指導を與へ給はん事を 冀ひ 奉る、今朝我儕はパウロとシラスの事に就て學ばんと致して居りますれば、どうぞ我儕を恵み我儕を導き誤る事なく、其教訓を味ふ事を得せしめ給ふやう 冀ひ 奉る、今朝の禮拜に依りまして我儕 餘々は清められ、正義の念に満たされて聖殿を下り行く事を得せし給ふやう、キリスト、イエスの聖名に依つて 冀ひ 奉る、アーメン。

パウロ彼等に曰けるは我儕ローマ人なるに罪を定めて公然に我儕を杖ち且獄に入たり而して今ひそかに出さんとなすが宜からず彼等みづから來りて我儕を引出すべし、下吏の言を上官たちに告げれば彼等そのローマ人なるを聞ておそ、來て彼等に此より出んことを求つひに引出して又その邑を去んことを請たり。

(使徒行傳第十六章第三十七—三十九節)

御記憶であらうが、前々の聖日に河邊の祈禱場と題してお話を致した、其所禱の場所にト筮をする一人の女が居つて、一心不亂にパウロの話を聞いて、今まで嘘偽の手段を以て人を欺して利益を得たと云ふ事が如何にも過失であつたと悟つて、遂にト筮の事業を廢めたのである、丁度一人の醜業婦が其操を汚す事の如何に天理人道に背いて居るかを知つて、其醜業を廢めやうとする時に、夫が爲に金を儲けて居る樓主と云ふ奴等が、毎でも拒んで廢めさせまいとするのである、丁度其如く一人の女を手先に使ふてト筮をさせて金を儲けて居つた輩は、どうかして其嘘偽の手段を續けさせたいと運動を試みたのであるが、女は甚くパウロの

教に感じたものであるから断じて再び嘘言偽言の卜筮はしないと決心した、そこで金の外には何者をも考へない我利々々盲者のみの事であるから、パウロとシラスを甚く恨んで、彼等二人が来て教を説きさへしなかつたならば、斯う云ふ事にはならなかつたであらう、二人は實に憎むべき我儕の職業の妨害者と考へた、遂に二人を取押へて邑の上官の所に引張つて行つたと書いてある、此上官と云ふは殖民地の民團長であつて、二人其任に當つて居る、市長が二人居るやうな者である、上官は何の事でパウロとシラスを訴へたかを糺して見ると、どうも我儕の受くべからず行ふ可らざる所の習俗を傳ふる者だと云ふのである、其意味は羅馬の教はカイザル王を神として拜むと云ふ事である、パウロが説くところの教は天の神の他に神はないと云ふ、マア日本で云へば國體に違犯するところの教を説くと云ふ意味に當る、大抵であるならば上官は取合はぬのであるけれども、所謂ボスと云ふ奴が附いて居る、即ち利益の爲にはどんな事をオツ始むるか分らないと云ふやうな我利々々亡者が附いて居るから、其云ふ事を聴かないと何かあられもない運動を致して、上官の不利益になる、其點がいつでも政治家の弱點である、此上官はパウロとシラスを吟味もせずして笞を以て鞭撻つたさうして典獄に此二人を嚴重に獄舎に入れて繋いで置くと命じた、典獄は是は何でもエライ罪人だと

思ふたから、奥の牢に入れたと書いてある、奥の牢と云ふは巖石に大きな穴を開けた穴牢である、さて二人は背から血が出るほど叩かれて、其痛さを忍んで奥の牢に……而も穴牢の中に打込まれた、大抵な人であるならばもう夫で弱り果て、しまふ所である、然るに二人は夜半頃に聲朗々として讚美歌を謡ひ始めた、當時の基督教信者は夜半に歌を謡ひ神に祈ると云ふ習慣があつたと云ふから故意と夜半に祈つたのぢやアない、信者の習慣に従ふて夜半二人は歌を謡ひ祈禱を始めたのである、嘗て獄中の聖者と題してペテロのお話をした事があつた、パウロとシラスもペテロと同じやうに獄中の聖者である、囚人は耳敬て、其歌謡ふ聲を聴いて居つたと書いてある、祈禱の聲にも多分耳を敬てたであらうと思ふ。

斯くの如く二人が讚美し祈禱して居る時に、俄かに大地震があつた、小亞細亞は地震の多い土地である、其地震の爲に獄舎の戸が自然で開けた、典獄は大事な罪人を預かつて居るのに戸が開いたので多分逃げたらうと思つた、而も上官から嚴重に縛めて置くと吩咐を受けて居りながら、此罪人を逃がしては責任がどうも立たない、責任上生きて居られぬと思つた、餘程氣の早い男で直きに刀を抜いて自殺しようとした、パウロは大聲に叫んだ、自殺をなさるな、我儕は此所に居ます、逃げも何にもしません、其時に典獄は實に獄中の聖者の神々し

い姿を見て、而も悠然として其地震にも恐るゝ事なくして居らるゝ、状を眺めて、二人の前に俯伏して、我儕はとうしたらば救はれませうかと云つた、聖者は此典獄と其家族の爲に諄々として教を説いて、遂に全家族決心して洗禮を受けたと書いてある、如何であらうか、私共が一朝引縛られて堀川監獄に投込まれたと云ふやうな場合に、此二人の如く超然として天に任じ、悠然として道を樂しみ、實に靄然たる春風に吹かるゝが如き思ひを以て讚美歌を誦ひ、神に祈り、而も地震にも恐るゝ事なく、人々周章騒いで居る中、典獄に向つて教を説くと云ふやうな事が出来るであらうか、餘程心の底に活きた信仰、度胸の坐つたところがなくしては六ツかしからうと思ふ、神を信じキリストを信すると云ふが確乎でなくちやアならぬ、信者の中にもどうやらすると度胸が坐つて居らない爲に、まさかの場合に周章で取亂すやうな事があるやうに思はれる、實に残念な事である、事のない時に麗はしい信者である事も望ましい譯だが、イザ事と云ふ時に一糸亂れない態度を以て、己が平素の信仰を實現する事が更に大切である。

さて諸君！パウロは哥林多前書の第六章に於て、信者達に向つて決して裁判所に訴へをするな、正しからざる法官の前に御互ひの間の事に就て訴訟をするなど固く戒めて居る、正し

からざる裁判官に鞠いて貰ふよりも、寧ろ自分が害を受けて置く方がましではないかと申し居る、どう云ふ意味で斯くの如き事を云はれたであらうか、私は裁判所に主にある兄弟を訴へるよりも、寧ろ自分が害を受けて置く方が宜いと云ふは、即ち聖者の面目を現はして居る事と思ふ、イエス、キリストも若し「人爾の頬を批ば亦ほかの頬をも轉して之に向よ、若し人爾の裏衣を取らうとするならば外服をも與へよ、若し一里の公役を強なば之と共に二里ゆけ」と命じて、惡に敵するなかれとお教へになつた、實に是が聖者の面目である、聖者はそんな事の爲に争ふべきぢやアない、取るに任せ、批つに任せて置いたら宜しい、そんな事で争ふべきではないと云ふ意味である、諸君が眼を閉ぢて聖者と云ふ事をお考へになつたらば、どんな考が浮ぶであらうか、聖者と云ふは莞爾な顔をした、粗服を着けた俗離れした人で、決して喧嘩口論をしたり、或は權利争ひをしたりするやうな者ではない、確かに夫は聖者の面影を寫して居る、東洋風の聖者の面影は夫である、福音書の記者はキリストを描いて「彼は争ふ事なく、黙しき事なく、其言葉は巷に聞えざりき、彼は傷める草を折る事なく、煙れる麻を燵事なし」と書いてある、實に虫も殺さないやうな實に優しい神々しい君子であつたと云ふ事である、夫が聖者の面目である。

ところが諸君！哥林多前書に於ては争ふな、訴訟するなど固く戒めたパウロが、ビリビに於て亂暴人の手に縛り上げられて、奥の獄舎に打込まれたと云ふ時に、其時は黙つて居つた、亂暴人がする事であるからして、縛れば縛るまゝになつて居つた、上官が命じて鞭撻つた、時にも、亂暴人がワイ／＼と騒いで居るから、叩かるゝまゝに叩かれて居つた、愈々明日になつて、パウロとシラスに何等の罪もないと云ふ事が分つたからして、上官は典獄に命じてパウロを無罪放免にせよと云つた、そこで下役が參つてサア上官の命令だ、もう牢から出て宜しいと云ふた、大抵な人であるならば、縛る時か、鞭を當てやうとした時に何故私を縛るか、何故鞭を當てるか、我こそは爾曹が犯すべからざるころのローマ人であると、そこで權利を主張するであらうが、パウロは其時は權利を主張しなかつた、もう事が済んで、サア是から出て宜いと云ふ段になつて、我儕はローマ人であるのに罪を糺さずして鞭撻ち、且つ獄に投じたのは怪からぬと、嚴然としてローマ人てふ權利を主張した、サア夫を聞いた時に典獄は蒼色くなつた、さうして直き上官のところに注進した、昨晚奥の牢に打込みましたパウロとシラスはローマ人でございます、何ぞ致したら宜しいかと、上申した、茲で思ひ出すのはシ、ロの語である、云はく「ローマ人を縛る事は罪惡である、ローマ人を鞭撻つ事は誹毀罪に同じ、

ローマ人を殺す事は親殺しの罪に齊しい」と、之に由て如何に當時のローマ人と云ふ者は特權を有つて居つたか分る、役人共はローマ人たることを知らずして耶蘇の傳道師ぐらゐなところで引縛つて獄中に打込んだ、ところが朝になつてもう免さうと云ふのに承知しない、我儕はローマ人である、パウロはキリキヤのタルソの名門に生れた人である、どうしてお前はローマ人にはなつたかとヘリキスが尋ねた時に、生れながらである、祖先以來のローマ人であると云つた、シラスはどうしてローマ人になつたかは分らない、けれども我儕はローマ人であるのを見れば、シラスもローマ人であつたに相違ない、サア上官はどうしやうと閉口した、パウロは幕僚が來て挨拶するくらゐな事では承知が出來ぬ、上官自らが來つて挨拶をしなければならぬと云ふ、そこでどうもローマの上官も今まで傲然たる態度に引換へて、態々牢屋に駕を枉げて、パウロとシラスの前に頭を低げて、どうもローマ人と云ふ事を知らずして不調法を致しました、どうか此牢屋からお出まし下さいと申した、するとさう仰しやれば出ませう、ビリビの邑からもどうかお去りになる事をお願い致します、ア、宜しうございます、さう御挨拶になれば出ますと云つた、是は聖者が權利を主張したのである。

東洋では……殊に支那、日本では佛僧と云ふやうな者は忍辱と稱へて、どんな耻辱でも唯

々諾々として夫を忍んで居るのが聖僧の本領と云ふやうに教へ込まれてある、基督教の聖者は詰らない事の爲には争はない、衣服を奪はれても頭を叩かれても、争はない、イエス、キリストは先に私が引いた如く、左の頬を叩かれたら右の頬を向けよ、裏衣を取らうとするならば外服をも與へよ、一里の公役を強なば之と僧に二里ゆけとお命じになつたのは、是は相弟子の間に於ては亂暴な事をする者があつても、夫は構はずしてするがまゝに任せて置けと云ふ事をお示しになつたのである、其イエス、キリストがエルサレムの宮にお這入りになつて鞭を拵へ、牛羊を商ふ者鳩を賣買する者、兩替をする者を悉く追出しておしまひになつたのはアレハゴウだ……預言者としての神の宮を清むる權利を遂行なさつたのである。預言者と云ふ者は、王侯貴人と雖も道に背く時には之を叱咤する權利を有つて居つた、ナザレのイエス、キリストは預言者として、宮を清むる權利を神から授つたと御自覺になつたから、ア、云ふやうに手荒い事をしていかゞはしい者共を追出しなされた、其時には宮の司も居れば警護の武士も居つたが、イエスの御威光に恐れて、誰一人取押へる者はなかつた、イエス、キリストが權威をお揮ひになつた譯である、使徒パウロが度々我はローマ人なりと云ふ權威を振廻したのはそこである、己れの一身上に關係するやうな事であるならば、パウロはどんな目

に遣はされても、堪へて居つたであらうと思ふ、けれども神の教を天下に宣傳しなくちやアならぬ、神の聖國の爲にどうしてもローマ人である權利を主張しなければ、此道を擴むるのに邪魔になると考へたから、此點は實に神の聖國の一大事と思つたからして、權利を主張したのである、キリストが我泰平を出さん爲に來れりと思ふなかれ、刃を出さんが爲なりと仰せられたのは其點である、實に虫も殺さない、傷める草を折る事なく煙れる麻を煙す事なき優しいキリストが刃を出さんが爲に來たとお叫びになつたのは、主張すべき場合には權利をも主張する、揮ふべき場合には天より與へられたる權利をも揮ふべしと云ふ事をお示しになつたのである、私共も阿呆と云はれても白痴と云はれても、事一身に關する場合であるならば默然として忍んだ方が宜からうと思ふけれども、今度カリフォルニアに於て亂暴な白人が、日本人からして土地を所有するの權利を奪ふと云ふ、カリフォルニア州の憲法の第一條に、何人にもカリフォルニア州に於ては土地を所有する權利があると認めてあるに拘らず、憲法を蹂躪して、日本人のみに土地所有の權利を許さない、斯う云ふやうな場合には聖者と雖も争はなければならぬ。

諸君！人間には三ツの天より與へられたる、動かすべからざる權利がある、一ツは己が生命

を守る権利である、一ツは自由を保つ権利である、一ツは己が財産を安固に保つ権利である、此三ツの権利は天より附與されたものである、此権利を我儕から奪はうとする者があるならば、何うしても立つて争はなくちやアならぬ、如何なる場合に於ても争ふてならぬと云ふのぢアない、どうでも宜いと云ふやうな事であるならば、イザ知らず、事苟くも己が生命とか己が所有権とか、己が自由に關し、殊に私の思想の自由を束縛し私を一室の中に監禁し動かさないと云ふやうな事をする者があるならば、私はどこまでも人間として、其権利を主張しなければならぬ、罪のないパウロ、同じく罪のないシラスを獄中に打込んだと云ふは即ち自由の権利を奪はうとしたのであるから聖者パウロは争はざるを得なかつた、もう事は済んだ後のやうであるが、矢張り争ふべきだけは争はなくちやアならなかつた。

諸君！私共が平素諸君の前に申述べて居る如く、情實と正義と云ものを混同ならぬやうに願ひたい、博愛と権利を亂さないやうにして貰ひたい、私共は同情同感の人でなくてはならないのであるが、何ぼ人に同情を表し同感を與ふるとしても、正義に背いた氣の毒な出来事であるならば、同情同感にはなられない、博愛衆に及ぼすに己が財産は愚か、己が生命をも人に與ふると云ふは基督教信者の立場である、けれども天より與へられたる権利を奪はう

とする者があるならば、其権利を奪はれてはならない筈にパウロばかりぢやアない、ミラノの大牧師アンブロスが、時の帝王が不義の戦を興して、罪なき者の血を流した、戦争が済んで教會に聖餐を守らんが爲に鹵簿を整へて入來しやつた、其時アンブロスは教會の門に立塞がり、時の帝王に向つて爾は不義の戦を興し、罪なき者の血を流したところの罪人である。其罪を悔改むるに非ざれば、一步も此會堂に足を踏込む事を免さないと叫んだ事がある、英國の清教徒は自國に於て自由に己が信するところに基いて神を拜むことを許されなかつたので去つて和蘭に移り、和蘭でも自由の禮拜が出来なかつたので遂に二艘の船を雇して大西洋を横切つて、亞米利加の地に雪と氷を破つて上陸して、さうして自由に神を拜すると云ふ権利を確立したのである、是くらゐに昔から基督教の聖者は権利を重んじて居る、権利を重んじて居ればこそ、西洋の文明が今日の如く進んだ、西洋の人民が今日の如く眞個の幸福を享け得る事になつた、東洋流、佛教流の聖者で叩かれても、罵られても、追出されても、財産を奪はれても、忍辱と稱へて唯々諾々として、もう世の中は棄て、居るからして、もうそんな事には頓着しないと云ふ事であつたならば基督教も滅茶苦茶になつたであらうと思ふ、實にパウロが今や許されて牢を出んとする時に方つて、我はローマ人なりと叫んだ、其権利を主

張したと云ふ事は、千古萬古動かすべからざるどころの大教訓を天下後世に與へたものといはざるを得ない、聖者と権利、どうぞ此教訓をいつも胸に納めて、さうして基督教の愛の中には正義がある、聖者と権利……長く久しく胸中に刻んで、場合に依つては、其権利をも諸君が主張して已まざるどころの、正義の人となられん事を切に希望する次第である。

第十一章 パウロの大説教

祈 禱

恩寵に富ませ給ふ天の父よ、我儕は罪と愁と迷ひとの爲に靈眼曇りまして、主が我儕に近く在し給ふ事さへ意識する能はずして、暗黒より暗黒に移るが如き、誠に憐れなる狀に居りますれども、主は近く我儕の四邊に在し又心の中に在す事にございますれば、我儕の靈眼此所に開けさへ致しますれば確かに主の御威光に照れ、主の現在を認識する事を得ると存じます、主よ、今朝は此所に會合せる我儕、銘々の心に聖前に在る事を意識し、如何にしても主を離るゝ能はざる事を自覺し、どうか毎も主の聖前に在る思ひを以て其心を養ふと共に、聖意に叶ふ行動をなし得る者とならしめ給はん事を冀ひ奉る、父よ、今我儕と共に在して、愈々篤き信念を我儕の間に振ひ興さしめ給はん事を冀ひ奉る、我儕は只一個人として主と共に在す事を悟るのみならず、實に今日神の在す事な悟らず、未來の生命ある事を知らず、罪と愁と迷ひとの中であつて墮落より墮落に落ち行くところの我國民の間に、主の現前を知らしめて、一大覺醒を與へ給はん事を冀ひ奉る、主よ、我儕、銘々が聖前にある事を自覺致し、隨つて己の罪の如何に深きか、如何に憎むべきか、又我儕は如何に聖前より離れ居るかを思ひまして、主の聖前に立歸る者とならしめ給はん事を冀ひ奉る、今朝我儕と共にあつて上よりの御力を添えさせ給はん事を、キリストの聖名に依つて、冀ひ奉る、アーメン。

此は人をして神を求め彼等が、或は操縦する事あらん爲なり然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざる也、我儕は彼に頼りて生きた動また存ことを得たり爾曹の詩人たちも我儕は其儕なりと云し如し。

(使徒行傳第十七章第二七八節)

本日の題は「偉人パウロの大説教」と云ふのである、私はツヒ昨日一昨日までも此説教は思想に於いては非常なるものであるが、説教としては左程エライものではないと思つて居つた、ところが今回之をお話しようと思つて色々研究を致した末に、是は實に非常なる大説教である事を發見した。説教が大だとか或は小だとか云ふ事は、何に依つて定むるか云ふ人があらうと思ふが、多くは其説教の結果を見て云ふのである、私共も矢張り其一人で、アレオ山の説教は餘程よく準備された話であつたが、其結果としては僅かな人が悔改めたに過ぎないので、パウロも遣損つたやうに思ふたのではなかつたらうかと云ふ考も起つたけれどもさう云ふ事に依つて定むるのは、大きな間違ひである、説教に依つて或は二百人三百人、時には千人二人人も悔改むる事があるが其説教必らずしも大説教とは云へない。昨年英國のケシントンと云ふところで開かれた夏期講習會の説教集を見るに其話は大いに聽聞者の心を動かしたものであると云ふ事である、けれども私は夫を讀んでこんな詰らない事を聽く人も聽く人

たが、能く喋舌たものだと思つた。

例之ば前世紀に於てムーデーと云ふ人は、説教の都度二千三千の人が聽聞に參つて、幾百の悔改者を出したと云ふが氏の説教の中に大の字が付くのはあるかないか、若しあつたとしても極く少なからうと思ふ、又昨年英吉利のジブシー、スミスと云ふ人が、亞米利加の太平洋沿岸の町々を歩いて、三千四千の聽衆を引付けて澤山の悔改者を起した、けれども天下後世に残るやうな大説教はあるかないか、先づないであらうと思ふ、其時に聽いて人々の心が動いても、夫は説く人と聽く人の氣合と、又神の聖靈が其所に下り給ふたと云ふやうな場合に動くのであつて人を動かした説教必らずしもエライとは云へない。其時は格別感動を起さないやうな説教でも、後で考へて見ると、何か自分の心の中に一の幽玄深奥なる思想を打込まれて、爾來其思想が我心の中樞を掴んで我を支配して來る、忘れやうとしても忘るゝ事の出來ない、其思想を脱しようと思つても脱する事の出來ないがある。眞に五年経つても十年経つても五十年経つても、我心を離れない、一時的のものでなくして永久的のものである。斯く私がお話をして居る間に、十七八の時に聽いたゼンス大尉の説教が二ツ私の頭に浮んだ、一ツは約翰傳三章を引いて更生の事を説かれたのである、今でも私は其説教を諸

君の前に聴いたまゝに繰返してお話する事が出来る、もう一ツは限りなきものと云ふ説教であつたが、是は非常に六ツかしい話であつたから、私の頭の中には充分這入つて居ないから話す事が出来ないが、限らないものと云ふ思想は、其時私の腹の中に充分に印刻された、是等は小説教である。使徒パウロのアレオ山に於ける説教は、其時は格別な事はなかつた、けれども爾來千八百五十歳、幾千萬の人々が此説教を讀んで、パウロの大思想に動かされて居るか知れない、千八百五十歳人の心を動かして事だ説教は、更に千八百五十歳経つても、三千歳一萬歳経つても、人間が人間として存在する間は、確かに人々の心を動かすであらう斯く私が申したらば、諸君の中には夫は聖書の中に載せてあるからだらうと仰せらるゝかも知れない、夫は無論聖書に載せてあるからであらう、去りながら同じ使徒行傳の中に載せてあるパウロの説教の中で、後で諸君が讀んで御覽になつたら分るのであるが、パウロの演説又は説教が三ツある、一ツは十四章の十五節から十七節までである、是は神の存在に就いて話したものであるからして、今日の使徒行傳十七章の二十二節以下の説教と同じやうな事を説いたものである、けれども其説教と此説教を對比になつたらば、一方の聴人は教育のない人である、此方は希臘而もアゼンスの理學者、哲學者、文學者、所謂教育ある人々の前

に立つて話したわけ、此べものにはならないくらゐの優劣がある、今一つは二十六章の二節以下にパウロがアグリツバ王の前に立つて、自覺が悔改めてキリストの弟子となつたと云ふ實驗に基いての説教がある、是を聴いて居たベストス總督はパウロの話が終ると、パウロよ、汝の博學汝を狂氣せしめたと叫んだくらゐに、彼の心を突いた説教である、けれども是もアレオ山の説教と比較してお讀みになつたならば、確かに後者の方がエライとお悟りになるだらうと思ふ。さらば同じ使徒行傳に出て居る二章の五旬節の日のペテロの説教と比べて見たらば何うであるか、ペテロの説教は三千人を悔改めさせた、結果から云へば是くらゐにエライものはない。夫は私は少し聴人が違ふので、何方がエライと云ふ事は云へない、五旬節の日のペテロの説教は十字架上のキリストを説いた、アレオ山の説教は神の存在を説いた、若し優劣がないと致すならば、是は使徒行傳中の双壁として尊重すべき説教であらうかと思ふ。

さて諸君！説教に就いて茲に第一に考へたい事は偉人パウロと云ふ事である、説教は辯舌よりも辯舌の後ろに思想がなくてはならぬ、思想の後ろに人格がなくてはならぬ、希臘と云へば、昔に於て最も學問の盛んなところであつた事は云ふまでもない、アゼンスと云へば、

希臘中の最も學問に長けた人々の住居した都會である、アゼンスの中央のアレオ山と云へば希臘の學者達が日々集つて、人々の演説なり談話なりを聴く公會堂であつた。希臘人から云へば寧ろ輕蔑されて居る猶太人のパウロが漂然としてアゼンスに歩つて來たので、別に紹介状を持つて來たのではなからうと思ふ。其パウロをアゼンスの公會堂に招待して、新らしい宗教に就てのお話を承はりたうと云ふ事になつたところを見ると、パウロを招待するまでに此パウロと云ふ人物が一見して奥行のあり、學問のあり、智識のあり、思想のあり、尊敬すべき人間だと云ふ事は認められたであらうと思ふ、若し夫を認めなかつたならば、彼等希臘人が縁も舊誼もない外から來た人間を、早速にお招きすると云ふやうな事はなかつたであらう、既にパウロの偉大なる人格は、聽聞者には認められて居つたと見て宜い。説教と云ふものは何が第一かと云へば人格、次に思想、辯舌は抑々末である。世の中には豆藏の如く噂る能辨な人は幾らもある、けれども其能辨必らずしも人を引くに足らない、能辨の後ろに思想が要る、思想の後ろに人格が要る、パウロは人格に於て秀で居つた、パウロは思想に於て秀で居つた、辯舌と云ふ事になれば、バルナバやアポロに劣つて居つたと云ふことである。パウロ、バルナバを伴ふて旅行すると、バルナバの方が辯舌が宜いからバルナバ、パウロと

云つて、バルナバの方が俗受は確かに宜かつた、アポロとパウロと同行すれば、アポロの方が俗受は宜かつたからである、けれどもバルナバやアポロは天下後世に残るやうな説教はして居らない、人格あり思想があつて、辯舌は第二流第三流に下るところのパウロは、大説教を天下後世に残して居る事を考へて見ると、其所に私共は味ふべきものがあると思ふ。第二には説教の組立である、此説教を注意してお讀みになつたならば、決して無駄口を云ふて居らぬ事が分る、一ツも駄辯はない。二十三節に「われ途を行とき爾曹が敬拜どころの者を見しに識ざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり……」とある、希臘人の前に立つやパウロは、其希臘の學者達の心の中を支配して居る思想を掴んでしまつた、私嘗て諸君の前にお話しした事がある、希臘人は學問には長じて居つたが、宗教の方は駄目であつた、下等な人間は蛇を拜み、上等の人間は人間を拜んだ、けれどもそんなもので満足の出來ない、學者達は詰り知らざる神を拜むと云ふ事になつた、十九世紀の哲學者スペンセルが天地宇宙には何か第一の原因がなくてはならぬ、第一原因がなくて此宇宙が出来る筈はない、然らば其第一原因は何かと尋ねたらば分らぬ、不可思議だと云つた。希臘の學者達が信ずる神はエツキスの神、未知數の神、何か天地宇宙にはエライものがあるに相違はないが分らぬ、知らざる神

として拜むと云ふことはスベンセルの不可思議論と能く似て居る。夫をパウロはチャンと掴んで居る。知らずして拜んで居る、未知數に屬して居るところの其神を私は茲に紹介すると云ふ。夫からアレオ山に登つて見ると、神々の宮が彼方にも此方にも薨を併べて建てられてあるの、天地を造り給ふた神は、手にて造られたる宮の中にはお住ひにならない、と叫んだ、希臘人は之に吃驚したいらうと思ふ、其次に希臘人は國自慢である、希臘ほど良い國はないと思つて居つた、人種自慢、希臘人は此麗はしき土地に生れた國民だと云ふ、外の國に行つた事はないので、希臘が世界の中心、希臘はどエライところはないと思つて居つた、そこでパウロは何と云つて居るか、二十六節に「また此神は凡の民を一の血よりつくり悉く地の全面に住せ豫じめ其時と住ところの界とを定め給へり」、國自慢、人種自慢の希臘人の心を鐵槌を以て打破つてしまつた、粉奈微塵に碎いた、そんな小ぼけな考は希臘人の頭より取去つてしまつた、天地宇宙の神は大源の神である、其神が總ての民を一ツの血よりお造りになつて全世界にお住ませになり、萬國萬民と云ふ大きな考、世界的の頭を持たなくちやア不可い、大和民族だ、日本人だと云ふのと同じ事、希臘人の人種的觀念を打破してしまふた、打破すだけが説教の能ぢやアない、一變して今度は説教の本領に這入つた、夫は何か、二十

七と二十八の前半、神は何所にも居らつしやる、宇宙に滿ちくたる神である、さうして更に今度は進んで二十八の後半「爾曹の詩人たちも我儕は其裔なりと云しが如し」人間は神の御裔だと云ふ、私共人間が神の御裔である、神の子である、希臘人は凡神教に傾いて居る、學者達は宇宙即ち神なりと信じて居つた、其考を打破つてしまふた、私共人間は神の裔だ、神の子だ、我々人間は神の子であるならば其神はお父様だ、其神は即ち人格の神である、木や石が神と云ふのではない、人を生み出したところの神である、即ち人格を備へた大なる神であると叫んだ、夫から君等は罪を犯して居る、今までは暗黒世界で罪科を犯して居つても神が看過しになさつた、けれどもイエス、キリスト……神の子が此世の中にお下りになつて、救ひの光をお放ちになつた以上は、どうしても悔改めなければ、救はるゝの道はないと云ふ結論に來たのである、甦と云ふところで話が切れてしまつた、私は之を讀んで此中で説教の骨子となるところは何所か、説教には富士の山がなくてはならぬ、足柄山や箱根山や筑波山や淺間山が何ぼあつても、夫は駄目である、一篇の説教には富士の山がなくては不可い、小ぼけな山は忘れても宜しい、富士の山を見出し、夫を腹に入れてさへ居つたらば説教は腹の中に這入る。アレオ山の説教の富士の山は何所だと云へば、即ち二十八節の「我儕

は彼に頼て生きた動また在ことを得るなり」である、是は此説教の富士の山と云ふだけぢやアない、恐らく使徒行傳中の富士の山だらうと思ふ、否恐らくは新約全書中の高い山の一ツであらうと思ふ。どうしてパウロが斯う云ふエライ事を叫ばれたであらうか……驚かざるを得ない、パウロの心の何所を押へたらば、こんなエライ思想が出て來たらうかと思はざるを得ない、此言葉がエライ、此思想が深い、是がアレオ山の説教をして大ならしめた所以である。如何にエライか、如何に深いかと云ふ事はどうして分るか、サア之を私が諸君の前に、充分に説明しようと思ふならば、先づ三時間貫はなくてはならぬ、けれども今朝はさう云ふ時間はない、そこで簡単に述べて見よう。

パウロ以來今日に至るまで千八百五十年、其間に幾百人エライ學者や非凡の哲學者が出たか知れない、夫は今申上ぐる暇がない、そこで此世の中が段々末になるほど思想が緻密になり深くなつて來て、二十年前に出た人よりも、二十年後に出た人の方が、前の人の云つた事を研究して來るからエライとしなければならぬ、四十年前の人の説よりも、二十年前の説の方が先づ進んだものとしなければならぬ、普通の順序から云へば……さう行かぬ事もあるけれども先づさうである、さうすると今日の世界に於ては一番最後に名乗を揚げて、而も歐米の思

想界を震蕩せしめて居る學者と云へば、佛蘭西の巴里大學のベルグソンであらうと思ふ、其ベルグソンが著した創造的進化論と云ふ書物の中心思想は何かと云へばパウロの我儕は彼に頼りて生きた動また存ことを得るなりと云ふのに似て居るやうである。ベルグソンは獨立の立場からして科學の研究、哲學の研究をやつて、自分の思想を發表した、其思想は一口に云へば此宇宙には意識が満ちて居る、能くお聴きを願ひたい、此部屋には私の意識が動いて居る、諸君の意識も動いて居る、其如く限りもない果しもない大きな宇宙に意識が動いて居る、其意識が元になつて此宇宙の萬物は流れて居る、固体なものは一ツもない、恰ど川の水が流れて止まない如く、此天地宇宙の總てのものは流れて止まない、云はゞ意識が動いて居る、其意識が元になつて此所に生命のある植物が出来る、さうして成長する、成長すると云ふは動いて居る、即ち動き流れて居るところに存在がある、夫が今度は動物になつて來ると本能となつて、植物よりもマア少し意識が明かに現はれて來る、更に人間となれば鳥獸類の本能に現はれたよりも意識が明かに確かなる、譬へば此紅杜の一枝を私が振折つても、痛いとも痒いとも何とも感じない、意識があるから是は生きて居る、生きて居るけれども意識が癒れて居るやうな譯であるからして、花を摘んでも枝を折つても一寸も感じない、感じな

いから意識がないかと云ふとさうぢやアない、意識があるから生命がある、サア此所に猫なり犬なりを引ッ張つて来て、其一本の足を振折つて見るならば、痛い〜と云ふ聲は出さな
いけれども、夫は痛さうな聲を出して泣く、暫らく経てばもう平氣で跛引摺つて駆づり歩いて
居る、さて此所に人間を刎の上に載せてさうして足なり手なり、或は指一本でも宜しいブツリ
と斬落す、斬落さなくても、指一本振折ると、夫はどうも非常に苦しむ、而も其苦痛は七日
七夜も續く、骨に痛みを感じるばかりぢやアない、誰が自分の指を斬つたか、何故に我指を
折つたか、實に人道に反する事をしたものだ、此罪許し難し……ア、もう折られたからし
て恨んでも仕方がないから免してやらうと云ふ氣になる、兎も角其所に盛んな意識が現はれ
る、さう云ふやうな工合にベルグソンは説いて居る、さて我儕が彼に頼りて生と云ふ此彼は
何か、ベルグソンは超意識と云ふて居る、パウロは彼と云つた、彼と云つたが前後を考へて見
ると是は神のことである、神と云ふ人格は宇宙に充ち溢れて居らつしやる、其神の力が現は
れて植物の命となつた、植物は知らぬ、植物は感じないけれども、神が生命を現はし給ふた
のだからしてこんな美しい花が咲く、昔の人は人間の眼を悦ばせる爲に花が咲いたと思つた
けれども人間の住まない離小島にも花が咲く、曾て人間が行つた事のない北海の邊にも美し

い昔がある、美の神の生命が現はれて斯う云ふ美しい花となり、美しい昔となり、美しい葉
となつて現はれて来る、夫が動物になつて来ると、更によく動き出す、植物は植えられたとこ
ろより以外に自分で動く事は出来ない、只枝が繁る、葉が出る、花が咲く、實が熟ると云ふ
やうな工合に動くのである、動物ならば地上を駆づり歩く、鳥の如きは突中に翔る事が出来
る、さう云ふやうに動き出す、人間になつて来ると身体が動くばかりぢやアない、其思想が
動く、其情感が動く、其意志が動く、即ち心靈が動き始むる、さうして内にある心靈が私の
眼を通し、私の口を通し、私の勢を通して、さうして諸君に其波動を及ぼす事が出来る、即
ち我儕は彼に頼りて生きて居る彼に頼りて動いて居る、其動いて居るところに在る事を得る
なりと云ふ、即ち我本体は其所に流れて止まないとどこに生きて居る、固体でなくして河の
水が始終流れて止まないと河の瀬になつて居るところは何時でも瀬になつて流れて行
く如く、私共人間は斯う云ふ風にズーツと流れて止まない、其流れて止まないとどこに彼
と共にある事を得るなり超意識……即ち神と共に私共は存在して居るものだと斯う云ふ
のである。

諸君！さう考へて来ると神と云ふものは、決して宇宙の中央に大きな胴體を以て存在して

居らしつしやる譯のものではない、何所に神の頭があつて、何所に神の尾があると云ふ譯のものぢやアない、人間の身体の何所に心霊があるか、多くの人は此所にあると斯う思つて居る、昔の人は此邊だつたらうと思ふ、何所にあるか分らないけれども、指の先を抓ても、足の指の先を突いても、髪の毛一筋誰か来て引張つてもチャンと心霊が知つて居る、さうすると我心霊は此身体の全部に充ち満ちてあると云ふ事は明白である、其如く天地宇宙の神は、此大なる宇宙に充ち満ちてござる、宇宙にあるとあらゆるものは、皆此神に満たされてあると云はざるを得ない、さう云ふと凡神教の如くなるが、其宇宙に満ちてあるところの神が即ち人格の神、我儕の如く考へ動き且在る事を得るのである。

さうして見ると諸君！パウロが私共に教へたところは何を意味するかと云ふと、二十七節に「此は人をして神を求め彼等が或は揣摩うる事あらん爲なり然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざる也」とある、毎もお話する如く、魚は水を離るゝ事が出来ない、水に取巻かれて居る、水が口の中に入れて這入つて居る、夫で生きて居る、動物は空気を離るゝ事が出来ない、空気に取巻かれて居るばかりぢやアない、空気は身体の中に充ちて居る、丁度其如く宇宙の神は我を取巻いて居らしつしやる、我の内にも在る、實に近いも近いも是位近いも

のではない、妻でも子でも、かく空気が我に密接して居る如く密接して居る譯に行かない、天地宇宙の神は妻よりも子よりも近く我内に在る、さう考へて見られよ、私共はさうしても神より離るゝ事は出来ない、神の聖前を遁るゝ事は出来ない、斯う云ふエライ思想をパウロがアゼンス人に説いた、さうして其思想が千八百五十年の間流れて二十世紀の今日となつた而もベルグソンの口を突いて如何にも哲學的に、如何にも科學的に是か云ひ現はれたのである。實にパウロの説教は生きて居る、一時的に人を動かさなかつたか知れないが千八百五十年の間動かして居る、今も尙世界の人心を更に大なる力となつて動かして居る、之を大説教と云はずして私共何と云つたらば宜しいかは富士の山である。

然れば諸君が今日より後寝ても起きてても、立つて居る時も歩いて居る時も、御飯を喫べる時も人と物を云ふ時も、ア、實に空気が自分の鼻から出入をする事に気が注かなかつた、空気が出入する事に依つて我は生き動き且ある事を得る如く、今までは気が注かなかつたが、天地宇宙の神は我を取巻き我内に在る、さうしても我は神と離れられない、夫を自分は気が注かなかつた、さう気が注いで見ればもう實に神は近いものはない、神はご親しいものはないイエス、キリストが天の父と仰せられたのも此譯であらうと云ふ事をお氣付きになるであ

らうと思ふ、ごうごさう云ふ事を一ツ味ふて貰ひたい、英國人の英國人たる所以は其所を味ふたからである、毎でも神の聖前に在る事を味ふたからである。大和民族も此眞理を味はなければ、到底立派な民族となる事は出来ない、知らざる神に物云ふ事ぢやア不可い、大和民族と云ふお國自慢、人種自慢でも駄目である、我儕は彼に頼りて生き動き且在事を得るなりと云ふ此大眞理を味ふて、是が信仰となり是が生命となつて、御互ひを支配するやうになつた時に、私共は始めてキリストの聖意に叶ふ基督教信者として世に立つ事が出来ると思ふ。

第十二章 聖者と労働

祈 禱

恩寵に富ませ給ふ天の父よ、我儕は心靈と肉体の二ツにて成立せる者にございますれば、一ツを重んじて他を輕んずる能はざる事を知りますれども、靈の事を専らにすれば肉の事を疎み易く、肉の事を専らにすれば靈の事を疎略にし易き者でございます、此二ツの間に彷徨ひまして、聖とも就かず俗とも就かず、誠に微温湯の如き信仰を以て、碌々として日を送る信者も夥なからざる事と存じます、オ、主よ聖日には聖前に參集して靈と眞を以て主を拜し大いに心靈の向上を求めますれども、六日の間は誠に社會の組織が拙悪なるが爲に、俗事の爲に捕はれ具くして、偶々清められたる其心をも汚されて、聖前より遠ざかる者も頗る多き事と存じます、主よ、斯くの如き状態なるが故に我儕此國に斯道を傳へんと欲して、多年聊か微力を盡しますれども、豫期の如き發展を見る能はざる事と存じます、主よ、今朝我儕銘々を教へ導き給ふて、如何に肉の事に努力致しまするも、亦心靈の事を阻害する事なく、何とかして此二者が我儕の間に能く調節せられまして、日に一歩として聖前に進歩いたしごうぞ我儕基督教信者の輝ける人格を以て周圍の人々に健全なる感化を及ぼし得るやうに我儕を清め、我儕を強め更に我儕を用ひさせ給はん事を冀ひ奉る、父よ、今朝は我儕銘々に一ツの大なる教訓を授け給ふて、各自聖殿を下り行く時に、何か心に携へ歸る事を許し給ふやう只管に冀ひ奉る、主よ、今我儕と共にあり、音に此

所にある者のみならず、聖名の爲に集り居る諸の信者、世界の面に於て主を拜するところの幾千萬の信者の上に御恩寵を興へ給ふて、各自が聖前に禮拜する事に依り、主に近接する事に依り、御教訓を受くる事に依り一段高く清く尊き者となりまして、愈々此世を天國となさん爲に努力するやうに御助けあらん事を冀ひ奉る、病氣の床に在る者、旅行の途上に在る者にそれ、主の御恩寵を以て御保護を興へ給はん事を冀ひ奉る、ごうぞ今朝ば我儕と共に在して、我儕の思想精神を導かせ給はん事を、主イエスの聖名に依つて冀ひ奉る、アーメン。

彼その業を同くするに由て之と借に止りて工を作ぬ其業は幕屋を作る者なり（使徒行傳第十八章三節）

パウロは前の聖日にお話した如く希臘の都アテンスの中央アレオ山の公會堂に立つて比類なき大演説を試み而して其演説は二千歳の今日に至るまで我儕が賞讃して已まないやうな卓越したる演説であつたけれども餘り信者は出来なかつた、愈々アテンスでは見込みがないので、今度は希臘の商業の中心であるコリントに移る事になつて、丁度其町に伊太利の方から追出されて參つた者に、アクラとプリスキラと云ふ夫婦があつた、使徒行傳の記者は「彼と業を同じうするが故に其家に止りぬ」と書いて居るところを見るとパウロも幕屋を製造する職を取つて居られたと見ゆる、同業者と云ふところで此家にパウロが寄留さるゝ事になつ

た、一説にはアクラ、プリスキラの二人は羅馬に於て既に信者になつて居つて盛んに基督敎を傳へた爲に、猶太人と共に放逐されたのでパウロは同情に堪へないところから一緒に住んだのであらうとも云ふことである、ごうも何方が眞個であるか一寸分らないがルカが特に業を同じうするが故に其家に止まつたと書いたところを見ればまだ此時に二人は信者でなくして、パウロが一年六ヶ月の間此所に同居する中に感化されて世にも稀なる熱心な信者になつたやうに思はるゝ、一寸餘談に移るが、此アクラ、プリスキラと云ふ夫婦は、新約全書の中に毎でも夫婦連名で出て居る、而も六回記されてある、此所に不思議な事は、アクラが良人でプリスキラが妻であるのに、六回の中四回まではプリスキラ、アクラと書いてある、妻の名の方が先に出て居る點に御注意を願ひたい、これはごう云ふ譯か、殊に使徒行傳の記者は細かなところに注意したんであつて、バルナバとパウロと旅行を致す時にバルナバの方が優待してパウロが優待ない時は、バルナバ、パウロと毎でも書いてある、今度は位置が顛倒してバルナバよりもパウロの方が大いに優待するやうになつた時には、パウロ、バルナバと書いてある、さうすると十八章のところは初めて夫婦の事を書くのであるから、良人を後にする譯には行かないので、アクラ、プリスキラと書いたが、紹介が済んだ後は大抵プリスキラ、ア

クラと書いてある、是は妻君の方がどうも人格が高かつたか或は腕があつたか、どうしても信者の間では、アクラよりもプリスキラの方が顯著なる位置を占めて居つたに相違はない、けれども一説にはアクラは眞個に普通の天幕縫であつたが、プリスキラは羅馬の貴婦人であつたからして、例令天幕縫の妻となつて居つても、元々門地が高いつつたから、プリスキラ、アクラと云はるゝ事になつたらうと云ふ、只茲に二人が羅馬から追はれたと云ふ時に、若しさうであつたならば、プリスキラは羅馬人だから追はるゝ必要はない、羅馬に止まつても宜いが良人が追はれるので妻は良人と共に何所で倒死をしても一緒に行かうと云つて來たと云ふところを考へて見なくちやアならぬ、此説もどうも果してさうであつたかどうかは、想像に止まる譯であるから何とも云へない、けれども聖書にはプリスキラ、アクラと云ふやうに六回の中四回まで書いてある事は確かである、夫で信者の間には先きにも申す如く、プリスキラの方が大いに持躰されてあつたと云ふ事だけは、疑を容るゝべき餘地がないやうである。

さて今日の題は聖者と勞働と云ふ事である、勞働と云ふのは是は、手足を動かして働くこと云ふ意味である、或は大工、左官、鍛冶屋、機械と云ふやうな類、即ち職を營む事である、

東洋では何所の國でも勞働を輕蔑する、朝鮮の如きは少し身分の宜い人は歩くのさへも何だか卑しいと思ふて、乗物に乗つて行くこと云ふ事になつて居る、偶々御内所で歩かなくちやアならぬ場合には、御附の者が斯う兩方から介抱して、マア餘り足を動かさなくても宜いやうな工合に、人に連れられて行くこと云ふ、支那人は御承知の如く指の爪を長く伸ばして居る、爪が長いほど宜いと云ふのは働かない符號である、勞働したら直きに爪は折れてしまふ、日本にも馬鹿な人が、小指の爪を長く伸ばして居る、私共も或時に直似した事もあつた、一方から云へば耻づべきの至りである、働かない事が自慢であれば、小指の爪ばかりでなく十指の爪を悉く伸ばして置いたら宜からう、同じ東洋人でも禪宗の僧侶は決して勞働を卑しめない、そこは見上げたものである、私が同志社に居つた時に相國寺がお隣であるから、始終僧侶の動靜を見て居つた、夫は能く勞働をする、雷に小僧共が勞働するばかりぢやアない、一廉の和尚もそれ／＼勞働をする、確か大阪の某病院の話であつたと思ふ、どうも病院の便所に行つて見ると、汚ない話だが草履や何ぞがもう其邊に脱ぎ散らして狼籍を極めて居るところが或便所は何時行つて見てもチャンと草履が揃へてある、不思議である、何所の便所でも汚なくて堪らない、草履が散らばつて居るのに一つだけチャンと草履が何時でも揃へてある

誰が揃へるのだらうかと云ふ事が評判になつて、注意をして見て居ると禪宗の坊さんが入院した時から夫が能く揃ふて居る、其人が退院後は又以前の通りに散らばることゝなつた、是即ち禪宗の僧侶は勞働するばかりぢやアない、サア是から提唱がある、皆出掛けて行く時にも列を正しくして行く、さうして履物はチャンと順序があつて、先の人から其所に脱ぎ揃へて上る、又歸る時も順々列を正して、其履物を穿いて歸つて行く、さう云ふ事までチャンと良習慣が附いてある病院に入院しても人の穿き散らして置く物までも揃へると云ふ事は、餘り佛教に感服しない私でも、夫は矢張り大いに賞讃すべき事であると思ふ。

斯くの如き心懸の宜い禪宗の僧侶を除くの外は、マア大抵な人が勞働は輕蔑して居る、どころか猶太國では、凡そラビとなる者は其弟子に何か一つ職を教へなくちやアならぬ慣例であつた、猶太國では父なる者は子供にモーセの律法を教ふると共に、一つの職を教へて置かねばならない、キリスト、イエスは大工の子であつたから、父の業を受繼いで大工をなされたが、夫れは何も別に深い意味があつた譯ぢやアない、大工をなさらなくちやア食べられないからしてなされたのである、然るに使徒パウロはギリシヤのタルンにて羅馬人と云ふ門地の高い、云はゞ名門の家に生れたところの貴公子である、幼少の時は郷里の學校に學び、青

年時代には笈を負ふてエルサレムの都に上り、ガマリエルと云ふ大學者の膝元で教育を受けたと云ふ人である、實に立派な貴公子である、其貴公子が幼少の時から天幕を縫ふ職を覚えさせられたのである、キリキヤと云ふところは天幕に用ふる原料山羊の毛の集散地であつたそこで子供に職を覚えさせる場合には、自づから天幕縫を撰んだ次第である、是は猶太人の話であるが、今日まで獨逸にさう云ふ風が傳はつて居ると云ふ、獨逸では相當な位置の人でも子供に職を習はせると云ふ事である、露西亞では獨逸以上である、今より二百幾年前にピター大帝が冠を抛つて、和蘭の阿姆斯特ダムに行かれて、船大工をなして歐羅巴の文明を覚えて、露西亞に歸り來つて百般の制度風俗を改善して、遂に露西亞をして文明國の仲間入りをなさしめられたので、それに因んで爾來露西亞の王子達は何か一つ職をお覚えなさらねばならない制度になつたと云ふ、御殿の廣々とした庭の彼方此方に小屋が建てられてある、其小屋は第一の王子は大工とか、第二の王子は鍛冶屋とか第三の王子は壁塗とか云ふやうな工合におやりになる所であると云ふ明治天皇には折節壁塗をなされ、皇后は蠶をお飼ひになると云ふ事も漏聞いた事がある、夫かあらぬか皇族方は何か一つ業をお習ひになると云ふ事になつて居るのである。

諸君！勞働は決して卑しいものではない、卑しき心の人がすれば、如何なる尊き業も卑しくなるであらう、尊い人がすれば、不道德の業を除くの外は、如何なる賤業と雖も確かに尊くなるものである、要は何者が勞働するかと云ふ事に歸着する、さればこそパウロは勞働について、自分が孜孜として努められたばかりでなくして、書翰の中にも度々勞働を勧めて居らるゝ、哥林多前書の九章の七節から十四節までをお読みになるならば、パウロは教の爲に働く者は、教を受ける者から養はるゝのは當然である、けれども自分は人に累を掛けない爲に日々業を執つて居ると録してある、使徒行傳の二十章をお読みになるならば、ミレトスに於てエペソの長老達に別れを告げる時に自分の手を出して見せた、此手は我と共に居る人々の爲に如何ばかり努めたと云ふ事は諸君の知る通りである、毎日々々天幕を縫ふて、實に荒くれた手をパウロが突出して、此手が……と云つた時には、實に其手を見たとこの長老達は潜然として涙を流したであらうと思ふ、一日私は故山に歸つて、母が手仕事をして居る前に坐つて、何暮となく四方山の話をして居つたが、不圖母の手を見た、彼方此方に胼胝が出来て、針の先で突いたやうな傷が幾らも見えた時に、五人の子供を育つる爲に夜は遅くまで、時には終夜母が手仕事をしたのを知つて居る、又我學資を供給せんが爲に外の針仕事までも

された事を聯想して、難有涙と云ふのであるか實に堪えられない思ひをした事がある、パウロはテサロニケ人に向つては、働かない者は食はずして居れと示された、帖撒羅尼迦後書の三章の七節から十一節までを讀んで見よう「爾曹みづから如何して我儕に效ふべきを知れ我儕爾曹の中に在て妄なる事を行す、また人のパンを價なしに食することなく唯人を累はせざらん爲に勞と苦をして晝夜工を作り是れら權威なきが故に非ずたり自己を模楷とし爾曹をして倣しめん爲なり、われら爾曹の中に在しとき人もし工を作ことを欲すば食すべからずと爾曹に命じたり、それ爾曹の中に工を作らずして専ら餘事を務め妄なる事を行ふ者ありと我儕聞たり」斯くの如く怠惰を戒むると共に、人は是非勞働をしなければならぬと勧められた、如何であらうか、諸君が慕ひ仰ぐところの聖者に會ひに行つて、或は袴羽織とか、或は衣の上に金襴の袈裟を掛けてさうして上座に座つて居つて、近うくと云ふて呉れるのが有難いか、聖者と思ふて訪ねて行くと、其人が竹箒を擔げて庭前を掃除して居る、先生にお目に懸りたいと云つた時に、私が某でございませと答へられた其時に如何なる感に打たる、であらうか、傲然と上座に構へて居る聖者よりも、汗水流して働いて居る聖者の方が私は見たいやうな心持がする、使徒パウロが多忙く、もう日限が切れると云ふので受負ふた天幕を縫

ふて居るところに、信者、求道者が歩つて来て其仕事の間々にパウロの口から漏れ來るところの聖なる言葉に耳を傾けると云ふ事は、アレオ山の公會堂に於て「我儕は彼に頼りて生き動き且存事を得るなり」と云ふ、千古萬古變らざるどころの大真理を説かれた其時よりも、來訪者の心には非常なる感興を惹起したであらうと思ふ。

諸君！現代と雖も矢張り喜んで勞働を取るところの聖者は、尠なからずある、私は徳富蘆花氏を七八つの時から知つて居る、色々氏が書かれるところの本や雜誌類を讀んだ事もある、東京を避けて千歳村に轉じ、蚯蚓や蛙を友として居る事になつて、一日横濱の埠頭に私の船が出帆すると云ふ時に、其所に蘆花生が其娘を連れて歩つて來た、どうぞ此娘を宜しく頼むと云つて感歎に挨拶を述べらるゝのを見た時に、實に蘆花氏の身体が健全になつて、其顔の色が銅の如くに光つて、其健全なる身体の中には如何にも健全なる心靈が宿つて居りさうに見えた、私の心の中には勞働するところの人は、如何にも健全なるかなと云ふ感が起つた、ツヒーケ月半ほど前に友人大塚氏が北海道から漫遊して歸り來つて、自分は函館の近所にあるトラピスト……實に二十人ばかりの聖者が朝三時から起きて、其顔を洗ひ口を漱いで、聖堂に這入つて聲を限りに讚美歌を誦し祈禱をなし、夫から朝の食事が済むと、それ／＼或は

牧場に或は畑に出て仕事をなす、御承知の如くトラピストは無言の行をやつて居るのであるから、御互ひには物を云はない、聖堂に這入つた時には豫て物を云はない故か、夫は大きな聲を出して語り且祈るさうである、愈々仕事に取り掛ける時には、僅か二十人ばかりの修驗者が三百町歩の田地を拓き八十頭の牛を抱へて、日本一のバタを製出して居ると云ふ、私は夫を聞いた時に聖者と勞働……朝三時から起きて歌を誦し祈ると云ふところが如何にも神々しいと共に、其所禱果て、各自の仕事場に一生懸命に働くと云ふところに、旨味があるやうに思ふ、何故私共は勞働を取るべしと云ふかとお尋ねになれば私は別に勞働をやつたと云ふ經驗がないから口廣く申す事は出来ない、夫でも子供の時には畑や田の草を取りに行き、或は草薙りに行つた事があるが、夫はイヤ／＼ながらやつた、此節は多忙な爲に勞働する譯には行かぬ、けれども偶逆時を得て大工の仕事をやつて見たり何かする時に、其勞働して居る間は、世の中の事を何も彼も打忘れて居る、鎌を持つて庭前の草を刈ることがある、其草を刈つて居る間と云ふものは實に愉快であつて、殆んど世の中を外にして居るやうな心持がする、而して贏ち得たところのものは何かと云ふと、時には手に肉刺が出来ると額から汗が流るゝだけの事である、けれども其勞働は確かに我體を健全ならしむる事だけは、間違ひ

のない事であるが、勞働は神聖なりと云ふ意味も亦其點にありはせぬかと思ふ、奥さん方の内には斯う云つてお嘆きなされる事がある、毎日々々掃いたり拭いたり、御飯拵へをしたり茶碗を洗つたり、三百六十五日の間同じ事を繰返して居る、是が自分が世の中に生れ出でた爲めの仕事かと思ふとイヤになつてしまいますと、夫はイヤにならないのは尤もである、夫だけで止まればイヤになつてしまふ、けれども其仕事が即ち御婦人方の體を健全ならしむるものだ、血の循環を宜くならしむるものだ、師範學校などへ行つて見ると、お嬢さん達が機械體操をやつたり、飛んだり刎ねたりして居るゝが、あれも宜い事である、けれども埃拂を持つて高い天井を脊延をして拂ふ時に、或は箒を持つて屈んで掃く時に或は雑巾掛をする時に、バケツに水を汲んで下げる時に、機械體操以上の運動が出来る、是は我体を健全ならしむるものである、さう思つてやつたらば、何にも夫が詰らない嫌な事にはならない、ア、馴れない時は三時間も費つて愚圖々々と家の事をやつて居つたが、漸次に馴れて来て一時間半ぐらゐでやれるやうになつたと云ふ時には、其贏ち得たる一時間半は聖書を讀み祈禱をし、色々なる有益な書物に眼を晒すと云ふ風に用ひて見られよ、チャンと夫だけの益がある、何時でもお嬢様のやうにジョベトくやつて、さうしてマア已む事を得ずこんな事をやつ

て居りますが、下女でも雇へたら雇ひますなどと云ふ考では詰らない、下女が居つても他の仕事をさせる、自分は斯う云ふ事をやるんだ、是我身體を健全ならしむる所以だと云ふ考で、人が一時間費るものなら四十分でやつて見よう、人が四十分費るなら三十分でやつて見よう、さうして贏ち得たる健全なる身體と、贏ち得たる時間を以て一つ大いに磨いて見ようと云ふやうな考であつたら、夫は實に愉快である、今日何不自由のない人でも、矢張り一日の中に一時間とか或は一週の中には半日とか、額に汗して勞働する事が、管に身體を健全ならしむるばかりぢやアない、其勞働をして居る瞬間は、心の中の雜念妄慮を排除するからして、夫だけ其人の爲には非常に有益である。

尙勞働の神聖なる事は他ぢやアない、何か一つ手に職を覺えて居る、或は園藝を覺えて居ると云ふ事であつたらば、何時でも獨立の地歩を保つ事が出来る、職業紹介所の主任の話を聞くのに、何か自分の口があるまいかとか、銀行會社にはあるまいかと云つて頼まるゝと夫は眞個に口がないが、勞働を致します、賤業に馴れて居りますと云ふ人であつたら何ほども口があると云ふ。學者でも智者でも奥様でもいつ何時時世の變遷か、又は家運が傾むくか、時我に利あらずして、自分の學問も自分の藝能も用ゐる事の出来ない場合がある、其時に一

つ職を覚えて居れば、何にも今日の事には不自由なくして済むのであるからして、彼方へ行つて頭を下げ、此方へ行つて操を賣ると云ふやうな事をしなくても、夫でチャンとやつて行ける、今日の日本では二百の高等女學校があつて、十萬の學生が勉強して居ると云ふ、實にどううも女子教育は盛んになつたものである、けれども其女學校を卒業するところの女子は、何か手に職を覚えて來るか云へば罷り違つたらば小學校の代用教師ぐらゐな事より出來ない、十圓なり十二圓なり十五圓なり貰つて代用教師を勤むるに過ぎない今日の高等女學校に於て女子に何か、一つマツサージとか、看護婦の職務を覚えさすとか、園藝を覚えさすとか、一つ職を覚えさせて置いたならば、實に夫は身体を健にするばかりでなくして、イザと云ふ場合には獨立の出來る女子を造るのであるから、非常に宜からうと思ふ、今日の女子が男子に頭を踏まれてさうして神經衰弱に陥り、ヒステリーに罹つて、榮色顔をして過さなければならぬ所以は那邊にあるかと云へば、手に覺えがないから若し離縁でもされたら、直ちに路頭に迷はなければならぬ、若くは親類の厄介にならねばならぬ、どうせ苦むならマア此所で苦しんで置かうと云ふやうな事であるから何時まで経つても夜の明ける事はない。其意味からしても獨立の位置を造らしむる爲に、我々の女子にはチャンと一つ職を覚えさせ

て置く必要があらうと思ふ。

更に一つの事は心の血の循環が宜くなる、心に鬱積して居るところのものを拂ひ清むる事が出来るけれども茲には非學ばなければならぬ事は、聖者と勞働と云ふ事である。聖者を離れての勞働と云ふものも夫は至極結構である、けれども聖者と勞働……トラビストが朝三時から起きて、聲張上げて謠ひ且祈ると云ふ、心を聖にする、此敬虔的の修養をやると共に出て働らくと云ふから面白い、私共も其心懸で朝疾起きて祈り、讀み、念じ、かくして我心を養ひ立つると共に、諸君が夫々の仕事に出るまでに一働きをする、夫が出来なければ午後仕事を終へて家に歸つて來た時に、三十分間か一時間か外に出て勞働をやつて、一汗流して、さうして夫から身体を清めて食事をなされた後に、智慧を磨き心を養ふと云ふ方面にお向ひになつたらば、聖者と勞働此二つが宜い工合に調節せらるゝであらうと思ふ、此二つを宜い工合に調和して行かないからして、私共の進歩が鈍い、之を旨く調和してやつて見られよ進歩發達が速になつて來て、諸君は神の聖前に感謝せらるゝに至るであらう、兎も角も聖者と勞働を二つ調節して行くと云ふのが人間の道である事を御記憶になつて、勞働を取るやうになされたい、尙銘々の子供達が息子と云はず娘と云はず、何時でも職で獨立の出

來るくらゐに覺えさせて置く必要があると云ふ事を御記憶を願ひたい。

第十三章 基督信者と聖靈

祈 禱

天の父よ、我等は花のごとく笑うてのみ居ることが出来ませぬ、我等は鳥のごとく歌ふてのみ居ることが出来ませぬ、自からは獨り超然として世の煩悶の外に立ちましても、我れを取巻くところの人、及び人生に伴ふところの總ての事情は、我等をして悲しませしめ苦しませしめ、噫人世悲慘なりと悲觀せざるを得ざらしめることも多く御座います、さりながら主よ、パウロは我等に向つて爾曹喜べ我れまた言ふ、主に在りて喜ぶべしと教へたることで御座います、彼は患難にも喜悅を爲せりとの実験を握つて居りました、我等に主が與へ給ふところは一つの靈を得ますならば、如何なる場合にも喜悅に満ち、勵みに満ち、花の如く笑み、鳥の如く歌ひ、恰も人世の苦痛を知らざるが如くにして、此世を渡り行くべきものと存じますれば、主よ、願くば今朝我等に人生の秘密の鍵を握らしめ給うて、如何なる場合にも超然として、世俗の外に立ち、悲哀の外に立ち得るものとならしめ給はんことを希ひ奉る、心疲れたる者、精神の飢えたる者、悲しめる者、惱める者が今我等の中に在りますならば、願くば其の悲しみと憂ひと惱みを取り去り給うて、主に在りて喜ぶ、其の喜びの心をお授けあらんことを希ひ奉る、聖靈よ我等と俱に在まして其の貴き賜の一部を授けさせ給はんことを、主の聖名によりて希ひ奉る、(アーメン)

アボロのコリントに居る時パウロ東の方の地を経てエペソに來り或弟子たちに遇て、之に曰けるは爾曹信者と爲し
 とき聖霊を受しや答けるは我儕は聖霊の有ことだに聞さりき、パウロ曰けるは然ば爾曹バプテスマを受て何に入られし
 や答けるはヨハネのバプテスマに入られたり、パウロ曰けるはヨハネは誠に悔改のバプテスマをなし民に、向て我の
 後に來る者すなはちイエスキリストを信ぜよと曰り、彼等これを聞バプテスマを受て主イエスの名に入られたり、パウ
 ロ手を其上に按ければ聖霊かれらに臨み異なる諸國の方言にて語かつ豫言せり、其人おほよそ十二人なりき。

(使徒行傳第十九章一七)

只今朝讀いたした如く、パウロが希臘のコリントと云ふ都府に足を止めて傳道をして居つ
 た、パウロは以前道を傳へた各地方の信者達は、何う云ふ風に進歩して居るか、其模様が見
 たいと思つて北亞細亞を巡回して、宗教の中心點とも云ふべきエペソに參つた、さてエペソ
 に來て見たところが、其處に數名の基督信者と稱へて居る者がある、エペソの信者であれば
 パウロは其の顔も名前も知つて居る筈であるが、一向面識の無い人々であつた、けれども基
 督信者と云ふのであるから、パウロは其の人達と會見したのである、さて會つて見ると、何
 うもパウロの眼に映するところは、彼等は基督信者とは違ふやうである、同情あるパウロの
 ことであるから何うして斯んなに違ふだらうかと思つて、能く／＼其の人達の模様を見て居

つたものと思はる、一言にして云へば容貌風采其他の模様が極く消極的である、其の意味を
 詳く申せば何だがギシ／＼したやうな、濕ひのないやうな信者であつた、パウロは思ひ切つ
 て尋ねて見た「あなた方は基督の信者となつた時に聖霊を受けましたが」否、私共は聖霊
 の有ることだに聞いたことはありませぬ、そこでパウロは自分の觀た所は違ひがないと思つ
 た、ギシ／＼した人々で、骨ばかりのやうでトンと濕ひがない、マア一つ問うて見やうと思
 つて「夫れでは聖霊を受けて誰れの名に入られたか」と尋ねたところが「私共はバプテス
 マのヨハネの名に入られました」と答へた、其時パウロは手を拍つて如何にもとマア言ふ
 べきところであるけれども、手は拍たなかつたであらうと思ふが心の中には今を去ること三
 十幾年の昔の世の中に出て、悔改めのバプテスマを施したのがヨハネである路加傳の初めを
 お讀になると、税吏が來て悔改めました、彼れが何う仕ませうと言つた時には、定まれる税
 の外に取る勿れと言つた、兵隊が來て何う仕ませうと言つた時には、汝が頂戴するところの
 給料に満足して居れ、人の物を引奪つたりなんか仕ちや可かないと云ひ、普通の人が來て
 何う仕ませうと云つたらば、二枚の衣服があるなら一枚は願かち與ふべしと教へたのがヨハ
 ネである、其ヨハネの感化が遺つて居つて、バプテスマを受けてヨハネの名に入られた、

一七六
 豫て猶太人はモーセの戒律に養はれて居る、キリスト時代の猶太人は表面だけ形式的にモーセの戒律を守つて居たけれども、何とか彼が逃路を拵へて内密では大分悪いことをして居つた、バブテスマのヨハネの説教を聞いた人々は、内密にモーセの戒律を潜ることは仕ない、夫れは可けない、眞實の心の底から律法通行を行らなければならぬと覺悟したのであるから、却々苦しい、其の苦しいことは羅馬書の七章十三節以下をお讀になれば能く分るパリサイ人のパウロが内密では律法を潜つて居つたが、さて本心が鋭くなつて來て、眞から律法を守らうと思つた時には一寸律法が守れない、實に困つた噫われ惱める人なるかなと歎息をする迄になつた。

丁度エベンに於てパウロの會見して信者と云ふは此の連中である、基督信者と云ふ名を冒しては居るけれども、其實はヨハネ信者であつた、私は此處を讀んで其の消息が能く分る、何うしてかと申せば自分が夫れをやつて來た、明治八九年の頃は私は熱心なる孔子の弟子であつた、「大學」「中庸」によつて心を正しうし、意を誠にしたいと思つて苦心したことがあつた、けれども是れは大失敗であつた、基督教の聖書を讀むやうになつて、孔子教が興ふる能はざる能力がわれに及んだ、腹の底から正しくなりたい、雜念妄慮の起り來るのが苦しく

一七七
 て堪らない、何うか心も行ひ正しいものになりたいと思つて洗禮を受けた、洗禮を受けて初めの一年間に考へた、自分は何で洗禮を受けたであらうか、こんな苦しい事ならば洗禮を受けなかつた方が宜かつた、取返し付かないことをしたと思つて實に苦しんだ、多くの人が洗禮を受けて、一年以内くらゐに基督教を廢して迷ひ出すのは其點である、何う云うことを信じて居つたかと云へば、孔子の教に皇天上帝と云ふのを基督教の造物主と云ふ方に替へただけである、聖人孔子を手本としたのを、聖人の聖人たるキリストを手本とすることに替へたいのである、孔子の教では胡麻化して居つた、基督教では胡麻化しが利かぬやうになつた、胡麻化しが利かないだけ夫れだけ苦しくなつた、痛かつた、辛かつた、今から其時の事を思うても、大方頬の骨は落ちて目は凹で、實に私の容貌風采までがギシ／＼して居つたやうと思ふ其の時分の寫眞を見ると、七月の末に友人と共に寫した寫眞の如き、頰骨が表はれ出で、痛た／＼しく瘦せて、單衣の下には骨の出で居る様が見えて居ると云ふやうな状態であつた、ヨハネと云ふのは即ち夫れだ、パウロが厭に感じただらうと思ふ、自分の事を思うても私は厭で堪らない、あなた方の中にも然う云ふ人がありはしまいか、自分は苦しくて堪らない、何で基督信者になつたらうか、洗禮を受けなければ宜かつた、取返し

のつかない事をしたと、若しさう云ふ方があるならば、私は深い同情を以てお氣の毒様と言はざるを得ない。

さてエベソの土地で見附け出された信者は、パウロが思ふに夫れはまだ入口だ、基督教では最う少し奥がある、その奥を悟らなければならぬと申してイエスキリストのことを説き聽かせた、言葉が簡單で分らないが、其の意味はイエスは聖人の聖人と云ふだけでは足りない、イザヤやエリミヤのやうな豫言者と云ふだけちやまだ足りない、エリシヤのやうな火の如き精神の人であると云ふだけちやまだ足りない、人の罪を責め人の不義を罵倒すると云ふだけちやまだ足りない、イエスは救主である、重きを負へる者瘦れたる者はわれに來れ、我れ爾曹を息ませんと云ふ愛の福音をお示しなされたる温かなる心の救主であることを聞かせられた、又君等が考へて居るやうな義の神、燃ゆる火なりと云ふ、人の罪や人の悪事を懲らして之れを罰し之れを責むると云ふ、正義の神と云ふだけちや足りない、キリストの神は天の父である、キリストの神は愛の神にて在しますことを懇ろに説き聞かせたであらうと思ふ、夫れと同時に此の律法を守らねばならない、固く律法を守らねばならない、何は喰うてはならない、何は飲んではならない、然う云ふやうにねばならぬ、してはならない、そんなに禁

すると云ふ一點張りて人を責道具で責めるやうな教ではない、キリストは救主である、キリストは慰安主である、キリストは罪を悔改めたるならば悔いし心愛して、何だかどうしてもキリストには魅せられて行く、おのが身体を引張られて行くやうな愛の能力があると云ふやうなことを説き聽かせたであらう、夫れをパウロが單に説き聽かせたと云ふだけであつたならば、餘り感化がなかつたかも知れない、パウテスマのヨハネの善行を行ふて居つた所課信者、そのパウテスマのヨハネがヘロデの不義な行ひを責めた逸話、頭を斬られる所で諫めて止まなかつた正義の精神……何だかヨハネの義烈な行爲を慕うて之れを手木として居つた所謂信者、夫れがサアパウロに接觸して見ると初めからお父さんのやうな祖父さんのやうな、何だか斯う自分の胸中を打明けて話さなければならぬやうな心持になつて、何うも今までパウテスマのヨハネの仲間を見て居つた眼でパウロを見ると、翠綠滴るばかりの初夏の山のやうな心持ち、花笑ひ鳥歌ふやうな何とも言へない趣のある人と見えただであらう。

そこで所謂基督教信者は非常なる感化を受けたものと見える、パウロは彼等の頭上に手を按いて祈つて呉れた、諸君！頭の上に手を按いて祈つて貰つたことが有るであらうか 私共

は牧師になる際に按手禮と稱へて頭の上に手を載せて祈つて貰つたことがある、又自分でも人の頭の上に手を載せて祈つたことがある、其の刹那の心持と云つたならば、罪も汚れも消え失せ清浄なる靈の体と變つて、さながら天津聖國に這入つたやうな心持がするのである、數名の弟子達がパウロに手を載せて貰つた、夫れだけでも最う此方の身体が溶けるやうな心持がして居る、そこへ持つて来て實に祈禱の力に富んだパウロが精神を籠めて、聖靈の降臨を祈つて呉れたのである、パウロが祈り終つた時には聖靈彼等の上に降りると書いてある、其の意味は何うかと云へば、直きに彼等は諸國の言葉を語り始め、且つ豫言せりとある、私は是れは間違ひだらうと思つて居る、五旬節の日にペテロの説教を聴き彼れの祈禱によつて、聖靈を受けたところの者が諸國の言葉を語り始めたと言つてあるからして、此處でも同じやうに諸國の言葉を語り始める、何にも諸國の言葉で語り始めるのは差支はない、佛蘭西語で話したければ佛蘭西語、獨逸語で話したければ獨逸語、支那語朝鮮語、學びさへすれば何でもやれる、そんなものは私共の聖靈の能力に關係はない、聖靈の能力を受けたのは今が今まででギシ／＼した、實に戒律的の信者で、言はゞ窒扶斯か何かに罹つて病みほうけたところの人間のやうな工合に、今までの罪には打勝ち、今までのやうな悪しき考は起らない、誘惑が

あるならば、力んで其の誘惑に負けないやうにやつて居る、何時も力んで居ると云ふ譯である、サア腹が立つ、が何うしても立ちやならぬ、もう込上げて来た、そこを氣張らなくちやならぬと云ふやうな場合に一生懸命に押へて居る、その人は修養せぬ人に比べて見たらば、それは修養するだけ結構である、腹が立つ時には土瓶を投げたり茶碗を投げたりする人に比べて見たらばウンと力んで腹を立てないやうにする方がナンボ益かも知れない、誘惑が來たら自然主義のその誘惑に負けて性慾を委にするに云ふよりも、力んで之れに負けないやうにするのはナンボ益かも知れない、酒を廢め煙草を止めるのが基督信者であるかのやうに思つたのは二十年以前のことであつた、酒も飲み煙草も喫ひ、偶像を拜んで居る人間に比べて見たらば、夫れを棄てた人はどれくらゐ益かも知れないが唯夫れで基督信者であると思つた、間違ひであるそれは基督敎の入口……もう一つ斯敎の奥に達せねばならぬ、私が何を棄てました、何を棄てましたと云つてえらい棄てたことを自慢にする、何を棄てたと云ふことも大切であるが、何を得たと云ふことは更に大切である、あなたは基督信者になつて何をえましたか、イヤまだ何も得て居りませぬ、棄てただけである、棄てたけちや賞めたものではない、積極的と云ふのは最う一つ得なくちやならぬ、パウロの造つた基督信者は成程多

くものを棄てたであらう、弟子方も始終我等は家を棄て妻子を棄て田畑を棄て魚類を獲る道具を棄て、あなたに従ひましたと云つたことがある、誰れでも初めは棄てる、けれども今度には得なくちやならぬ、掴まなくちやならぬ何を得なくちやならぬか、第一に得なくてはならないものは愛の心である、今までは形式的に遣つて居つた、先日私は宣教師の家へ泊つて居つて其人はもう日本に三十五年居る信者で、其の人が斯う云ふことを言ふたのを聞いて、日本に於ては嘘の深切と本當の親切をゴチャ交せにして居るやうで御座います、嘘の親切が多くて本當の親切が乏しいやうである、私は時々嘘の親切で困らされますと附加へた、何うも日本の事情に能く通じて御座ると思ふ、嘘の親切ならば宿屋の下女でも亭主でも出来る、嘘の親切ならば役者でも藝妓でもやつて居る、我々が基督教に依つて得なければならぬ愛の心と言ふは、本當な親切と云ふことである、八方美人の可い加減なことを言うて、人の御機嫌を取つて行くのが嘘の信者である本當の親切は面と向うてあなたは此點が可けない、彼點が悪いからお改めなさいと云つて、其人に迫る所が無くてはならない、然う云ふやうなことを本當の友情があれば仕なくちやならぬ、其の心は何うしても私共に得なくちやならぬ、夫れと共に得たいのは喜びである、基督信者になつた喜び、天の阿父様を見出した喜び、地の救主

を見出した喜び、世の慰安主を見出した喜び、親類の爲めにはおのが生命をも棄て、此の喜びの音づれを傳へなければならぬ、飛立つばかりの喜びを銘々の心の中に得なくちやならぬ、其の喜びを得て居るか否や。

それから温良と云ふ、腹が立つたら實に厳しい顔をして睨み附ける、氣に入らぬ人があつたならば白眼を以て睨む、それは温良ぢやない、温良と云ふのは我れに無禮を加ふる人があつても、我れを罵る人があつても、氣の毒な人だ、ア、云ふ氣の毒な人の爲めに祈らなければならぬと思つて、其の人の爲めに天の祝福を求むると云ふ考になれば、此方の容貌が穩かになつて来て、如何にも其の人の顔には角か無いやうになるところが夫れである、其の温良を得ることが大切である、加拉太書五章の二十二節二十三節をお開けになると云ふと、靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、撻節かくの如き類を禁ずる律法はある事なし」と書いてある、あれが即ち基督信者が得なくちやならぬものである、何うして夫れを得られるかと云へば、聖靈が私共の心の中に這入つて、其の聖靈の能力によつて天の父を本當に父と信じ、キリストを本當に救主を仰ぎ、更に聖靈を慰安主に仰いでさうして、此の聖父聖子聖靈の神が我が心の中に這入つて、さうして我が心を造り變て下さる

と云ふことによつて、今まで不親切な心の者も、愛の心に満たさるゝやうになり、今まではヒステリー、神經衰弱で憂ひ悲しんで居つた者も喜ぶやうになり、今までは何うも直ぐに腹が立つて人と衝突するやうな人が温良になり、今まで辛抱のなかつた人が忍耐をし、今までは美味物が有ればナンボでも喰ふ、好きな酒なればナンボでも飲むと云ふやうな人が、我れ誤てりと云つて其の罪を悟ると云ふやうな、何んとも言へぬ愛の徳、義の徳、總ての徳が表はれ來るところを言ふのである。

私は今日の教訓を讀んで所謂基督信者になつて、只ギシ／＼として、戒律的の信者と云ふ程度に止まつたらば、直きに氣の毒な人になる、更に聖靈の御感化を受けて基督教の奥妙なる妙境に這入つて、仁愛、喜樂、慈悲、良善、擗節と云ふやうなことが銘々に加はり來りて、腹の底から喜びと勵みに満ちて感謝の生涯を送れるやうになつた時には、即ち靈化された人である、聖靈に依つて感化された人である、然う云ふ基督信者にならなければ、折角信者となつても成り甲斐がない、何うか今日の教訓を更に細いてお讀みになつて、爾曹信者となりて聖靈を受けしや、我等は聖靈の有ることだに未だ聞かざりき、さらばパウテスマを受けて誰れの名に入れられしや、孔子の名に入れられた人もあらうし、日蓮上人の名に入れられた

人もあらうし、教育勅語の名に入れられた人もあらう、夫れは悪いことはない、夫れだけでも持たない者に比べて見れば結構であるけれども、最う一步奥に踏込んでイエスキリストの名に入れられたと云ふところが無くちやならぬ、更にもう一步踏込んで聖靈各自の心に降り、今お話しするが如き果を結ぶやうにならなければ、神が喜び給ふ基督信者、キリストが我が心を得たりと御賞讃なされるやうな信者とは言へないのであるから、御同様に一つ此處を讀んで、パウロが基督信者を感化して誠の信者たらしめた如く、私共もこの意味から考へて見ても眞誠の信者となつて、感謝の生涯を送りたいものであると思ふ。